

平成24年9月

## 田村喜子先生を偲ぶ・特集号

### I. 田村喜子・思い出のアルバム

1

### II. 田村喜子先生の遺徳を偲ぶ

9

・足立 紀尚  
・足立 敏之  
・阿部 悟  
・有岡 正樹  
・井出 康郎  
・猪股 純  
・岩井 茂樹  
・大田 弘  
・大村 敦  
・尾木 幾子  
・忍見 武史  
・折谷 泉  
・折谷 久美子  
・上総 周平

・阪田 憲次  
・佐藤 馨一  
・佐藤 昌志  
・島谷 幸宏  
・下村 嘉平衛  
・須田 清隆  
・関 博之  
・高橋 裕  
・高橋 渡  
・竹林 征三  
・竹村 公太郎  
・建山 和由  
・田中 雄作  
・新山 惇

・西村 泰弘  
・平野 令緒  
・福沢 恵介  
・藤兼 雅和  
・藤本 貴也  
・真砂 徳子  
・三浦 裕二  
・村橋 正武  
・持山 銀次郎  
・森田 康志  
・山田 正  
・吉崎 収

### III. 田村喜子先生の足跡

71

- (1) 田村喜子・『心の風土記』未刊・目次
- (2) 田村喜子先生語録
- (3) 田村喜子先生の遺徳を偲ぶ伊呂波歌留多
- (4) 田村喜子先生の活動記録
- (5) 田村喜子先生有り難うございました



特定非営利活動法人

風土工学デザイン研究所

# 「田村喜子先生の遺徳を偲ぶ」特集号

〔Ⅰ〕 田村喜子・思い出のアルバム	1
〔Ⅱ〕 田村喜子先生の遺徳を偲ぶ（五十音順）	9
・ 田村喜子先生を囲む会と旅	足立 紀尚 10
・ 「過ちの子」たちが偲ぶ田村喜子先生	足立 敏之 12
・ 「土木の応援団長」お疲れ様でした。	阿部 悟 14
・ まーいい会	有岡 正樹 15
・ 知床と芝桜	井出 康郎 17
・ 土木人の心を愛した女性	猪股 純 18
・ 静岡とのご縁	岩井 茂樹 19
・ 貴女は「土木の太陽」だった	大田 弘 21
・ 田村喜子先生への感謝の想い	大村 敦 23
・ 田村先生との22年	尾木 幾子 24
・ お土産	忍見 武史 25
・ 北海道に夢かける	折谷 泉 26
・ 胡蝶蘭の華	折谷 久美子 27
・ 田村喜子先生の思い出	上総 周平 28
・ 余部鉄橋物語	阪田 憲次 29
・ 北海道浪漫鉄道の終着駅 ―北海道新幹線札幌駅―	佐藤 馨一 31
・ 故田村喜子先生との思い出	佐藤 昌志 33
・ 田村喜子先生	島谷 幸宏 34
・ 田村喜子先生の思い出	下村 嘉平衛 35
・ 義と情の厚い田村先生を偲ぶ	須田 清隆 36
・ 田村喜子先生を偲んで	関 博之 38
・ 国土建設の浪漫を追う	高橋 裕 39
・ 田村喜子先生を偲ぶ	高橋 渡 41
・ 全国ダム巡りの旅	竹林 征三 43
・ One of Them	竹村 公太郎 46
・ 京都のステディー	建山 和由 48
・ かばん持ち	田中 雄作 49
・ 『北海道浪漫鉄道』と「技術屋のこころ」 ～北海道開拓の源初点～	新山 惇 50
・ 故田村喜子先生を偲んで	西村 泰弘 53

・不思議な縁	平野 令緒	55
・ヤポンスキージュラウリ（丹頂鶴）	福沢 恵介	56
・チークダンス	藤兼 雅和	59
・土木技術者の永遠の恋人 田村喜子先生の見事な人生	藤本 貴也	60
・こころの教え	真砂 徳子	62
・田村喜子先生を偲んで	三浦 裕二	63
・果てしなく美しい日本を造る	村橋 正武	64
・感謝	持山 銀次郎	65
・田村先生、ありがとうございました	森田 康志	67
・成都と都江堰と田村喜子先生	山田 正	68
・田村先生とティオペペ	吉崎 収	70

### 〔Ⅲ〕 田村喜子先生の足跡

(1) 『心の風土記』未刊・目次	71
(2) 田村喜子先生語録	72
(3) 田村喜子先生の遺徳を偲ぶ伊呂波歌留多	76
(4) 田村喜子先生の活動記録	82
(5) 田村喜子先生有り難うございました	86

### 〔コラム目次〕

・岩井茂樹さんと風土工学	20
・「京都インクライン物語」中村英夫 解説	28
・「むろまち」の序・水上勉	32
・雪国食堂の暖簾	35
・石原勝とのエピソード	42
・「浪漫列島・道の駅めぐり」より	42
・田村喜子著作集の中で唯一の共著作	45
・ラジオの生放送で風土工学を解説する	45
・田村喜子も筆の誤り	45
・田村喜子先生のペンの叫び	54
・「ヤポンスキージュラウリ」の歌詞 田村喜子 作詞 福沢恵介 作曲	57
・「生保内川恋歌」の歌詞 福沢恵介 作詞・作曲	58
・「京そだち」瀬戸内晴美氏評より	61
・「カムイ伝説」の歌詞 田村喜子 作詞 原正美 作曲 森山良子 歌	66
・釋尼優心の眠る黒谷墓地	69

# 〔I〕 田村喜子・思い出のアルバム

## (1) 出版物に見るポートレート



「心の風土記」



「京そだち」



「道の駅めぐり」

(2) 田村喜子先生の表情 (その1)

——知的で、明るく、愛らしく、未来を見つめる眼差し——



(3) 田村喜子先生 幼少から社会人へ (その1)



小学生の時の表彰状



西京大学 (現京都府立大学) 入学



堀川高女時代



若き日の田村喜子と市田ひとみ



大学生時代



記事執筆中



新聞社内の田村喜子



取材する眼差し

(4) 田村喜子先生 土木工事現場・最前線に立つ (その1)



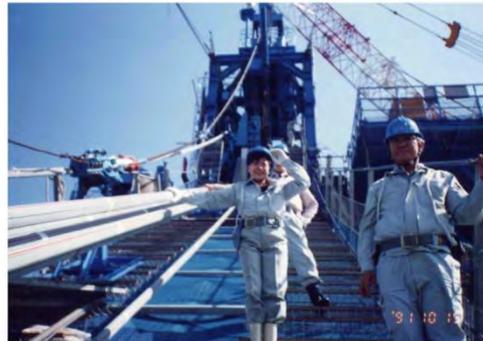
共同溝



線路保線 (JR 西日本)



流域下水道 (大阪)



明石架橋 ケーブル足場



鉄塔の最高所



京都インクラインを歩く



竜門ダムにて



三国川ダムにて

(5) 田村喜子先生 全国各地・旅を楽しむ (その1)



天塩川にて (カヌー体験)



昭和新山・乗馬の体験 平成2年5月12日



琵琶湖疏水を下る



オホーツクの流氷を体験



音楽を楽しむ



都江堰の旅 食を楽しむ



食を楽しむ・雪国食堂 (札幌)



釧路漁港で食を楽しむ

(6) 田村喜子先生 多才な人々との出会い (その1)



森繁久弥さん (知床旅情)



淡谷のり子



市田ひろみ (服飾評論家タレント)



市田ひろみ・土木学会



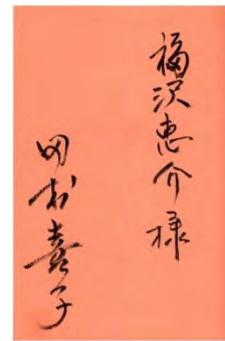
高橋裕先生と



高橋裕先生と



真砂徳子 (キャスター)



福沢恵介 (シンガーソングライター)

(7) 田村喜子先生 多くの人に思い出を作る

——田村喜子先生の周りにはいつも人が一杯——



大深度地下空洞



田辺朔郎五十四回忌法要



台湾八田与一を偲ぶ旅



長良川河口堰現地視察



米国河川視察・高橋裕先生と



余部鉄橋現地視察



有岡邸・まーいい会



東京タワーを背景に喜寿会

(8) 田村喜子先生 風土工学の思い出 (その1)



田村・有岡・竹林 看板除幕



田村・竹林・二人三脚の旅



「鬼翔平物語」最優秀賞受章



鬼翔平・現地視察 (力丸先生と)



年始はダルマの目入れから



感性工学会 著作賞の受賞記念



風土調査 花めぐりの旅 滝上の芝ざくら



風土調査・奥尻島

## 〔Ⅱ〕 田村喜子先生の遺徳を偲ぶ

当、風土工学デザイン研究所の前理事長田村喜子先生が3月24日にご逝去されてから早、半年近くになる。

会員を始め、多くの方々から田村喜子先生を偲ぶ特集号を企画して欲しいとの要請を受けて、田村先生とご親交が深かった方々に玉稿をお願いしたところ、幸いにも多くの方々から賛意を寄せて頂いた。ここに特集号を発刊する運びになった。

玉稿を読ませて頂き、田村先生の大変な徳の高さが偲ばれるもの、お人柄が彷彿される内容ばかりで、目頭が思わず熱くなって参ります。

ここに、玉稿を寄稿して頂いた皆様に衷心より感謝申し上げます。

(御芳名の五十音順)

・足立 紀尚 …………… 10	・関 博之 …………… 38
・足立 敏之 …………… 12	・高橋 裕 …………… 39
・阿部 悟 …………… 14	・高橋 渡 …………… 41
・有岡 正樹 …………… 15	・竹林 征三 …………… 43
・井出 康郎 …………… 17	・竹村 公太郎 …………… 46
・猪股 純 …………… 18	・建山 和由 …………… 48
・岩井 茂樹 …………… 19	・田中 雄作 …………… 49
・大田 弘 …………… 21	・新山 惇 …………… 50
・大村 敦 …………… 23	・西村 泰弘 …………… 53
・尾木 幾子 …………… 24	・平野 令緒 …………… 55
・忍見 武史 …………… 25	・福沢 恵介 …………… 56
・折谷 泉 …………… 26	・藤兼 雅和 …………… 59
・折谷 久美子 …………… 27	・藤本 貴也 …………… 60
・上総 周平 …………… 28	・真砂 徳子 …………… 62
・阪田 憲次 …………… 29	・三浦 裕二 …………… 63
・佐藤 馨一 …………… 31	・村橋 正哉 …………… 64
・佐藤 昌志 …………… 33	・持山 銀次郎 …………… 65
・島谷 幸宏 …………… 34	・森田 康志 …………… 67
・下村 嘉平衛 …………… 35	・山田 正 …………… 68
・須田 清隆 …………… 36	・吉崎 収 …………… 70

## 田村喜子先生を囲む会と旅

足立 紀尚

1990年代の後半であったと思う。田村喜子先生に初めてお会いしたのは、八坂神社の近くにある、なじみの飲み屋「みずき」であった。「みずき」のママが先生の友人であり、よく顔をだされておられたらしい。その日は、馬鹿話で終始したが、先生の取巻きの一人として認知されたつもりになったが、京都大学では、先生はすでに村山朔郎先生や天野光三先生と懇意にされていることも知った。「みずき」の客は土木屋が多く、田村先生がお見えになるとの情報が入ると、「田村先生を囲む会」の開催が常となり、私の知人も囲む会の仲間に加わる一方、先生を通して新たな知人が増えることにもなった。写真-1は、ある日の囲む会で鹿島建設や飛鳥建設の諸氏との一葉である。



写真-1 “みずき”における、ある日の先生を囲む会

まず、新たな仲間は、シールドトンネル用のNMセグメントが取りもつ新日本製鐵の中村稔さんと松村哲男さんである。中村さんはNM

セグメントの発明者である。NMとは何の略かとの問いに、「New Mechanical」とのこと。意味不明な命名だと言うと、実は発明者の「中村・松本」からNMとしたとの答え。それならわかると納得した。松村さんは平成元年に発生した越前海岸の岩石崩落事故に対する調査委員会の委員長を務めた際、建設省からの委員として参加しており、退官後新日本製鐵に勤務されており、再開はまさに奇遇であった。NMセグメント技術の完成は、大阪府発注の北部地下河川花博工区を請け負った鹿島の石村勝宏所長によると言っても過言ではない。その現場に、新日鐵の平尾隆さんが訪れた際、案内した中村さんが田村先生の「京都インクライン物語」を平尾さんにプレゼントしたそうである。平尾さんはそれを読み、是非著者に会いたいと希望を述べ、後日実現したところ、田村先生が平尾さんの年上の姪にあたることがわかり、田村先生を囲む会が新日鐵主催で開催されることが増えた。平尾さんの副社長昇任のお祝いの会やその他の集まりが、麻布の田村邸で開かれた際には、佐藤信秋現参議院議員や佐藤直良現技監をはじめ国交省の多くの方々と知り合う機会となった。一方、大学同期の榎波義幸元関東地建局長や教え子である東京電力の角江俊昭君や国交省の七條牧生を同行したりもした。

京都「みずき」での集まりには、建設会社のメンバーが中心だったが、関西電力の常務を勤めた原田稔さんや鉄道総研の小山幸則現京大教授の参加する機会も増えた。ある時、黒部の冬の氷筍が話題となり、是非見に行こうと言うことになった。原田さんのお世話で、

2001年2月16日～17日の行程で黒部ダム訪問が実現した。写真-2は、お目当ての氷箭を眺める一行の写真である。なお、16日は寒風吹きすさぶ中、松本城を訪れたが、17日は快晴で暖かい春の一日となり、黒部ダムの積雪の上に立ち、立山の冬の雄姿を満喫することもできた。



写真-2 黒部の氷箭を前に立つ田村先生と一行

現在、中央リニア新幹線は、ルートもおおよそ決まり、アセスの段階にあり、試験線は当初計画の42kmの延伸工事も着実に進められている。10年以上も前の2001年9月19日、鉄道総研の河田博之さんや小山幸則さんをお願いして、山梨県大月にある試験線の基地を訪れ、リニアモーターカーに試乗することができた。これには、大阪市交通局の元本部長であった岸尾俊茂さんも同行した。写真-3は、リニア車中の田村先生である。



写真-3 リニア車中の田村先生  
(左より岸尾・河田・足立・田村先生)

2001年の夏には、横浜のMN21のNMセグメントを用いたシールドトンネルの現場を訪れるなど、先生との旅が多い年であった。その後も先生を囲む会は途絶えることなく続いた。先生との会話は、駄々っ子の弟が言うことを、「そうか」、「そうか」と聞いてくれる姉との間の様相を呈していたが、時には厳しく批判を受けたこともあった。

2012年1月27日、平尾さん、中村さん、松村さんならびに清水建設常務の井出和雄さんと5人で、転居された三田の先生宅にお見舞いに伺い、夕日を眺めながらビールをいただき、一時間ほどで辞した。先生とご一緒できた最後の日となった。敬愛する姉を亡くしたような寂しさが今も続いている。(1793文字)

(財団法人地域地盤環境研究所理事長、京都大学名誉教授)

## 「過ちの子」たちが偲ぶ田村喜子先生

足立 敏之

「過ちの子」の話を皆さんご存じでしょうか？ 私の記憶では、田村喜子先生の第1号の「過ちの子」が家田仁先生（東京大学社会基盤学教授）、第2号が上総周平さん（国土技術政策総合研究所長）、そして第3号が不肖私といったところでしょうか？

私が、田村喜子先生と初めてお会いしたのは平成6年6月3日、私が事務所長をしておりました宮ヶ瀬ダムの工事現場です。そのときお会いしてすぐにこの「過ちの子」の話を伺いました。「私が東大の家田先生を私の過ちの子と言ったという話を聞きつけてきて、あなたの同級生の周平ちゃん（上総周平さん）が僕も息子にして～と言うたんよ。」とのお話でした。先生がおっしゃった「過ちの子」は、「私が学生の頃に過ちをおかしたとして生まれたであろう子供」と私たちと同じ年格好だからということだったと思います。確かに、私の母親は先生と同じ昭和7年生まれですから、あながち間違った話でもないと思います。ことのはじまりは飲んだ上での話だったようですが、そんなことなら上総さんの同級生の私はやはり第3号ということだと納得したわけです。私と先生はお会いした端からこんな話で盛り上がりました。

もう少し詳しく、先生と初めてお会いしたときの話をさせていただきます。

当時、私は建設省宮ヶ瀬ダム工事事務所の所長しておりました。その現場に、(財)ダム水源地環境整備センターの下村周企画部長の案内で、先生がお見えになりました。現場の案内は、私と本体JVの田代民治所長（現鹿島建設株式会社副社長）が務めました。

私は40歳になりたての若手所長で、「日本一のダムづくり」をキャッチフレーズに全力投球で最盛期を迎えたダム建設に取り組んでいました。私自身は、秋田の玉川ダムの現場で工務課長と調査設計課長を担当させていただき、ダム事業担当の河川局開発課の課長補佐を経て、平成4年の秋に宮ヶ瀬ダムの所長になりました。玉川ダムはRCD工法の最初の本格的ダム、宮ヶ瀬ダムはRCD工法の集大成のダム、当然のことながら私自身ダム屋としての誇りを持っています。ちなみに、私は玉川ダムで約50万m<sup>3</sup>、宮ヶ瀬ダムで約150万m<sup>3</sup>、合計200万m<sup>3</sup>のコンクリート打設を経験しましたが、現役ではナンバー1の打設量でしょうし、これを超える職員はおそらくもう出てこないのではないかと自負をしています。

さて、ご一緒に先生を案内した本体JVの田代所長ですが、川治ダムから引き続いて宮ヶ瀬ダムの現場を担当されておられまして、いかにもダムの申し子というような方でした。田代所長は私の尊敬する大先輩でありましたが、徹底的に技術論を闘わせた良きライバルでもありましたし、ともにあきれかえるほど様々なイベントを展開した良き戦友でもありました。こうした絆が、今でも私たちの間ではしっかり繋がっていると確信しています。

当時の宮ヶ瀬ダムでは、建設省の職員だけでなく、現場で働くJVの皆さん、そして作業員や詰め所・作業員宿舎の職員の皆さんまで、「日本一の宮ヶ瀬ダム」のために昼夜を分かたず団結して頑張っていました。

先生は、私と田代所長とでご案内した宮ヶ瀬ダムの様子をつぶさにご覧になり、工事現場の話だけでなく人間ドラマとして宮ヶ瀬ダムの現場を「建設業界」の10月号に紹介していただきました。田代所長が「土木のマエストロ」としてとてもドラマチックに、そして格好良く紹介されています。私たちも田代所長がお誉めいただいたことを、まるで自分たちのことのように喜びました。私自身も先生から「ミスター・ビオトープ」などと呼んでいただき、環境保全に関する先駆的な取り組みについても紹介をしていただきました。先生は、私たち土木の技術屋の想いを真に共有していただいた貴重な理解者であったと思います。

その後、私はそのときの御縁もあって、先生に河川審議会をはじめいろんな審議会、委員会の委員をお願いしました。先生は、いやな顔ひとつみせず、いつもご快諾いただき、大きな役割を果たしていただきました。また、厳寒の北海道や奈良吉野のダムの現場などにも一緒に行っていただきました。改めて心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

また、大泉学園のご自宅から、広尾のマンション、麻布十番のマンションと、上総さんをはじめたくさんの仲間と何度もおいしいお酒をいただきにまいりました。時には大いに羽目を外して、本物の息子さんにも加わっていただき大騒ぎとなったこともありました。楽しい時間をすごさせていただき感謝を申し上げます。ありがとうございました。

さて、先生と最後にお会いしたのは平成23年6月13日、先生の麻布十番のマンションでした。上総さんと大学の1年後輩の乗京君（飛鳥建設株式会社建設事業本部副本部長）そして新井さんというメンバーで、先生の快気祝いをおかねて飲み会をさせていただきました。先生にお会いするのは「余部鉄橋物語」の出版記念パーティー以来でしたが、非常にお元気でしたので私たちは大いに安心したのですが、最後に先生から「また癌が見つかった」というお話を伺いました。私自身は、その日が先生にお目にかかった最期となりました。再び体調を崩されたときに上総さんからお見舞いに行こうと誘われましたが、時間がつくれずお会いできなかったことが、今になって悔やまれてなりません。心からご冥福をお祈り申し上げます。

このように、田村先生は私たち「過ちの子」たちにたくさんの思い出を残していただきました。先生の愛された土木の世界を、これからは私たちがしっかり盛りたてて行くことが先生から私たちに与えられた使命だと思っています。私たちも微力ながら頑張りますので、引き続き暖かく見守っていただければ幸いです。本当にありがとうございました。(2397文字)

(国土交通省中部地方整備局 局長)

## 「土木の応援団長」お疲れ様でした。

阿部 悟

田村先生との出会いは、一九九七年日本道路協会の雑誌「道路」に道の駅めぐりを執筆される際、事務局させて頂いたことがきっかけです。先生には、約二年にわたり総移動距離およそ六万七〇〇〇キロにわたる旅をして頂きました。概ね月二回程度の頻度での取材、かなりの強行スケジュールにもかかわらず、精力的に取材をして頂きました。

この取材の中でご一緒させて頂いたことが、1回だけありました。先生の大好きな北海道（網走）です。著書の中では「北海道浪漫鉄道をゆく」と題して、地域の歴史や文化さらには風土、人々の営みなど幅広い視点から、道の駅をご紹介されました。取材は地域の方々の対談やインタビューが中心で、朝早くから、夜遅くまで食事の最中も含め本当に多くの方々からお話を聞いておられました。取材中はこれがどのようにまとめられるのか、全く想像もできないほどいろいろな方々からお話を聞いておられました。連載ですので、二週間程度で、執筆することになるのですが、先生は膨大な資料とインタビューを、現地の営みがリアルに感じられるような原稿に仕上げられ、まさに魔法使いのような執筆にとっても驚きました。（ちなみに、この期間先生の部屋は膨大な資料に埋もれておりました）

帰りの飛行機で先生から「現地を訪れる、実際にその地に足を踏み入れることはもっとも重要なこと。」「テレビで見る野球とグラウンドの大歓声の中で観戦する野球ほど違うのよ。」と言われました。土木と同様、写真や図面では表し尽くせない現場の空気と直にふれあうことの重要性を表現されたのだと思います。

非常にわかりやすい説明かつ、表現のすばらしさに感動を覚えたこと今でも思い出します。先般も先生の著書を少し読み直させて頂きました。以前にも増して現場の空気が感じられるような気がしました。先生が生前お話していた「土木の心」少しでも感じられるよう精進したいと思います。

今日、道の駅は全国で約1000カ所。数多くの個性的な道の駅、道の駅を運営する方々、利用される方々に生まれ、大きな成長を遂げたと思います。これも先生が初期の段階（執筆された当時は全国で129カ所の道の駅）で「道の駅」を周辺の歴史や風土の探訪、運営する人々など個性的ですばらしい方々をご紹介して頂いたことも大きな飛躍に繋がっており、その意において、ご執筆された浪漫列島「道の駅」めぐりは、土木の応援団長の偉大な活動記録であったと思います。これからもいろいろな場面で元気がなくなった時には浪漫列島を再度読み返し、勇気と元気を取り戻したいと思います。本当にありがとうございました。そしてお疲れ様でした。（1121文字）

（高崎河川国道事務所）

## まーいい会

有岡 正樹

もう 30 年以上も前のことになります。大阪地下鉄工場の現場で働く私に父から “小学校の教え子で田村喜子さんという女性から電話があるはずだからよろしく” と電話がありました。“彼女が京都のインクラインのことを書いているが、土木のことが良くわからない。正樹ちゃんが確か土木屋さんだったと聞いていたので、会っていろいろ教えてもらいたい。”との依頼のようでした。折り返すようにして先生から電話がありましたが、もちろん私も京都生まれの京都市育ち、岡崎のインクラインから疎水にかけては子供の頃良く遊びに行きましたので、先生の話は手に取るように分かりましたし、小説に書かれようとしている田辺朔朗先生のこと、土木の大先輩として、そして京大土木工学教室旧館ロビーで見慣れた胸像を介して、良く知っていましたのですぐ話が通じました。ただ、インクライントンネルは山岳トンネルで、私は熊谷組に入社後 15 年間ずっと地下鉄といういわゆる都市土木に携わっていましたので、“硬いトンネルはどうも”と経験不足を伝えた後、“同じ現場の所長が、山岳トンネルを 5 つも、6 つも経験している”と話すので大喜びで、3 日を置かずして現場へお見えになったのを思い出します。その所長は丁度先生と同世代の斉藤修さんで、「京都インクライン物語」のあとがきに、私と一緒に謝辞として名前を上げてもらっています。

現場には 2 回お見えになったと思います。トンネル技術的なことももちろんですが、事故といった辛いことを含め、現場でいろいろの状況に遭遇しての土木技術者としての、男としての感性についても多く質され、小説家の目を感じたことを憶えています。いま改めてその作品を読み直してみても丁度全編の三分の一あたりに、朔朗が工部局新任官（工部大学校実地科学生）として学術研究のために京都を訪れる途中、完成間もない逢坂山鉄道トンネルに立ち寄りその業績に惹かれていく様子が描かれています。“トンネルに入って技術者としてまずすることは？”と聞かれた斉藤所長が、“側壁に手を触れてみて湧水のことを思ったり……”と答えておられたことなどが反映されています。

その後もちょっとしたことでも電話で問い合わせがあったりして、半年くらい経って出版されたのを知りました。土木学会著作賞の最初の受賞者となられたことは周知の通りですが、その受賞記念パーティに父と共に招待され、作家の水上勉氏などとも話をしました。そのあとすぐ、私は東京に転勤となり、そしてオーストラリアをベースに南太平洋地域での土木事業に関わることとなります。その間 7 年余、先生が鉄道土木分野の小説に取り組みまれている活躍は知る由もありませんでした。

以上を先生との縁の前半としますと、後半は帰国後から先般先生が亡くなるまでの約 20 年間ということになります。娘の大学生活が 1 年残っているとの理由で妻子を残し、1991 年 4 月私が逆単身で帰国して悶々とした日々を送っていたときに、大学同級生の竹林征三君（当時建設省）が声を掛けてくれて、田村先生を誘って奈良県の大滝ダム現場を見学に

行こうということになりました。それを機に風土工学を介しての彼と田村先生との切っても切れない縁というか、二人三脚が始まります。その後立山砂防ダムや、先生が大好きな北海道には2回もといった具合で時折一緒に旅をしましたが、そんな縁を得て自然発生的に出来た「まーいい会」という親睦会で、毎年2月頃に我が家に集い5, 6時間の楽しいひとときを過ごすことが続きました。松居さんという先生の高校時代の先輩と、あとは竹林、田中、竹岡という同級生に私を入れて5夫婦が先生を囲んでということで12年ほど続いたのでしょうか。私の娘も仲間に入れていただきいろいろのことを勉強した時期でもあります。先生だけ独身というのも、ということでその時折男性一人を招待したり、時には別の夫婦を特別ゲストとして招いたりして、14, 5人が狭い家でまさにワイワイ、ガヤガヤでした。ある年(1996)にはその最中に北海道の豊浜トンネル落盤事故のテレビニュースが入り、先生が建設省関係他いろいろの知己に励ましの電話をされたりして、パーティどころではない一日もありました。

そんな自宅での会も12年を機に外食に変更して、その都度店を選んで集まって旧交を温めるというレベルとなりました。もちろん先生とは土木学会の催し物や、新著の出版記念パーティ等でお会いしお元気な様子を確認したり、先生が昨年まで理事長であったNPO法人「風土工学デザイン研究所」では私が理事、私が理事長を務めるNPO法人「社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会」では先生に顧問をお願いしてということで、公式の場でもお付き合いいただきました。ただ、一昨年あたりから体調を崩して入退院され、「まーいい会」の仲間心配していたのですが、昨年6月5日南麻布の超高層マンションにお邪魔した後、近くのレストランで快気のお祝いをしたのが、家族でお会いする最後となってしまいました。私個人としては、9月30日の「風土工学デザイン研究所理事長ご退任、ご苦労さまでした」パーティが最後でした。

インクラインの件で最初にお会いしたとき、“正樹さんはもちろん憶えていないでしょうが、生まれたとき有岡先生に呼ばれて大久保町の自宅にお邪魔し、赤ちゃんだったあなたを抱いたのよ”と開口一番話されたのがいまでも忘れられません。その時以来、いつも“正樹さん”と気安く声をかけていただき、その都度いろいろお教え願うことばかりでありました。早く母を亡くした私には、先生の優しさにどこかその母の姿を見ていたのかも知れません。

天国で昔の仲間と“まーいいか”と明るく受け答えされている様子が目に浮かびます。30余年の長きに渡りお世話になり、本当にありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。合掌。(2447文字)

(NPO法人「社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会」理事長)

## 知床と芝桜

井出 康郎

もう4年前のことですが、田村先生の知床視察に同行したのが、今でも先生の思い出とし強く残っています。それまでは、先生とは講演会とか勉強会等で顔を合わせる程度のお付き合いでしたが、知床を案内してほしいと頼まれ、たまたま一緒に行くこととなった次第です。

時節は確か五月の末か六月の初めだったと記憶しています。仔細は忘れましたが、夕方、釧路で合流し、釧路川の岸壁沿いの屋台でホッケなどを炙りながら食事をしました。その後で美川憲一の歌で有名な幣舞橋を散策しながら、夜の街に繰り出すことになりました。先生は相当に釧路の夜がお気に入りの様子で、大変上機嫌で、仕舞いには、先生が作詞をされた森山良子の神威岬をお歌いになられたことが、今でも強く印象に残っています。翌日、車窓から国後島や択捉島を見ることが出来ました。また、知床の生態系保全上の課題として、サケ科魚類等の遡上、降海問題や、アライグマなどの外来種の侵入、エゾシカによる食害などを説明していると、羅臼の街中ではエゾシカが我が物顔で民家の軒先を群がって歩いている様子を見て、エゾシカの実情に大変驚かれるとともに関心を持たれた様子でした。

途中、知床峠では霧がかかっていましたが、幸いなことに知床五湖に着いた時には、絶妙のタイミングで晴れとなり、先生の知人の斜里町役場の方の案内で知床五湖を散策。クマとの共存のために作られた高架木道を歩いて第一湖へ向かうと、知床の山々がよく見え、またエゾシカの群れが若木の枝を食っている姿を目の前で見られ、驚かれた様子。ウトロの町では、シカが市街地に入ってこないように街中柵で囲っており、また、国道334号ではエコロードを視察し、ロードキル対策と云うより、むしろ人間保護のおりですねと。この夜は、網走湖畔の温泉宿に宿泊し、翌日、いくつかの道の駅を周りながら、滝の上を経由して札幌に向かう。紋別から滝上をめざし国道を走っていると、急に山の斜面が一面ピンク色となり、芝桜公園が現れました。ピークは五月の初から中旬が見どころだそうですが、まだまだ一面がピンク絨毯を敷き詰めたようにシバザクラに覆われ、また甘い香りに包まれ、見事な風情でした。

ちなみに、この滝上公園のシバザクラは広さ甲子園球場の約7倍の10万平米で、日本一の規模だそうです。先生は大変お喜びになられた様子で、その後にお会いする機会があるとシバザクラのことを嬉しそうにお話されるのを聞き、アテンドした当方にとって大変有難いことです。

終わりになりますが、先生から、ちょっと辛口な批評を言っただけでなくなったのは、大変残念です。心よりご冥福をお祈り申し上げます。(1107文字)

(肩書き)

# 土木人の心を愛した女性

猪股 純

田村先生ほど土木人を愛した女性を私は知らない。ハードな構造物としての土木ではなく、国土づくりに夢を追う土木人の心を愛し、土木にかかわる多くの友人を大切にされた女性である。田村先生は本当に人が大好きなのだと思う。土木を仕事とする者の端くれとして心からお礼を申し上げたい。

私が先生と初めてお会いしたのは、平成 11 年春、当時先生が雑誌連載をされていた全国の道の駅めぐりの最後の回の取材として、宮城県に来られ、地元の事務所長として関係者一同と 1 泊 2 日で同行をさせていただいた時だと記憶している。偉い先生が来られるというので、緊張して新幹線の白石の駅でお迎えに行ったわけだが、気さくに私を含めて誰にでも分け隔てなく楽しく話をされる姿に、一度で先生のファンになってしまった。足元の悪い道を歩く時の女性のエスコートの仕方などを茶目っ気たっぷりにご教示願ったことなども懐かしく思い出される。

取材自体は道の駅をいくつか回って施設を見学されたが、施設そのものよりもむしろ、現地で説明される人やその生き様自体に興味を持って取材されておられたという印象が強い。

2 年間にわたる道の駅めぐりの連載の最後の回を東北を選んだのは、当時の仙台工事事務所の調査課長が、かつて本省で道の駅めぐり連載の担当をしていたからだ伺ったが、人を大切にする先生らしいと思う。

それ以降、仙台でのシンポジウムの際に講師やパネラーとして仙台にお出でいただいたり、私が岩手県庁に出向勤務していた際には、何度か岩手県においでいただき、親しく交流させていただいた。その後、梁山泊(?)のような東京の田村邸にも何度かお邪魔し、おいしい料理とお酒をいただきながら、皆でワイワイと、土木談義やその他の話題に花を咲かせて、楽しませてもらった。

初めてお会いしてから十数年が経ったが、その間はずっと仕事上のお付き合いというよりもむしろたくさんいる友人の一人としてのフランクなお付き合いをさせていただいたと感じている。

本年 2 月末に、日赤の療養病棟に入院中の先生を、友人と 2 人でお見舞いに伺ったが、それが、先生とお会いする最後になった。病室で二人分のうな重を 3 人で食べ、先生がどうしても飲もうよというので、こっそり冷蔵庫にしまっていた 2 本の缶ビールを 3 人で分け合って乾杯し、最後の楽しい会話をすることができた。もっとも看護婦さんには「ここでアルコールを飲んでいいのは本人だけなんですよ」と優しく叱られたのだが…

田村先生、ご冥福をお祈りします。あなたの愛した土木人をこれからも見つめていてください。(1088 文字)

(本間組 常務執行役員)

## 静岡とのご縁

岩井 茂樹

### 1. はじめに

田村喜子先生、本当にありがとうございました。

私は現在、静岡県選出の参議院議員として国政に携わっていますが、田村喜子先生とは、議員になる前からお付き合いをさせていただいておりました。

私と田村喜子先生との初めての出会いは、私の親父から読むことを勧められた田村先生の著書『京都インクライン物語』との出会いでした。その本は、実家の本棚にひっそりと置かれていた本でしたが、京都に育ち、京都で学生時代を過ごした親父にとって、京都の歴史や土木技術者の誇りと浪漫を感じられる大切な書籍の一つだったのかもしれない。

私自身もこの本が縁で、以後、田村先生とこれほど親しくさせていただくとは思っていませんでした。

ご存じのように、田村先生が書かれたこの『京都インクライン物語』は、京都再生のために琵琶湖から水を京都に導くために行われた明治期の一大プロジェクト琵琶湖疏水事業について書かれたものであり、主人公の田辺朔郎の姿を通して、当時の世情やこれから発展を遂げる日本の溢れんばかりの力強さが描かれていました。

私はこの本を引き込まれるように読みました。それは私自身、土木に誇りを持つ土木技術者だったからであり、この本から当時の日本の浪漫や力強さを感じることができたからだと思います。

### 2. 不思議な縁

私と田村先生は不思議な縁で結ばれていたような気がします。

まずは、先ほど触れた『京都インクライン物語』で登場する田辺朔郎を通しての縁です。

琵琶湖疏水事業で中心的な役割を演じた田辺朔郎ですが、実は彼は私の選挙区静岡県沼津市にあった沼津兵学校附属小学校の出身でした。

このご縁がもとで、田村先生にも沼津にお越しいただき、田辺朔郎についてのシンポジウムを開催したことが昨日のことのようです。まるで朔郎が自分の恋人のような語り口で講演いただいた田村先生の姿を今でも新鮮に覚えています。

もう一つの縁が沈没船ニール号を通しての縁です。



近代土木技術の基礎を築く「代戯館まつりで講演会」で講演する田村喜子先生(沼津市内)

田村先生は1978年に『海底の機』を執筆されました。その主人公の名は吉田忠七と言い、明治期にフランスに機織りの技術習得のために渡航していた彼がやっと故郷日本に帰る途中に乗船したのが“ニール号”でした。

そして、そのニール号は到着間際の伊豆半島西海岸で沈没しました。伊豆半島もまた偶然にも私の選挙区です。

少し前に私の地元でその幻のニール号を引き上げるプロジェクトが組まれました。田村先生もそのプロジェクトに関わり、沈没地点を眺めに現地までいらっしゃったと伺っています。

### 3. おわりに

田村先生から思い浮かぶイメージは“不思議な縁”、“土木技術者の誇りと浪漫”です。そして、今でも地元沼津に帰るたびに、そして伊豆半島の西海岸に行くたびに田村喜子先生の面影を思い出します。

今までの素晴らしい作品をはじめ、数々のご功績に心から敬意と感謝を申し上げますとともに田村喜子先生のご冥福を心からお祈りいたします。



田村喜子先生と本人

土木技術者の応援団長、田村喜子先生…本当にありがとうございました。(1298文字)

(参議院議員)

#### ●コラム：岩井茂樹さんと風土工学

岩井茂樹さんは平成22年7月の参議院選挙で自民党から立候補して静岡地方区でトップ当選された。立候補されるまでの間、約4年間（平成18年4月～平成22年3月）、富士常葉大学の附属風土工学研究所の主任研究員として、伊豆地方や駿東地方を中心に静岡県の風土について深く研究された。

また、環境防災学部の非常勤講師として、『国土環境計画学』を4年間講義された。国会議員にとって風土工学の素養は極めて重要で不可欠であるとする。岩井茂樹先生は風土工学の見識でもって、国会で大いなる活躍を期待してやまない。

## 貴女は「土木の太陽」だった

大田 弘

2000年、田村先生が「土木のこころ—夢追いびとたちの系譜—」（2002年発行）を企画・執筆中の時のこと。熊谷組とは60年にわたりトンネル工事の相棒である笹島信義氏（当時83歳）を取材したいとの申し入れを受けた。笹島氏は所謂、熊谷組の下請けの親爺である。映画「黒部の太陽」で石原裕次郎が演じたモデルとされる人物で、黒四建設のための資材運搬ルート“大町トンネル”（現 関電トンネル：長野県～富山県）で大断層「破碎帯」を突破した最前線の指揮官だった。

申し入れに私は耳を疑った。20世紀の国づくりに邁進した土木技術者20名の一人として、田辺朔朗、廣井勇、八田與一らと並んで笹島信義氏を取り上げるというのだ。私は大先生の要請であったので段取りを引き受けはしたが、『先生、笹島氏は今でも激怒すると灰皿を投げつける荒武者。さらに、極度の富山弁で話すので何を言っているか良く判らないと思いますが、それでもよろしいですか？』と、やんわり牽制した。しかし、彼女は『それで良いのよ。だって、彼らのような人たちがいて、国づくりができたのでしょ』とにっこりと笑って応えた。

笹島氏と同郷の私が“通訳”として念のため陪席することになった。最初は穏やかに答えていた笹島氏だったが、下請けの本質・本分に迫る相次ぐ質問に対して、私ですら聴き取り困難な富山訛りによるトンネル弁が炸裂し始めた。時々、すれ違う質疑応答になったが、田村先生は私に助けを求めることもなく、平然と3時間に及ぶ取材を続けた。

後日、田村先生から連絡があった。『大田君、笹島さんの原稿（録音）起こしをしているのだけど、良く判らない所があるので“翻訳”して。』全く悪びれることがない、まるで少女のような素直な要請だった。彼女は言葉そのものではなく、笹島氏の口調、表情、身振り手振りから野性・凄さを体で受け止めて、取材をしていたのだった。

彼女は「土木のこころ」で笹島氏の人物像を次のように結んだ。『「山は生きもの」と笹島はいう。コンピューターでははかりきれない現場の知識、対応の仕方・・・、それらをすべてマスターしたうえだからこそ、さらには日本列島を縦断するほどの距離のトンネルを掘ってきたからこそ、笹島が自然を畏怖する気持ちは誰よりも強いのである』と。私はこの取材を通して、“田村喜子”に惚れた。彼女は土木がどのような人々の苦労の上で成り立っているのかを完璧に理解している、「土木のこころ」で下請けの親爺を取り上げた“田村喜子のこころ”に衝撃的な感動を覚えた。

2006年、富山県黒部市・宇奈月町合併イベント「黒部の太陽のモデルとなった男」でご講演、パネルディスカッションにもパネラーとしてご参加頂いた。その時、破碎帯突破の立役者、笹島氏は『発注者・元請・下請が立場（契約）を越えて心が一つになったのが破碎帯突破の理由』と言った。田村先生はそれに応じて『この黒部市の最上流にある黒部ダ

ムは笹島さんのような人達のお陰様によって出来た。日本の土木の誇り、郷土の誇り。感謝の気持ちを忘れてはならない』と説いた。

田村先生は分け隔てなく広く深く“土木”を照らす太陽だった。そして、これからもその太陽は我々の心の中で輝き、ほっとする穏やかな恵みを与え続ける。

我々はどこかに置き去りにしてきた“土木のこころ”をもう一度、取り戻せねばならないと思う。合掌。(1568文字)



黒部市・宇奈月町合併記念イベントにて。

日本の電源開発の歴史を振り返りながら、『日本のものづくりの原点をみつめなおそう』と講演された。



左より笹島信義氏（笹島建設株式会社 会長）、吉友嘉久子氏（株式会社よしもとコミュニケーションズ 代表取締役）、田村先生、大田（旧宇奈月町出身）

（株式会社熊谷組 代表取締役社長）

## 田村喜子先生への感謝の想い

大村 敦

田村喜子先生に初めてお会いしたのは確か平成9年2月頃。当時「道の駅」担当係長であった私は、「道の駅」に関する執筆依頼のため上司とともにご自宅に伺った（その作品は、全国の道の駅を先生自らが訪ね地域の歴史や風土の紹介とともに纏めた「浪漫列島道の駅めぐり」（講談社）として平成12年発刊）。その時の先生の印象は、私みたいな若輩者に対しても優しく接してくれる飾らない人柄（その際に紅茶とともに頂いた一口サイズの今まで味わったことのない高級感あるチョコレートの味、帰りには先生自らの運転で駅まで送って頂いたことも鮮明に覚えている）。

それ以来、道の駅めぐりで宮城県白石市・七ヶ宿町に来訪された時や、講演会や現地視察等で東北に来られた際に、何度かお会いする機会に恵まれ、その度毎に貴重なお話やご指導・ご助言をいただいた。

いつも先生にお会いして思うことは、本当に好奇心が旺盛、話題が豊富で、特に今まで出会った方々のことを忘れず大切にしていることである。ご自身のご病気をご認識され、体調があまりすぐれないと思われる時でも、いつもと変わらずお酒を嗜み食事をし、いつもと変わらずお話させて頂いた。昨年6月にお会いしたときには、東日本大震災の被災地の事を本当に心配され、また、土木学会名誉会員を授与されたことを本当に喜んでおられた。そして、今年1月ご自宅にお伺いしたのが先生との最期の食事となった。その時も先生はいつもと変わらない明るくお洒落な田村先生そのままでした。残念なのは、一度みちのく公園に行ってみたくておられたその想いを叶えられなかったこと。桜の季節に公園内のコテージに宿泊し花見をご一緒したかったのですが。

「土木のこころ」という土木技術者に対する先生の想い・期待に応えるよう精進して参りますので、これからもチャーミングな笑顔で天国から見ていていただける様お願いいたします。

田村喜子先生様、大変お世話になりました。そしてありがとうございました。(880文字)



みちのく公園の桜



みちのく公園のコテージ

(東北地方整備局 国営みちのく杜の湖畔公園事務所長)

## 田村先生との22年

尾木 幾子

出会いは平成2年11月、長崎での土木の日シンポジウム。先生の基調講演に続き、女性のみパネルディスカッションで同席。尊敬と畏敬の念で接していた先生は、小柄でチャーミング、とても気さくで温かなお人柄。その魅力に惹かれ、長崎の阿野さんたちと「妹たちの会」を当日に結成、それから22年、妹としてかわいがっていただきました。シンポジウム翌日の雲仙普賢岳見学がとても印象的だったのでしょう。「私たちが普賢岳から水蒸気が上っているのを見た1年後に爆発したのよねー」といつも話されていました。

その後は、九州へお出かけの時は必ず声をかけてくださり、九州大学の松下教授はじめ土木技術者の方たちと交流の場を設けていただき、また、東京大学名誉教授高橋裕先生や北海道の折谷さんご夫妻とも親しくさせていただくようになりました。多くの方々と出会い、学び、育てていただき、今でも支えられていることは言うまでもありません。

私にとって先生の著書の中では「関門とんねる物語」が思い出深い作品です。贈呈いただいた時、「国道トンネルと鉄道トンネルの建設はどちらも急がれていたけど国の情勢から鉄道建設が早くなって、国道トンネルは戦後になってしまったよね・・・」と建設省に勤務していた私に気遣ってくださったことや国鉄の技術者だった義父が技術者の苦労話だけではなく技術面も正確に描かれていて取材力と表現力のすばらしさに驚き、著者である先生と親しいことに感心したことが昨日のこのように思い出されます。

平成14年に北九州市主催の土木フェアで「土木のこころ」と題して基調講演をされた時、九州の土木技術者の母と自称している天本さんと共に参加し、心酔された天本さんとも交流が始まりました。翌15年、長崎県の大プロジェクト女神大橋の工事現場視察の時「女神大橋物語」の執筆をお願いしておりましたが叶わなくなり、とても残念です。

先生と最後にご一緒したのは昨年5月、「余部鉄橋物語」で財交通協力会主催の第56回交通図書賞受賞式でした。長崎の阿野さんや北海道の折谷さん達と参加し、賑やかに楽しいひとときを過ごし、まだまだ元気で活躍されることを確信して帰福し、その後も何度か電話でお話ししたときはとても元気なお声だったので安心しておりましたが、3月24日、折谷さんから訃報が届きました。葬儀に参列し、棺の中の先生は22年前に出会ったときと同じように穏やかな面立ちとすてきなお召し物でとてもチャーミングでした。

今では言葉を交わすことは叶いませんが、先生からの励ましの言葉はいつまでも心に残っています。土木関係者や全国のファンの方々、私たちをいつまでも暖かく見守ってくださっているものと思っています。

田村先生！大きな、大きな思い出とたくさんのお会いをありがとうございました。(1203文字)

(特定非営利活動法人はかた夢松原の会 理事・道守九州会議 事務局長)

## お土産

忍見 武史

「明日は何時に待ち合わせするん?」「9時半の飛行機ですから先生は9時10分前位着でお願いします」「いつものところでいいんかい?」「はい。いつもの第2ターミナル4番時計のところですよ。宜しくお願いします。」

田村喜子先生が、当方の理事長にご就任いただいてから、先生を交えてまたは二人で出かけることが度々ありました。私が業務でつくば時代より丁度北海道や九州を担当していたこともあって、ご案内のように先生は、北海道が大好きで、また九州にもたくさん懇意にされている方々がおられることもあり、自然と先生のお供をさせて頂く機会が増えてきました。とはいえ先生は日頃から「理事長らしい振る舞いはいっさいいたしませんから(きっぱり)」と仰せられていましたから、私は、仕掛かり中の調査を兼ねて先生を現地にご案内し、その後先生の懇意にされている方々にご面会するのに際して、車でご案内し、またその途中の階段や段差に気を配ることとなりました。余談ですが先生をエスコートされる(特に階段などで先生に手を添える)方々は枚挙にいとまがなく、実際に田村先生も、あのときは誰々さんがこうしてくれたとか、「いついつは“手を引きましょうか”といわれ、それは老婆やろ」とか、いろいろと解説をいただき、まさにうまいへたの番付でもできそうな勢いであったことは今から思うと本当に懐かしい思い出です。

当日、空港の4番時計の所でお待ちしているとすぐさま先生が到着されました。いつものお花の刺繍がきれいな小さな黒いキャリーバックともうひとつ頑丈な車輪カートに大きな袋が紐でくくられていてこれから登山でもするような荷物を引っ張ってこられました。お話を聞くと、先生のお着替えは小さいキャリーの方で、重い方はお菓子がたくさん詰まっているとのこと。久しぶりに会う人に渡すお土産で、たのしみにしている人もいます。「でもどのくらいあればいいかわからないのよ」とのこと、まあ「余ったら忍見さんにもあげるからね」

初めて先生にご同行した時はこれだけあるので頂ける予感に満ちあふれていましたが、そのあと、先生にお会いする方々みなさん先生のお土産をたのしみにされていて、とうとうお土産を分けてやり繰りしなければならない始末に。その後も先生とのお出かけにはお土産がつきもので、その都度違うものをご用意されているとのこと、先生は本当に気を遣われているなあと感心いたしました。結局私にはその後一度も先生のお土産のおすそ分けはありませんでしたが、それ以上に楽しいひとときといろいろな方々との思い出話を「お土産」に帰路につくことが出来ました。もう二度と先生とのご同行がかなわないことは本当に悲しいことです。本当にありがとうございました。ご冥福をお祈り致します。(1160文字)

(風土工学デザイン研究所)

# 北海道に夢をかける

折谷 泉

このタイトルは 1996 年に開催した「まちづくり講演会」 in 函館での講師 田村喜子先生の演題です。次の開催主旨文《「明治、大正、昭和初期につくられた土木構造物は、今日なお私たちの暮らしを支えながら歴史を刻んでいる。「構造物」の造の字が「告」に「之」をかけたものであるならば、これらの構造物は何を私達に告げているのか。先人の足跡をたどることで、私達は何を学ぶべきか・・・。》は、先生の加筆によるものです。

1996 年、広井勇先生が函館港改良工事着手（1896 年）されてから、100 年を迎える年で、高橋裕先生、田村先生にご来函頂いての講演会となりました。

私と先生との出会いは、20 年程前に函館観光に鎌倉彫りの女性数名が行くので、案内方宜しくとの依頼を受け、函館歴史的構造物等をご案内していた。「これが日本最古のコンクリートの電信柱です。」通り過ぎてから「あれは、いつ頃出来たのですか。」と聞かれ「明治頃じゃないですか。」と答えたところ「明治に鉄筋コンクリート電柱あったかしら。」戻って見ると案内板に大正 12 年と記されていた。

田村先生が土木のノンフィクション作家と知ったのは後日でした。

早速翌 1993 年に函館での講演会に来て頂きました。その時にご案内したのが、広井先生の函館漁港でした。広井先生が着手したのは明治 29 年、この年「京都インクライン物語」の田辺朔郎が北海道に赴任した年でもあります。私は「北海道浪漫鉄道」も読んでおりました。朔郎の仲人が五稜郭戦争の榎本武揚で、工部大学の校長が大鳥 圭介であり、ご両人も「えぞ共和国」を夢見た人達です。田村先生とは、永遠の恋人朔郎を通して函館とのご縁を頂いたと思いますと伝えました。先生は古い築港の石積みに立って、たまたま晴天で遠くに大沼の駒ヶ岳が望め、「天翔ける姿に似たり駒ヶ岳、雲のたてがみ風にみだれて」朔郎の函館で謳った歌をご紹介して下さいました。

その後毎年の様にご来道して頂きました。

2003 年には、京都インクライン物語の映画化「明日をつくった男」を函館と福岡で田村先生のお話を交えて上映会を実施することができ、土木技術者だけではなく経済人や市民も大変感動して頂きました。特に思い出深いのは、広井先生の教え子、八田與一の台湾の烏山頭ダムの墓前での集い「八田技師夫妻を慕い台湾と友好の会」に先生と私と一緒に参加させて頂き、「飲水思源」と記されたの記念品を頂き土木の原点を見る思いがしました。

15 年程前にご来函された折、青函トンネルの北海道側の出口に行きました。先生は「いつの日か新幹線がここから出てくるのを見たいわねえ」とおっしゃいました。

田辺が夢をかけた北海道に、2015 年には新幹線が開業します。若しこの文を読んで頂いた方にご来函いただければ在りし日の田村先生を偲んで、現地をご案内させて頂きます。田村先生には家族共々お世話になりました。ありがとうございます。(1234 文字)

(函館 2 1 の会、代表幹事)

## 胡蝶蘭の華

折谷 久美子

たむら先生。何度声に出しても先生からくみちゃんと呼んで頂くことはもう二度とない平成二十三年七月、北海道最後の旅行にと旭川の旅館で枕を並べておしゃべりした時は、何度も何度も名前を呼んで頂いたのに。娘の就職のこと、私の活動のこと。母と言うより姉のように優しく見守って頂きながら思い出話が尽きなかった。



函館でお花の活動を始めようと考えていた頃、「決してフラワーロードとかにしないでね。函館新道には平仮名があっているわよ」とアドバイス頂き、先生のご心配もなく「函館花いっぱい道づくりの会」となった。平成二十二年には、みどりの愛護功労者国土交通大臣表彰を受賞するまでの活動に成長し、先生から頂いた祝電に「道路いっぱいには花咲き誇らせた函館花いっぱい道づくりの会にエールをおくります」と書かれていた。先生から「エールをおくる」と言われたことが、とびきりのご褒美を頂いたようで、大きな自信に繋がった。そのお花の活動も平成二十五年、十周年を迎える。今度こそ先生に満開の函館新道の花を見て頂き、たくさん褒めてもらいたかったが、叶わぬ夢となった。

先生は特別、胡蝶蘭の花がお好きだった。函館にいらっしゃる時は必ず先生が宿泊されるお部屋に胡蝶蘭を飾り、ご自宅へお送りしていたが、十六年前の年の暮れ、大輪の胡蝶蘭3本立ての大きな鉢植えを送った時は一苦労した。一輪ずつ和紙で包んでから発泡スチロールで全体をくるみ、箱の中で動かないようぐるぐる巻きに紐で固定し、大型冷蔵庫の箱に空気穴を開けてお届けしたところ、「すごい格好で北海道からやってきて、まるで角巻きを羽織ってきたみたいよ。道中、窮屈だったでしょうから大事に育てますね」と大笑いしながらお電話を頂いた。「梱包大変だったでしょう。胡蝶蘭も喜んで我が家へ来てくれたわ」と優しく労らいの言葉をかけて下さった。田村先生は全てに於いて、そういうお方だった。

三月、先生の病室へ大好きな胡蝶蘭をお届けした時、病魔に苦しんでおられたのに最上の笑顔で喜んで下さったことが忘れられない。

先生とのたくさんの思い出から、何事も原点を忘れてはいけないと言うことを学んだ。更に、分をわきまえること。誠意を持って行動すること。それを心掛けていると、きっと手を差し伸べてくれる人がいると言うことも教わった。

胡蝶蘭の花言葉は「幸福がやってくる」。生涯、私の心の中の胡蝶蘭は褪せることなく咲き続ける。(1036文字)

(NPO 法人スプリングボードユニティ21 理事長)

# 田村喜子先生の思い出

上総 周平

「周平君」、「あらまあ、周平ちゃん」、「こら、周平！」。

田村先生の私への呼び掛け方はこんな風でした。いつもファーストネームであり、苗字で呼ばれた記憶が残っていません。他にも同様の方はおられるでしょうが、先生に対し時に馴れ馴れしい失礼な口調であったにもかかわらず、いつも親愛と慈悲に満ちた呼ばれ方であったことを有り難く、懐かしく思い出しています。

初めてお目にかかったのは、東京で平成元年ころです。その後、役所の委員会などの場で委員としてご指導いただいたり、ご自宅に伺ったり、私の任地である奈良、名古屋、新潟長岡を訪ねて下さったりしました。ご自宅は、大泉学園、南麻布、六本木、三田にお邪魔しました。どのお宅もおしゃれなインテリアで飾られ、気持ちいい空間でした。書棚には司馬遼太郎、山本一力などの作品が並び、先生の読書傾向も垣間見させてもらいました。先生とお話するのは、お酒の伴った場が圧倒的に多かった。先生は、皆さまご存じのように、柔和で温かく、機知に富み、作家らしく繊細な表現での気配りに満ちたお話し振りで、いつも“ほんわか・なごやか”な酒席になりました（お酒は、マヴィのワインはじめ、いつも最上級品！）。唄もお上手でした。中でも、都はるみの「千年の古都」は絶品でした。

不治の病を宣告されてからの先生は、余人には窺い知れない悩みや怖れの中におられたのでしょうが、敢然と現実を受容され、とても凜とされている印象を私たちに与えて下さったことが忘れられません。ご逝去の三日前に病室に見舞った際も、意識は少々朦朧とされていたものの、身嗜みを整えられ凜とされておられました。

“土木の応援団長”でしたから、先生の著作の多くは、河川、道路、港湾、鉄道に関わる「人」の物語でした。どの作品も素晴らしいですが、個人的には学生時代を過ごした京都を舞台とする「京都インクライン物語」、所長を務めた信濃川をテーマとする「物語分水路 信濃川に挑んだ人々」が特に印象に残っています。初期の「むろまち」も好きな一冊です。

思い出は語り尽くせません。たくさんの豊かな時間を下さった先生、ありがとうございました。多くの人を愛し、多くの人に愛された田村喜子先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。（957文字）

（国土交通省）

## ●コラム：「京都インクライン物語」中村英夫 解説

琵琶湖疏水の完成は、明治期の日本土木界が世界に誇る大工事であり、燦然と輝く金字塔である。京都を近代都市として再生させるため、生命を賭して難事業に挑んだ若き土木技師田辺朔郎ら、男たちの熱い闘いと不屈の精神をノンフィクションタッチで綴る長篇。

解説・中村英夫

# 余部鉄橋物語

阪田 憲次

「余部鉄橋物語」(2010年)は、作家田村喜子最後の作品となった。田村は、「京都インクライン物語」(1982年)によって第一回土木学会著作賞(1983年)を受賞以来、土木および土木技術者をテーマにした多くの小説を上梓し、土木のよき理解者として、世の逆風に喘ぐ土木技術者を励まし続けた。田村は土木技術に対して旺盛な興味を示し、日本各地の様々な現場を積極的に視察している。もちろん、小説のための取材という意味もあったが、意欲的に現場を歩いた。数年前、田村とともに、黒部ダム、関電トンネルおよび立山砂防の現場見学に行く機会があった。高熱隧道ではトロッコを止めて岸壁の温度を確かめ、大きな転石が落ちる危険な砂防ダム建設現場にも足を踏み入れた。

「余部鉄橋物語」の出版記念祝賀会が2010年10月に行われた。その際、出席していた多くの土木関係者から土木学会の会長を務めていた私に、田村を土木学会の名誉会員に推薦するようにとの要請があった。「土木学会名誉会員推薦規程」第2条4項に、「学会の発展に対する貢献が極めて顕著である会員以外の者又は外国人」とあり、前年には、作家曾野綾子とその第一号として推挙されていた。さっそく、理事会に諮り、田村の名誉会員への推薦が満場一致で認められた。2011年5月の土木学会定時総会において、田村は土木学会名誉会員に推挙された。親交のある多くの会員からの祝福を受け、新名誉会員代表として挨拶に立ったときの幸せそうな田村の姿が思い出される。

余部鉄橋は、兵庫県北部の日本海に面した小さな集落余部を跨ぐように建設された、橋長309.4m、地表から橋面までの高さ41mの美しい鋼橋で、11基のトレスル橋脚に支えられている。この鉄橋は私にとっても懐かしいものである。私は、大学院修了後、鳥取大学に赴任したが、その後1年余の間、毎週末には実家のある京都と鳥取の間を行き来した。日曜日の夜遅く京都を出発し、早朝に鳥取に到着する京都夜行と呼ばれていた鈍行列車があり、もっぱらそれを利用した。夜行列車のため、鉄橋や外の景色を見ることはできなかったが、コトコトと規則正しいレールの継ぎ目の音と時折停車するときのブレーキのきしむ音や、窓から垣間見た日本海の漁火が記憶に残っている。

「余部鉄橋物語」は、2部構成になっており、Ⅰ部は旧橋について、Ⅱ部は新橋について書かれている。主題の性質上、土木技術、橋梁技術に関する内容についての記述が多いが、細かな技術についても正確に書かれていることに驚かされる。専門家に聞いたことを、そのまま書くのではなく、内容を理解したうえで、田村の言葉で書かれている。たとえば、新橋であるエクストラドーズド橋の説明は、その一例である。旧橋の選定に関する記述、とくにトレスル式高架橋の説明も、詳細かつ正確である。そのことが、ノンフィクション小説としての質の高さを証するものである。ただそれだけでなく、余部鉄橋の100年の歴史に係わる多くの人々、それは技術者のみならず、鉄橋の下の集落に住み、鉄橋を守った地域住民の、時代の推移を背景にした喜怒哀楽を見事に描いている。つまり、「余部鉄

橋物語」は、ノンフィクションとしての記録性と、人間を描く小説としての物語性とは、絶妙のバランスで融合した力作で、それが読む者に感動を与える所以である。

「余部鉄橋物語」には、多くの知人が登場する。その中の一人が北後征雄である。北後は、若い頃、国鉄民営化前にあった国鉄構造物設計事務所に所属する技術者であった。30年も以前のことであるが、北後と彼のグループは、私が提案したコンクリートのクリープおよび乾燥収縮という時間に依存する変形の予測式を、初めて実構造物に適用し、精度よく予測できることを実証してくれた。そのことにより、私の研究が世に知られるきっかけをつくってくれ、さらに、土木学会のコンクリート標準示方書に、私の提案した予測式が、土木学会式として取り入れられ、プレストレストコンクリート構造物の設計に、現在も使われているのである。

北後は、新しい余部橋梁の設計責任者として、文字通り、自らの命を削って、余部の風土に馴染み、この土地の原風景になっている日本の近代土木遺産である旧橋余部鉄橋に劣らない新橋を設計した。北後は、自分が設計する新橋、PC 五径間連続エクストラードボックス桁橋が、やがて風景に溶け込み、余部の四季を背景に、天空に美しい姿を見せることを想像していたに違いない。しかし、その完成を見ることなく、64年の生涯を閉じた。

「余部橋梁だけは自分の手でやり遂げ、それを人生のけじめとしたいという意志が働いていたのかもしれない。病床で考えるのは、余部橋梁の設計のことばかりであったにちがいない」「北後技師長は余部橋梁に生かされていたのだ。目的があったから、命が永らえたのだ」という記述があるが、それらは、北後の余部橋梁にかける思いと、田村の「余部鉄橋物語」にかける思い、小説家としての最後の作品にかける思いとが重なっているように思われる。田村は、「余部鉄橋物語」に、自らの命をかけたのである。

日本海の風雪に耐え、100年の長きにわたり存在した余部鉄橋は姿を消した。しかし、その鉄橋の誕生から撤去までの歴史と、それに関わった人々の営み、思いを含めたすべてを文字で固定し、小説として表現したのが「余部鉄橋物語」である。写真、映画あるいは設計図面とは異なる余部鉄橋を、田村喜子は世に残したのである。(2311文字)



(旧) 余部鉄橋鋼製トレスル橋



(新) 余部エクストラード橋梁

(前土木学会会長・岡山大学名誉教授)

## 北海道浪漫鉄道の終着駅 ―北海道新幹線札幌駅―

佐藤 馨一

2012年8月25日(土)に北海道新幹線新函館(仮称)～札幌間の起工式が行われました。北海道新幹線の整備計画は1973年に認可されましたが、40年後にようやく施工命令が出た次第です。工事期間は約24年と予定されており、完成までに64年もの年月がかかります。私は1983年の青函トンネル先進導坑完成時から北海道新幹線の研究を行っており、札幌延伸の決定は交通計画学研究の集大成と言うべきものになりました。写真は、私も出席した起工式の会場を撮影したものです。



北海道の鉄道整備は、明治の頃から常に中央政府との無理解と拒絶反応との戦いでした。田村喜子先生は田辺朔郎先生を主人公にした北海道浪漫鉄道でそのことを語りました。

田辺先生は1890年に琵琶湖疎水を完成させた後、工学博士の学位を授与され、帝国大学工科大学教授になりました。1896年5月に北海道鉄道敷設法が公布され、田辺先生の岳父となった北垣国道北海道長官の要請を受け、北海道庁鉄道敷設部技師に就任しました。田辺先生は開拓の殆ど進んでいない北海道の原野、湿原、山岳地帯を駆けめぐり、北海道の鉄道基本計画を、いわゆる1000マイル延伸計画を作成しました。石狩地方と十勝地方を分ける峠を狩勝峠と名付けたのも田辺先生です。

1982年、田村先生は「京都インクライン物語」で第一回土木学会著作賞を受賞されました。その祝賀会の席上で、「次作は、田辺先生が活躍した北海道の鉄道建設の話を書いて下さい」とお願いしました。その時は聞き流されましたが、2年後に電話があり、「佐藤先生、田辺先生の北海道における足跡を案内して下さい」という依頼がありました。私は「喜んで案内します。ただリクエストがあります。それは冬の狩勝峠を見て欲しいことです。」

その厳しさを体験されると狩勝峠に鉄道を建設したことの意味、さらにそれが北海道の発展にいかに関与したかを知ることができます」と話しました。

田村先生は12月に来道され、廣井勇が建設した小樽港の北防波堤を出発点として札幌、旭川、富良野、そして狩勝峠へ向かいました。狩勝峠の道路はアイスバーンと化しており、風も強く、田村先生がまともに歩けなかったことが今でも思い出します。しかしその一方で樹木の葉は枯れ落ち、山岳部の見通しが良くなっていることを観察されていました。北海道浪漫鉄道ではこのシーンがさりげなく描かれており、さすがだと感心しました。

1897年に北海道鉄道に私設が許可され、函館～小樽間は函樽鉄道会社が建設することになりました。1898年1月、田辺先生は函館～小樽間鉄道線調査を行い、そのルートを確定しました。その115年後、北海道新幹線新函館～札幌が新ルートで建設されることになり、終着駅は北海道新幹線札幌駅となったのです。

1898年、大蔵大臣の井上馨が一切の公共事業中止を通達しました。民主党政権が、「コンクリートから人へ」と公共事業を抑制したことと重なります。この時、田辺先生は時を移さず上京し、カミナリ大臣の異名を持つ井上と会談しました。田辺先生には北海道の未来を考える以外に一切の私心がないため、カミナリ大臣に対してもひるむことなく、北辺の国土を開発する意義を、綿密な数字を上げて説明しました。この会談は、井上大臣の「えいくそッ。100万円くれてやらあ」というひとことで終わりを告げた、と田村先生は書かれています。

田村先生の「土木のこころ」の著書には、多くの土木技術者の使命感について語られています。何を基準にして人物を選んだかは興味あるところです。しかし田村先生にそれを質問しても、「えへへ」と笑って答えないと思います。私は田辺朔郎先生の策定した北海道鉄道の1000マイル計画を引き継ぎ、北海道新幹線の着工に多少汗を流したことを田村先生に褒めて欲しいと思っていました。そして「続・土木のこころ」に取り上げて欲しいと願っていましたが、かないませんでした。しかし、田村先生は私をセレクトしてくれると信じています。それが、田村喜子先生に対する私の供養の気持ちです。

(北海商科大学 商学部)

### ●コラム：「むろまち」の序・水上勉

「むろまち」を読んでいると、この少年時代がよみがえって、私は何となく、溜息をついて、読むのをやめ、回想にひたった。

田村喜子さんの文章が、近頃流行の理屈が先に立つ固苦しい感じでなく、わかりやすく適確な表現を、しっかりわきまえているからだろう。



## 故田村喜子先生との思い出

佐藤 昌志

私が田村先生と何時出会ったのか恥ずかしながらはっきり覚えておりません。先生からすれば「あの時じゃない」と言われるかもしれませんが、私自身は何時の間にか先生の魅力に何故かしら融け込んで言ったような感じなのです。田村先生に申しあげましたが、私がライフワーク的に取り組んでいたものが「道と水辺」で、先生を何度も北海道のそれらしき所を案内したことが記憶に残る私だけの秘密の財産です。毎回、北海道あちこちをお連れしてホテルで食事をする際に毎回のように「昌志さん、あな、土木屋ね」と言われたのですが、この言葉の意味を確かめることなく先生は他界したのですが今では本当の意味をお聞きしない方が先生を一生偲ぶことができ良かったのかもしれませんが。今となっては白状しますが、私はこの10年程本という物から遠ざかっていて論文以外の文書は書けなくなって言葉や文章を大事にする先生から「土木のころを書いてみて」と言われたらどうしようとアテンドの際に毎回ドキドキでした。

私の財産と言えば、先生と出会ってから何時の間にかたくさんの方々と出会い私の目を大きく開眼して下さったのも大きな一つです。その一人が竹林さんです。流石に初めてお会いしたときには「なんや、このおっさん」と思いましたが、日が経つにつれ「このおっさん、半端じゃないな」と思ったのが私の本当の心情です。田村先生も風土工学に達観しておられましたが、暑い日に日本手ぬぐいで汗を拭きながら田村先生とスクラム組んでシンポジウム等の案内に来てくれまして言わば「実践派」というにふさわしいと方です（当然皆さんご存じでしょうが）。確か九州でシンポジウムだったかを開催した時そのすばらしさを伝えに来てくれたのが間組の高橋さんで以前に仕事で大変色々お世話になった根っからのダム屋です。田村ファンは広いなと思った次第です。

取り留めもない文章を書いてきましたが、最後に私も聞いてはおりましたが田村先生に案内された一つの場所があります。小樽水源地です。先生の手を引きながらダムの上に登っていった記憶が先日の様です。先生は小樽市の水道局の方に色々ヒアリングをしておられましたが、私は先生そっちのけで石積みの落差工に見とれておりました。構造力学屋の私としては石積みの中を通る水と落差で落ちる水が微妙にぶつかりエネルギー吸収をしているのを見とれていました。「先生！ 今の技術ではこんな構造物作れないですよ！」と私が大声で言ったことも私の思いで。その夜、小樽開発建設部の方と飲み屋に行った時に「旬の味」の話になり、私は先生に「芦別のサクランボすごく美味しいですよ。近々送ります」と言って送らずじまい。

先生、すいません。(1139文字)

(寒地土木研究所 上席研究員)

## 田村喜子先生

島谷 幸宏

田村先生と初めてお会いしたのはいつだったでしょうか？

多分、先生が土木研究所環境部の評価委員をなさっていた時だと思います。

もう 20 年も前でしょうか？

それから、親しくなって先生のお宅の飲み会に参加するようになりました。

みんなで食材を持ち寄り、そこで料理をしてワインを存分にいただきました。私は生のカニを持って行って、いろいろな香料で炒める料理をさせていただきました。先生の好きな料理でした。

飲み会は社交の場で、色々な方にお会いしました。

全国の一生懸命働いている土木技術者の話と恋の話が中心的な話題でした。土木技術者を心の底から応援してくれているのが伝わってきました。特に、北海道の豊浜トンネルの事故とそれに関係された土木技術者の話には胸が詰まりました。先生が現場に立たれた時の、風景と思いが詰まったカムイ外伝を聞きながら、ワインをたくさんいただきました。心にしみる私の大好きな歌です。

その後、私は九州に転勤して、現在にいたっておりますが、九州にも何度か講演に来ていただきました。先生に差し上げたお礼の手紙を紹介させていただきたいと思います。

「田村喜子様

佐賀平野は、一面、稲穂が黄金色に揺れる美しい季節となりました。お元気ですか？

昨年度は佐賀で講演していただき、ありがとうございます。講演の後のシンポジウムも、とても評判が良く、佐賀では、近年にない話が弾んだ、面白いシンポジウムだったと色々ところで言われます。

さて、先生のご講演をはじめ昨年度開催した講演会等を取りまとめましたので送付させていただきます。

また、先生のお宅で楽しく飲める日を心待ちにしております。

平成 15 年 10 月 10 日 武雄河川事務所長 島谷幸宏

先生がお亡くなりになり、かなりの時間がたちますが、まだ実感がわきません。「ねー島ちゃん、うちに飲みに来ない」と気軽に声を変えてくれるような気がします。この文章を書きながら、いろいろな思い出が頭の中をよぎり、悲しくて、なかなか進みません。いつも土木技術者と私自身を応援してくださる田村先生、本当にありがとうございました。安らかにお休みください。(914 文字)

(九州大学工学研究院 環境都市部門 教授)

## 田村喜子先生の思い出

下村 嘉平衛

私のハザマ時代の部下に、今村彰秀君（札幌地域開発研究所 07 年没）がいた。彼は札幌東高-東工大で、札幌で顔が効いた。その彼が田村喜子先生を連れてきた。それまで田村先生が、土木と深い係わりが有る事など全く知らなかった。

しかし、札幌南 5 条西 3 丁目・第 11 グリーンビルの「雪国食堂」や「風雪酒場」（何れも故今村君関与）に、ちょくちょく田村先生とご一緒するようになり、先生が土木の作品や先達の系譜を多数書いておられる事、北海道（お酒もちょっぴり）がお好きな事が判ってきた。店の人からは可愛い「おばちゃん」、私には可愛いけれど怖い人だった。

今手元に、「ヤポンスキー・ジュラウリア」なる CD がある。先生の作詞で、北海道出身の福沢恵介が歌っている。哀調を帯びた「丹頂鶴」の歌だ。

亡くなられてから聞くと、病名を伏せられ延命措置をされなかったらしい。東北大震災・原発事故・そこで働く人達等々、いくつも次の作品が先生の頭を去来しただろう。惜別の言葉しかありません。（457 文字）  
(NPO リサイクル技術代表)

### ●コラム：雪国食堂の暖簾

田村喜子先生が北海道で前途を大変囑望された二人の益荒男がおられた。一人は北海道開発局の石原勝さんで、もう一人は地域開発研究所の今村彰秀さんであった。田村先生はこの二人に対しベタ惚れであった。不幸なことにこの二人が働き盛りに亡くなられたことである。どれだけ悲しまれたことか尋常ではなかった。札幌へ行く楽しみのひとつはこれらの方々と雪国の長い夜を飲み語り合うことであった。その場所が雪国食堂であった。

墨蹟あざやかな雪国食堂の暖簾は田村喜子先生の揮毫によるものである。



在りし日の今村彰秀さんと  
田村喜子さん（雪国食堂にて）

# 雪国食堂



雪国食堂の暖簾と墨蹟

## 義と情の厚い田村先生を偲ぶ

須田 清隆

二年前に私が社長をしていたジオスケープを解散することを報告した時に、‘なんであんな良い会社をつぶすの、何処かと一緒にできないの。何とかならないの’と矢継ぎ早に田村先生から攻められた記憶が今でも鮮明に残っています。特に、田村先生の体調が優れないことを知っていただけに、自分のことより、私のことを心配し何とかしなさいよとの叱咤してくれた田村先生の情の深さを感じたのは言うまでもありません。

田村先生がなぜ、ジオスケープにそれほど思いを持っていただいたかは、私とジオスケープの関係にあります。1990年ジオスケープ発足から3年経過時に間組からの出向で役員に就任した時、会社の経営は火の車で資本金と同額の累積債務を持つ実質倒産会社でした。バブル終焉間、ゴルフ場の運営会社として設立した緑化会社を立て直すのに何をすれば良いかを、考えている時に、田村先生にお会いし、相談のような、愚痴のようなことを言ったことを今でも鮮明に覚えています。その時、田村先生は、間組には下村さんや新名さんもいるのだから、どんどん、その人たちの発想力を貰いなさいよ。ただし、力を借りたら返さなくてはいけないから貰いなさいとアドバイスを戴きました。それからだったと思います、ジオスケープは、急激に緑化主体の会社から高度な数値解析やCAD/CG技術を活用した景観デザインを始め地域活性化や過疎地対策などに時代先取りのソフトエンジニアリングへと転換していきました。ある意味、再生ジオスケープのコンセプトは田村先生が作ったと言っても言い過ぎではないと思っています。そんな田村先生との最初の出会いは、20年前、札幌21の会を主催していた今村さんからの紹介でした。当時、私が間組でCAD/CG技術に取り組んでいた頃、今村さんとの縁で小樽の再開発に当時としては最先端の景観シミュレーションを駆使したプロジェクトに参画していました。偶々、その件で札幌に出かけたときに、今村さんから‘今日、僕の恋人の田村喜子さんが来ているので一緒に食事をしよう’との誘いで田村先生とお会いしたと記憶しています。最初にお会いしたのは札幌の女将一人の古びた店だったと思います。店に入ると田村先生から‘今村さんは私の札幌の恋人です（恋人はあっちこっちにいるようですが）。今度、北海道の唄を創るの。カムイ伝説をテーマに作詞を頼まれたの、私は、北海道の雄大さや大らかさが大好きなのよ。・・・’そんな他愛もない話が延々と続き、気が付くと朝方になっていたことを記憶しています。その後何回か会った後、暫くお会いすることが無かったのですが、予期しなかった再会がありました。札幌の出会いから10年近い年月の経過後に学士会館で開かれたNPO風土工学デザイン研究所の総会でした。少し遅れて参加した総会には、田村先生が中央に座っていたので、会釈したことを覚えています。しかし、その後理事長挨拶で田村先生が立たれたので、些かビックリしました。総会終了後に、ご機嫌の笑顔の田村先生から‘須田さん元気でした。今度ねNPOの理事長をやるの。竹林さんのこと好きだから、応援したいのよ。須田さんもよろしくね。’との会話だったと思います。それ以降、田村先生とは亡くなるま

での11年の間NPOで一緒させていただきました。田村先生の訃報を聞いた時に、私の脳裏で浮かんできたのは数々の田村先生との思い出でした。それは何時ものお茶目な田村先生ではなく、多くは普段見たことのない情の部分の表情でした。一つは、どこかの役所で竹林さんへの対応で若い担当者の横柄な態度に対して、‘竹林さんにも問題はあるわよ、年端もない若造が土木の世界での大先輩に対して取るべき態度ではない。人として私は許さない’と声を荒げて怒っていたときの表情です。

二つは、尼崎の鉄道事故でマスコミがJR西日本の幹部を吊し上げしていることに対する‘土木屋さんが命がけでやっていることを知ったらこんな記事なんて書けない。物書きとして許せない’とマスコミの報道に憤慨していたときの表情です。

三つ目が、今村さんが癌で亡くなったと聞いた時‘私が変わってあげたい、神様が許せない’と悲痛な顔で嗚咽していたときの表情です。そして4つ目が、間組解体の時です。田村先生の口から、’何処にも負けない技術を持った素敵な人たちが沢山いるのにね。下村さん、小寺さん、倉橋さん、本田さん・・・、その人たちが創った歴史がなくなることに、無念の情を示した表情です。・・・等々。

それらの何れの表情にも田村先生の義と情の厚さを感じるものでした。

こんな義と情の田村先生が、とてもご機嫌だったのが温泉と美味しい食を堪能した時の顔でした。田村先生とは何回か、北海道の講演や調査を一緒にさせてもらいました。帰京後、会うたびに田村先生からは、余程気に入ったみたいで、羽幌のサホーク、増毛の甘海老など美味しかったとの話を良く聞きました。食に関しては淡路島の思い出もあります。淡路島で防災フォーラムを計画していた時、淡路島のはも鍋や淡路ビーフなど御食国の話に、’私も参加する’との一言で田村先生にフォーラムでのご挨拶をお願いしたことがありました。フォーラムでの現地見学会に参加した後に、懇親会で食した福良の手延べ素麵を使った鯛素麵には大層喜ばれていました。

そんな色々な思い出を戴いた田村先生に、思いを掛けていただいたジオスケープの歴史がなくなることに、どんな気持ちで受取ったのか、あの時の悲しそうな顔は、私自身に心の中では怒っていたのではと・・・。田村先生、最後になって心配かけて申し訳ありませんでした。そして、本当に楽しい思い出ありがとうございました。(2361文字)



淡路島防災フォーラム見学会参加の様子  
(田村喜子先生と高橋裕先生)

(NPO 風土工学デザイン研究所 専門調査役)

## 田村喜子先生を偲んで

関 博之

田村先生と最初にお会いしたのは今から13年前、平成11年の秋頃のことでした。当時私は北海道開発局網走開発建設部の次長をしており、地元の民間の方々が地域の活性化に向けて取り組んでおられたイベントの関連で田村先生に審査委員をお願いされ、網走でひらかれた審査委員会に来道されたときにご一緒させていただきました。田村先生には最初から気さくに接していただき、すぐに旧来からの知人のように遇していただきました。それ以来、最初から変わらない心の通ったお付き合いを長年させていただきました。

この10数年の間に、田村先生は我々がお願いした仕事などで何度か来道されていますが、仕事の場合は当然として、仕事以外で来道された時にも良く声をかけていただき、ご一緒させていただきました。その中で、いくつか思い出に残っている話を紹介させていただきます。

正確な日時は忘れてしまったのですが、竹林先生と田村先生がご一緒に天塩川流域下川町のサンルダムに来られたことがありました。時期は2月ごろだったと思いますが、竹林先生がダムの職員と打ち合わせをしている間、時間が取れたのでオホーツク海の流氷を見に車を走らせ田村先生と私の二人で興部町の海岸まで行き、運よく大規模に接岸していた大氷原を田村先生に見ていただくことができたことがありました。真っ白な大氷原を目の前にして、しばらくの間無言で立ち尽くしておられた田村先生の姿が印象的で、鮮明に記憶に残っています。

また、天塩川のカヌー下りを視察していただいたこともありました。ダウン・ザ・テシオペツと題して毎年夏に開催される大規模なカヌー下りで、最長で100マイルの川下りを数日かけて行う大会です。田村先生には中川町周辺の天塩川で実際にカヌーに乗っていただき川下りを体験していただきました。最初は尻込みされていた田村先生だったのですが、エスコート役にカヌーのベテラン2名を付け、快適な川下りを過ごされるうちに笑顔になられ、心の底からカヌー下りを楽しんでおられる様子でした。この時の写真を探したのですが、残念ながら出てきませんでした。確かカヌー下りを終えられて笑顔でクルーと一緒に収まる田村先生の写真があったはずなのですが、見つけだすことができず、皆様にご紹介することができませんでした。

田村先生はめっぼう夜にお強く、先生のお気に入りの歌手がいるすすきののパブで遅くまで楽しい夜を過ごさせていただいた思い出もあります。また、ご自宅にもお邪魔させていただき、多くの先生のお友達と交流させていただいたこともありました。

仕事の面では、土木技術に造詣の深い先生に寒地土木研究所の評価委員をお願いし、厳しくも温かい目線で評価していただいたことが思い出されます。

田村先生の思い出は尽きませんが、先生には公私共に大変お世話になりました。田村喜子先生、本当にありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。(1229文字)

(国土交通省北海道局)

# 国土建設の浪漫を追う

高橋 裕

1983年、土木学会が初めて設けた著作賞の一般の部第1回受賞が田村喜子さんの“京都インクライン物語”であった。それまでの土木学会賞は、学者の研究論文、優れた土木施設または構造物の設計、施工などが主体であった。しかし、筆者が理事の際、学術的著作はしばしば学術論文を凌ぐ学会への功績であり、さらには作家による土木事業の成果、または土木技術者の奮闘ルポなどは、土木の意義を一般に周知させる点で、従来の学会賞に劣らない業績であるとの観点から学会賞の対象となった。

京都インクライン物語は、明治初期、京都を蘇生した琵琶湖疏水の物語であり、その工事の若き土木技術者、田辺朔郎の生き様を、彼女が熱情をこめて、リアルに画いたルポ文学である。その当時、まだ土木界に知り合いもほとんど無かったので、取材はまことに体当りの連続であった。

田辺朔郎さんは“私の一生の戀人”と云い通していた彼女は、田辺の次の大事業であった北海道鉄道幹線ルート設定の奮闘を追い、“北海道浪漫鉄道”(1986, 新潮社)にまとめた。そこで田辺と広井勇の邂逅の舞台を演出し、彼女は北海道の大地をこよなく親しむようになる。

以後、土木技術者の人生観、倫理、使命感、責任感に感動した彼女は、次々と土木家の生き様を追い続ける。バブルが弾けた頃から、人気の落ちた土木に反撥を感じた彼女は、自ら“土木応援団長”を名乗り、土木技術者の眞摯な生き方、土木事業のすばらしさを追い続けた。20世紀から21世紀の境目には、山海堂編集者の求めに応じ、20世紀で土木のロマンに生きた20人を彼女の主観で選ぶとの条件で“土木のこころ”(2002, 山海堂)が出版された。最近、彼女はこれに数名を加え、従来の原稿もさらに充実して出版しようとしていたが、それは果たせなかった。

土木技術者を取り上げた作家は多いが、彼女のように土木技術者を書くことに徹して土木家の生きざまに魅せられて、最期まで土木を書き続けた作家を筆者は知らない。

彼女は自作の紹介のみならず、土木関連の多くの話題を求めて全国各地で講演にも活躍した。筆者も北海道では旭川、札幌、函館で、ご一緒に講演会に臨んだ。講演の内容はもちろん、つねに土木への限り無い愛情に満ち、熱のこもった気魄をひしひしと皮膚に感じた。

作品のテーマは多岐にわたった。新潟での土木学会大会開催に合わせて“物語分水路”(1990, 鹿島出版会)を世に問うた。大河津分水工事の現場監督として獅子奮迅の働きを遂げた宮本武之輔が主人公である。大河津時代の宮本の戀人が寺泊に生存中と聞いた彼女は、寺泊まで追いかけてインタビューし写真をとって、筆者に自慢気に見せて下さった。

佐久間ダムの功労者、永田年も、彼女好みの土木屋であった。永田の葬儀は1982年正月であった。彼女は“その葬儀の日に夏の夕立のように烈しい雨が降った”と書いた。葬儀

に出た人から聞いたという。しかし、それをずっと気にしていた。本当に雷雨のようだったのか確かめたいと云い通していた。それを聞いて作家の良心の一端に触れたように感じた。

鉄道関係の著作も多く、鉄道仲間に田村ファンは特に多かった。多くの鉄道関係の著作のうち、筆者は“剛毅木訥（1990, 毎日新聞社）”を愛読した。藤井松太郎の苦難の生涯を画き、特に第7代国鉄総裁時代、国会、組合、マスコミとの対応に苦慮した人間藤井をリアルに画いた一代記として、藤井の剛毅木訥振りを画いている。

講演後のご一緒の旅の思い出は尽きない。旭川では旭山動物園とスタルヒン球場へ出かけた。何事にも積極的に関心を深める彼女とは、以後プロ野球の投手論にしばしば花が咲いた。長崎へは前後2回の講演に同行させて頂いた。その講演の内容よりは、出島、中島川石橋群を回ったあと、1982年7月の長崎大水害、特に眼鏡橋の被災とその復元物語をめぐる話題に彼女の関心は特に高かった。

旭川、長崎その他の話題でも、そこに関与した人々の情熱こそ、彼女にとっての魅力であった。アメリカ西海岸の河川視察の際、小高い丘に登った。川を見るには急斜面を下らざるを得なかった。彼女には山中の淋しい場所に置いてけぼりにしたので、どんな動物が出るか判らないと大変恨まれたが、私たちが帰って再会すると、一緒に残ったバスの運転手さんとすっかり仲良くなって、和気藹藹と片言の英語を交わしていた。彼女の限りない人懐かしの賜であった。それに筆者は何回となく慰められた。彼女との付き合いで同様な感情を抱き友情を深めた人々が多いに違いない。彼女との別れが淋しいのは、欠けがえのない土木作家がわれわれの身边から去ったことはもちろんではあるが、それ以上にあの温顔にもはや接することができず、何とも云えぬ楽しげな語り口を二度と聞けなくなったことである。

彼女の広尾や麻布十番のマンションには、連日ボーイフレンドが押し寄せ、飲みつつ談笑を楽しんでいた。それは彼女の飾らない率直にして、その周辺に和気を漂わせていた人柄のなせる業であった。癌を宣告されてもはや長くないことを覚った彼女は、抗癌剤などの薬品治療を絶ち、来客に最後まで笑顔で接したいとの念願からであった。亡くなる半年前から連日来客に囲まれた彼女は楽しげな表情を絶やさなかった。見事な最後の生き様であった。

土木応援団長の後継者は居ない。学界、官界、業界では、いかなる巨人が世を去っても必ず後継者がいる。しかし、田村喜子のところを継ぐ人は居ない。彼女が去って、私たちは今更ながら、その存在が全く欠けがえの無いものであったことを知り、愕然とする。われわれは“永遠の心の戀人”を失なった。その心の空白を埋めるには、彼女が画き続けたわれわれの偉大な先輩たちの志を辿り、その輝ける人生を慕い、それに少しでも習うことであり、同様な土木のところを体した後輩を育てることである。(2414文字)

(東京大学名誉教授)

## 田村喜子先生を偲ぶ

高橋 渡

先生との出会いは、平成9年 帯広 中札内の美術村、札内川のピョウタンの滝などと一緒にさせていただいた時から始まった。私の先輩である、故 石原さんの意志を受け、北海道各地の土木遺産をご案内させていただいた。

翌年から、東京勤務。折しも宿舎が南麻布だったため、先生のお住まいのマンションには、ちょくちょくお伺いさせていただいた。北海道から美味しい食べ物をお土産に持参し、先生に薦められ、美味しいワインを頂く。後でわかったことですが、息子さんがビオワインで有名なマヴィを運営されているとわかりびっくり。これがきっかけで、それ以来ワインの虜になり、今ではソムリエの資格を取ってしまった。

この頃の思い出は、先生が作詞をされたカムイ岬の歌を、森山良子さんに歌っていただいたときのこと。そのときのお祝いパーティーの時、先生の喜んだ顔を今でもはっきり思い出す。

その後、独立行政法人に出向になったが、ここでもその評価委員に先生がなられており、またまた、お世話になる次第。先生とのご縁は、続く。

平成21年10月には、喜寿のお祝いを麻布十番の新しいマンションで開かれた。沢山の方にお集りいただき、先生のご人徳の深さを改めて感じた次第。ケーキの前ではしゃがれていらっしゃった先生のお姿が目につかぶ（下がそのときの写真です）。

いつも土木屋さんの応援団長として、また、いつもお母さんのような包容力で私どもを支えてくださり、本当に本当に有り難うございました。これからも、先生の意志を大切に、夢とロマンを持ちながら与えられた使命を全うしていきたいと思います。（合掌）（724文字）



喜寿のお祝いで （平成21年10月25日）

（国土交通省 北海道開発局）

## ●コラム：石原勝とのエピソード

石原 勝さん

平成7年3月25日没 享年42歳

当時、国土交通省 北海道開発局 建設部 道路企画官として北海道の道路行政について担当されました。

石原さんは、田村喜子先生に次のようなお言葉でお話されたと聞いています。

「北海道の鉄道開拓と同じように、北海道の道路開削も、土木技術者の熱きところで進められました」

石原さんの持って生まれた明朗・快活な人柄は、先生にも大変好意にいただき、親交が深かった土木技術屋の一人だったのではないのでしょうか。

おかげで、田村喜子先生は北海道の強力な応援団の一人になっていただきました。

最初は、国道230号中山峠【定山溪国道】の改良現場に田村先生をお連れしてご案内されています。【定山溪国道】は、40年前に完成したシビックデザインの原点というような道路で、環境と景観を考慮して「公園のような道路をめざして」設計・建設されています。そのときの記念写真が以下の写真です。

石原さんは、その後、急遽入院され、帰らぬ人となりました。

その後、私を含め、北海道開発局のメンバーが、石原さんの遺志を継いで、北海道各地の土木遺産をご案内させていただきました。ここに、謹んで先生のご冥福をお祈りさせていただきます。

(文責 北海道開発局 高橋 渡)



定山溪国道にて（平成6年）（左から、石原 勝さん、田村先生、大谷 元定山溪国道改良事業所長、難波 元札幌道路事務所長）

## ●コラム：「浪漫列島・道の駅めぐり」より

北海道から沖縄まで、移動距離およそ六万七〇〇〇キロ、二年余りにわたる長い旅だった。訪れた先々で大勢の方とお会いし、胸にあふれるほどのまごころに触れ、たくさんの感動をいただいた「しあわせ列島」の旅だった。「好奇心旺盛、臨場感大好き」の私にとって、今回の「道の駅めぐり」はすばらしい体験を重ねることになった。写真や画面では表し尽くせない現場の魅力とじかに触れ合う、それが旅の魔力というものだ。ミステリアスな日本、山紫水明の国・日本、海山の国・日本、神話と伝説の国・日本、歴史と浪漫の国・日本、日出づる国からテクノロジーの国・日本まで、アミューズメント列島を歩く。せまいようでも日本は広い。四季折々の日本の道と「道の駅」。

# 全国ダム巡りの旅

竹林 征三

私の小学1年生から大学・大学院卒業までの同級生の松村博さんが『大阪の橋』で昭和63年度の第6回土木学会著作賞を受賞した。京大土木42年卒の会（志仁会）のメンバーが集まってそのお祝いの会をしようということになった。その場に『京都インクライン物語』を出され第一回土木学会著作賞を昭和58年に受賞された田村喜子先生も参加して共に祝っていただいた。何故に志仁会に田村喜子先生が参加してくれることになったのか、志仁会のメンバーの有岡正樹さんが田村先生に声をかけて松村博さんの著作賞の祝賀会にゲストとして参加をお願いされたのである。田村先生と有岡さんの関係も古く、田村先生が小学校の時、国語の先生から作文を褒められたことがきっかけで作文が得意とするようになり、その後新聞記者を経て小説家の道を歩まれた。その国語の先生が有岡正樹さんのお父さんだった。田村先生は有岡先生のお宅にも良く出入りされ、正樹さんの幼少のころの事を良く覚えておられ正樹ちゃんと呼んでおられた。

田村先生が永遠の恋人と称していた田辺朔郎の偉業・琵琶湖疏水のいろいろな技術資料を土木屋の立場から収集され技術的内容を支えられたのが有岡正樹さんである。

京都インクライン物語を機に、田村先生が土木技術者の心意気を男のロマンとして小説にする事を生涯のテーマとされるようになった。祝賀会の場で、私は田村喜子先生に初めてお会いし、地味な土木屋の生きざまを男のロマンと捉えられる田村喜子先生の人徳に強く感動うけた。そしてその場で、思いついたのが、ダム屋のロマンであった。ダムはその当時から山間の集落を水没させることから、ダム建設反対の書物が多く出版されていた。その一つが蜂の巣城物語『砦に拠る』であった。ダム建設反対運動の室原さんは英雄化されているが、建設現場の所長達は、国土保全のために情熱を持って業務にあたっておられる。こちらの人達には国の為、多くの人の為、わが身を粉にして業務に遂行される男のロマンがある。当時、現場の所長をされた野島虎治さん、副島健さんが御健在であった。この二人の男のロマンを聞いていただきたい。またそれらの舞台になった松原・下笠ダムの現地も見ていただきたい。其の他、全国各地のダム現場にはその地のダム建設に命をかけているダム屋がいる。全国のいろいろなダムの現場を見ていただきたい、そして過酷な山奥のダム現場で国の為命をかけて黙々と建設にあたっている人がいる。それらの人の男のロマンを聞いていただきたいとお願いした。先生は願ってもないことと了承していただいた。私は翌日から早速、田村先生の全国ダム巡りの視察スケジュールを組んだ。どのダムが適当か、ダム現場では誰の話聞いていただこうかいろいろ思索をめぐらした。私が田村先生に随行して、それぞれのダム現場でダム技術の心意気やダム技術の秘話をいろいろお話をしたいと考えたが、私は当時、開発課の専門官の立場で出張に行ける日程がなかなかとれない。当時同じ課のAさん、Kaさん達に日程をさいてもらい随行をお願いして始まったのが田村喜子先生の全国ダム巡りの旅であった。しかしこの全国ダム巡りは途中で

とんでもない結果が待ち受けていた。ダム視察の後、その日の宿泊地は山間の温泉が良かろうと行程が組まれた。その温泉の泉質は相当濃度が濃く、かつ合わなかったと見え、田村先生は全身、ひどい皮膚炎を起こされてしまった。帰京後、皮膚炎の治療のために病院で治療を受けるがなかなか良ならず、皮膚炎に効果があるというもの、例えば金箔入りの風呂が良いと言われれば、入られたり、いろいろの事を試されたが、皮膚炎との戦いは、本当に大変につらそうであった。結果的には完治するまで一年以上かかれた。私はこれまで温泉でここまでひどい炎症を起こされることがあるということを全く知らなかった。田村先生は会う人、一人ひとりに対し非常にきめ細かい配慮をなされる。それに現地へ行けば行くところ行くところの風土に温かい視線で接しられる、大変きめ細やかな感性の持ち主である。田村先生は微妙な風土を鋭敏な皮膚（身体全体）で感受される。田村先生の皮膚の感受機能は人一倍研ぎ澄まされて繊細なのである。田村先生の肌はきめ細かい・やわ肌なのである。温泉の泉質は余りにも強烈で、田村先生のやわ肌には強過ぎたのであろう。ダム巡りの現地視察を企画したものとしては、田村先生に思いもかけずこれほどまでに苦痛な目に合わせる結果になるとは想いも至らなかった。全国ダムめぐりの旅は一時中断の形となり、その後田村先生とお会いする度に、皮膚炎の治療で苦労されている話を聞く結果となり、本当に申し訳ない思いであった。当初、田村先生とは、ダム現場で取材したダム屋の心算を書きとどめていただき、ある程度まとまれば本として出版する話になっていた。このような経緯で田村喜子著『全国ダム巡り』の本は幻と消えてしまった。当時田村先生は足場の悪い危険なところは別として、横坑にも入られて、「ダム技術の心は岩着にあり」とか「ダム屋はワン・ノブ・ゼム」という言葉に深く感銘を受けられたようである。第11回風土工学シンポジウムの主催者挨拶で『取材の段階で今も私の心の中に本当に輝いている言葉があります。ある方が、これは僕が作ったのです。「ワンノムゼム」ですとおっしゃいました。土木の仕事は、大勢の方が心と力を合わせて出来ることですが、携わった方一人一人が「これは僕が作ったのだ」と誇りをお持ちになっている。それから、もう一つの言葉は「ダム屋は、岩着にかかっている時が、一番幸せなんです」とおっしゃっていました。私はその時初めて岩着という言葉を知りました。水中・地中等の深い所にある基盤岩に構造物の基礎を定着させることです。これがしっかり出来ていれば、上の構造物は大丈夫。構造物が完成した時、岩着部分は誰の目にも触れることはありませんが、それに責任と情熱を感じて作るというお話を伺った時、バロメーターが上がったのを覚えています。』と述べておられる。全国ダム巡りの旅でダム屋の心をしっかりと掴まえたのである。

田村先生は全国ダム巡りの旅の後は、全国『道の駅巡り』の旅や、建設省（国土交通省）の各種審議会や各種委員への要請が急に次々飛び込んでこられ、土木技術者の応援団長としての八面六臂の活躍が始まった。（2645文字）

（富士常葉大学名誉教授・山口大学時間学研究所客員教授）

### ●コラム：田村喜子著作集の中で唯一の共著作

田村喜子先生は小説家であり、いわゆる物書きを本職とされておられる。田村先生の作品は随筆的なものを除き物語は全てで20作ほどである。そのほか歌謡曲の作詞が2作ある。小説家であるので当然のことながら単著であります。しかし一作だけが共著となっている作品がある。それは創作民話『鬼翔平物語』である。そういえば技術論文では共著という形式は一般的であるが、小説家の創作作品で共著というのは大変珍しいというより、他にないのではなかろうか。『鬼翔平物語』は岩手県北上市が鬼剣舞の里・北上市を世にPRしようとして広く創作民話を公募したものに応募し最優秀賞を受賞した作品である。風土工学の手法を駆使して創作された作品である。作品にまつわるエピソードが「風土工学研究」No. 58号に詳細に報告されている。

### ●コラム：ラジオの生放送で風土工学を解説する

風土工学が誕生した当時、NHKの朝のラジオ番組で、新しく世に出た風土工学とはどのような工学かを紹介したいということで、取り上げられたことがある。その時出演したのが風土工学を構築した私・竹林であった。その放送を聞いた田村先生から「竹林さんの説明、何を言っているのかさっぱり分からなかった。竹林さんは喋るのが本当に下手ね！」とさんざんの評価を受けることとなった。

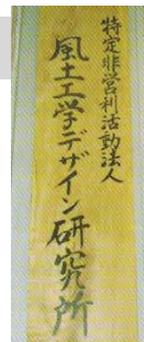
NHKのラジオ番組で風土工学を再度取り上げていただくこととなった。「私が理事長だから、私がわかりやすく説明してあげるわよ！」ということになった。

生放送の当日の朝になった、田村先生から風土工学デザイン研究所の事務局長の灘勝宏さんにTELがあり、田村先生が朝になって急にギックリ腰になって痛くて動けなくなったとのことであった。灘さんが自宅まで迎えに行き、病院で処置を受けて、痛い身体を支えてNHKの録音室にたどり着いた。痛さをこらえていることなど、全く感じさせない爽やかな声で解説された。放送を聞いた多くの方から風土工学とは何かよくわかったとの声が多く届けられた。

### ●コラム：田村喜子も筆の誤り

田村喜子先生の理事長としての初仕事が旧・徳山村から送られてきた大きな橡の木の板に研究所の看板を書くことだった。2か所少し気に食わないところがあるという。気が付きますか。

「弘法も筆の誤り」ということがある。名筆家・田村喜子も少し手元が狂うことがある。「田村喜子も筆の誤り」ということである。



# One of Them

竹村 公太郎

## 宮ヶ瀬ダム

27年前の昭和60年（1985年）、私は関東地方建設局の宮ヶ瀬ダムの所長でした。

宮ヶ瀬ダムは神奈川県最後の水瓶であり、当時の建設省では最大の規模のプロジェクトと言われていました。ダム規模も大きかったのですが、水没者世帯が281戸と、今では考えられないほど多くの水没世帯でした。しかし、長年、宮ヶ瀬ダムの諸先輩たちは、水没者たちの苦しみと悔しさに耳を傾け、神奈川県民の未来の発展と安心のため、宮ヶ瀬ダムは必要であることを説明し続けました。

そして、ついに補償基準の妥結にこぎ着け、個別各戸ごとと補償を整えて、一軒そして一軒と代替地に移転をしている頃だったのです。

前任所長の後を継いだ私の任務は、代替地へ移転した観光業を営んでいた水没者たちが、一日も早く観光業として生活再建ができるように、と言うものでした。

河原の近くで観光をしていた人たちが、高台の代替地に移ったのです。「河童は川から上がって生きては行けない。ダムの水が貯まるまでの間、どうしてくれるのだ」とい厳しい水没者たちの悲鳴に近い声を聞くのが私の役目でした。

大・宮ヶ瀬ダムの建設所長と言っても、土木工事の見せ場であるダム本体工事には遠く縁がなく、個別水没者や、当時まだ進んでいなかった2本の導水路の地元説明に明け暮れていました。

## 田村喜子さんが宮ヶ瀬ダムへ

秋も深まった頃、河川局の先輩から電話があり「田村喜子さんという作家がダムを見たいとおしゃっている。対応してくれ」という内容でした。

宮ヶ瀬ダム現場はこのような状況であり、ダム本体の建設はまだ先で、付け替え道路工事と代替地造成と仮排水路の一部工事しかありません。そのようなダム現場ですとお答えしましたが、それでも良いと言うことで、お迎えすることとなりました。

私は前年の1984年の暮れまで、米国ニューオーリンズで開催されていた国際河川博覧会に派遣されていました。

宮ヶ瀬ダム工事事務所長になって1年目の私は、作家・田村喜子さんの著作を全く読んでいなかったのです。

田村喜子という女性作家が、それ以降一貫して、私たち土木技術者たちを励ましてくれることになるとは知らなかったのです。女性なのにダム現場が見たいなんて変わった人だな、という気持ちでした。

## 宮ヶ瀬ダム現場にて

当日、小田急の本厚木駅でお迎えしました。お会いした時のことは今でも覚えています。田村喜子先生は華やかなオーラに包まれていました。女性作家と話をしたことなどない現場作業着の私は、まばゆくて正視出来ないほどでした。さらに、田村先生の上品な京都弁

に、関東育ちの私は臆してしまいました。

しかし、車で宮ヶ瀬ダム現場に向かう間で、田村先生のユーモア溢れるお話を聞いているうちに、緊張は解きほぐされていきました。

まず、水没予定地と水没者の方々が移転を開始している代替地へ行きました。ダム建設そのものはある意味で簡単ですが、水没者の生活再建のお手伝いのほうがはるかに難しい。何しろダムは昔から続いてきた村をそっくり水没させ、この世から消滅させてしまうのです。決して金銭補償で済む話ではありません。水没者の方々がもう一度、新しい代替地で共同体を形成するお手伝いが、最も大切な仕事だと言うことをご説明しました。

次に、虹の大橋の建設現場に着きました。ヘルメットをかぶり、長靴をはき作業上着を着てもらいました。先生は現場姿になったのは初めてだと言って、大変喜んでおられました。深い谷に架かった工事用の仮橋を進んで行きました。その仮橋は揺れましたが、先生は平気な顔で歩いていました。

次は、仮排水路トンネルの現場でした。大きなトンネルの坑口に立ってトンネルの奥を見ながら、私は「今日は工事の関係でトンネルの中に入れていいのです」と言うと、田村先生は私を睨みながら「山の神が嫉妬するからでしょ」と言い返されました。工事中のトンネルに女性が入ると「山の神が嫉妬して事故が起きる」と言い伝えられていることを田村先生は知っておられたのです。

3時間あまりの現場視察を終え、事務所に帰りました。

事務所でお茶を飲みながらダムの話に盛り上がりました。私は以前、鬼怒川の川治ダム、会津若松の大川ダムの経験があり、田村先生は大変上手に私のダム話を引き出して興味深く聞いてくれました。

## One of Them

それから2ヶ月ほどたった時、ある建設業界の雑誌が届きました。その中に田村先生の随筆がありました。

題名は「One of Them」でした。

その中の一節に『あるダム建設の所長と話をしていた時、「ダム建設所長は男として誇りでしょう、うらやましいですね」と言ったところ、そのダム所長は、「いや私は単に One of Them です。ダムは長い歴史の中で多くの人間が関わっています。私はその中の一人ではないです」というその所長の返事が心の中に染みこんだ』とありました。

自分は忘れていましたが、確かにそのようなやりとりを田村先生としました。先生はそれをきちんと覚えておられ、文字にしてくれたのです。

なんとなく言った私の言葉が、このような雑誌に載るなど思いもよらなかったのが、本当に嬉しく感謝の思いに包まれました。

この時から、私は田村喜子ファンになったのです。

39歳の私は、無鉄砲な青春に終わりを告げ、社会の歯車になる覚悟を決めていた時代でもありました。(2223文字)

(公益財団法人 リバーフロント研究所)

# 京都のステディー

建山 和由

田村先生と最初にお会いしたのは、京都・祇園の八坂神社のそばにあるとある飲み屋でした。20年くらい前のことだと思います。この店には、大学の先生、役所の方々、建設会社やコンサルの技術者の皆さんと土木関係者が夜な夜な集まってきて、始終とぐろを巻いていました。田村先生は、京都に来られたときにはよくこの店に来られて、我々と一緒に機嫌良くお酒と土木屋さん達との会話を楽しんでおられました。

小樽運河物語もこの店で執筆が決まりました。ひょんなことからある方が小樽運河を取り上げてほしいと依頼され、話が盛り上がり出版にまでこぎ着けました。このとき、小樽への取材に同行させていただき、田村流本作りの方法をしっかり見せていただきました。関係者へ綿密な取材を行い、現場を見てイメージを作り、ストーリーを作り、細部の整合性を関係者に確認するというプロセスを何度も繰り返して本ができていくということを知りました。そういう意味で、田村先生の本は、単なる小説ではなく細部まで丁寧に裏を取った事実に基づいていると言えるのだらうと感じています。

この飲み屋では、いろんな土木の現場の話も出ます。おもしろそうだとすると「よし行こう」となり、すぐに話がまとまります。そういった現場にも何度か一緒しました。田村先生と一緒に現場に行くと驚かされることは、現場のことを実によくご存じだと言うことです。本を作る際の綿密な取材の成果か飲み屋での土木屋さんとの会話からか、とにかくよくご存じでした。ご自分では、土木屋を自負しておられたかもしれません。

当時、田村先生のご実家が京都の中京区にあり、帰る方向が同じ私が、いつしか田村先生をご自宅までお送りする役になっていました。急で狭い階段を3階まで上がったところにあるこの店からの帰りは、酔っ払った二人にはなかなかスリリングでしたが、仲良く手をつないで階段を降りて、車でご自宅までお送りしました。そんなことが何度も続く内に田村先生から「京都のステディー」と呼ばれるようになりました。田村先生のステディーの定義はよくわかりませんが、着目すべきは、ステディーに「京都の」がついていることです。京都だけではなく、日本中にステディーがたくさんおられるということです。

日本中のあちこちで土木屋さんとお話され、いろんな話を聞かれたという点では、誰よりも日本の土木のことをご存じだった方かもしれません。

土木を理解して、小説を通じて一般の人々にそれを伝えるという役割を担っていただいていた田村先生がおられなくなったと言うことは土木屋さんにとっては単に寂しいと言うだけでなく大きな損失です。

謹んでご冥福をお祈りします。(1119文字)



(立命館大学・理工学部)

# かばん持ち

田中 雄作

「それじゃあ『かばん持ち』させて下さい。」 喜子先生と函館旅行にお供した時のことだったと思う。

皆さまよくご存知のとおり、喜子先生には 田邊朔郎 をはじめとする「恋人」や「ボーイフレンド」がたくさんおられた。「私もお仲間に入れて下さい。」とお願ひしたところ、「そーやなあー」とはっきりしないお返事だったので、冒頭の発言となった。先生は笑いながら「そんなら、雄作さんは私の『かばん持ち』してちょうだい。」とのお言葉をいただいたのであった。

喜子先生に始めてお目にかかったのは、平成に入って間もない頃だった。その当時私は奈良県に建設中の「大滝ダム」で施工企業体の副所長をしていた。同窓の有岡君から「今度、田村喜子先生をお連れするから、案内を頼む。」と言われたが、私は「京都インクライン物語」は読んでいたものの、先生がどのような方かよく存じ上げていなかった。当日、小柄な「おばさん」がやって来て、建設省（当時）のお役人を従えて、まあよく動かれること！！ あちこち見学された後、「試掘横坑」に入りたい・・・とおっしゃる！ 「トンネルには女性は入れないことになっていますので・・・」と申し上げ



2003年6月28日函館港の朝市で

げると、「私はもう女やないからかめへん！」と言われて、ご案内したのを鮮明に覚えている。

以来、20年以上のお付き合いをさせていただいた。主に有岡君主催の「まーいい会」で、美味しいものを食べたり、楽しい旅行のお供をしたり・・・。途中からは家内もお仲間に入れていただき、『ヨシコ』（家内の名前は よし子）は美人にきまってるのよねえ〜。」と可愛がって下さった。

私も現役時代はそれなりに忙しくて、なかなか『かばん持ち』のお役目を果たせなかった。やっと free になって、これから・・・というときに旅立たれてしまったのは残念ではない。いずれ彼岸でお勤めをさせていただこうと思っているが、いまま少しのご猶予をお願いしたい。私の席を空けておいていただくようお願い申し上げます。筆を置く。

合 掌 (890文字)

# 『北海道浪漫鉄道』と「技術屋のころ」

～北海道開拓の源初点～

新山 惇

## 田村喜子先生とのこと

それにしても、訃報にびっくり、自宅から近い地下鉄宮の沢駅、札幌市生涯学習センター・ちえりあ大ホールで、昨日の土曜日10:00～12:00、土木学会北海道支部主催、札幌市教育委員会後援の春休み無料アニメ映写会「明日をつくった男、田辺朔郎と琵琶湖疎水」があり、まとめの解説者として田村先生ご本人にお会いしたばかり、二十年程の深いご縁を感じました。

国土づくり・地域づくりの面で、産・学・官の共通の仲間も多く、講演会・委員会などでも顔を合わす機会も在ったが、東京での南麻布官舎に近い先生の旧宅、そして札幌での先生ののれんの“雪国食堂”での懇談会は特になつかしい。

先生と昵懇・ころろがより接ったのは、やはり『北海道浪漫鉄道』を底本とした私の読解「技術屋のころ」であると思っております。本当は「土木屋の精神」としたいところですが、いわゆる土木学・国土学の如く、より汎い視野での想いを述べさせていただきました。

きっかけは、平成8年4月末、全国から集っての北海道技術士センター（日本技術士会北海道支部）の設立30周年大会での冒頭の記念講演、私の「技術屋の精神」でした。実は、平成8年2月10日の一般国道229号積丹半島・豊浜トンネル崩落事故の後、未だ原因調査委員会の設置、応急復旧・本復旧工法の選定、遺族・慰霊碑の対応など心労の重なる現地対策本部長の時、仮復旧の後に札幌へ戻ったら、田村先生からテレビの画面を見て「〇〇さん、普段の貴方でないじゃない。元気を出しなさい…」と電話で励まされた状況下でまとめることとなりました。又、平成10年田村喜子作詞、原正美作曲、森山良子歌の遺族の想いを伝える「カムイ伝説」をつくれ、東京渋谷の吹き込みにも参加させていただいた。そして、役人生活を終えて母校の特別講師を務めることとなり、私の学生の頃は先輩の国土総合開発計画と北海道総合開発計画の国土基盤整備が中心の建設政策でしたが現下の社会基盤整備の在り方、特に実務・執行面が問われる中、技術者倫理を加えることとなっており「土木技術者の倫理」の資料として「技術屋のころ」をつくりました。

## 「技術屋のころ」の抄録

田村先生の『北海道浪漫鉄道』を縦軸に、私の「技術屋のころ」を横軸に織り成したのですが、北海道開拓の基幹交通網は田辺朔郎が描き、拓いた北海道鉄道線路図（明治32年4月）です。田辺朔郎は北垣国道京都府知事に請われ、琵琶湖疎水をつくりましたが、再び北垣国道第4代北海道庁長官に呼ばれ、北海道鉄道敷設部長に携わることになり

ました。「技術屋のころ」は「津軽の滄海の渦潮わけて、雄々き想いを北斗に馳する…」の北大寮歌「津軽の滄海」の津軽海峡から始まります。

#### I. 北海道開拓の精神 ～熱き心の入口は津軽の海に有り～

明治29年7月、田辺朔郎は「前方に見えるあの北海道に、鉄道を敷くためにやってきたのだという実感が胸の深いところでごめいた」とありますが、それに対し、北海道開拓のいわゆる御雇外国人で黒田清隆とも親交深い、北海道開拓使最高顧問ホーレンス・ケブロンは明治5、6、7年と3度の北海道の旅をしています。「船は弧を描いて堂々と函館の港に入った。…日本沿岸航路の船、ジャンクでいっぱい…栄あるコロラド号が故国と自由の象徴である星条旗を高く掲げて泊まり、しばしの間、文明国の唯一の代表である。これを眺めながら私は考えた。共にきた多くの勇敢な乗組員がまだ生きている間に、この広い港が世界のあらゆる国の船でいっぱいになり、そして、地球上最大の二大陸を結ぶ盛んな通商基地になるだろう。」と西欧近代化を目ざす明治維新の熱き精神が伺われます。

#### II. 企画・計画する人 ～豊かな構想力と緻密な判断力～

3時間にも及び大蔵大臣井上馨と北海道鉄道部長田辺朔郎の会談に対して横軸はGHQから解放された日本の戦後の民主化・経済大国を目ざしてのスタートを想っての工事再開へ向けての古川薫著「夢の道―関門海底国道トンネル」を取り上げている。

#### III. 設計・施工する人 ～理論・実験と経験の調和～

「見おろせば、十勝くにはらはてもなし、野火かあらぬか、煙たてるは、狩勝峠、カリカチ峠と名付けよう」の田辺朔郎に対して、広井勇の小樽築港北防波堤の100年耐久性試験のテストピースにも通じる吉田徳治郎著「コンクリートを造るこつ」、「See, think and try を繰り返すこと」に触れている。

#### IV. 造る人 ～一品料理としての思い出をつくる現場～

ラストスパイクから上川線開通で湧く旭川の町に対して、川田忠樹著「ブルクリン橋」で橋の産みの親ジョージ・ローブリング、潜函病をわずらうこととなった息子の建設技師長ワシントン・ローブリング、忠実な現地技術者への伝達者エミリー・ローブリング夫人に対する竣工式典での祝辞を紹介した。

#### V. 職人のころ ～自然との共生 工程のひとつひとつを大事にする心～

洪水による第2石狩橋梁現場での実習生の死に対して、幸田露伴著「五重塔」の風雨いとわず塔の周囲を幾度となく徘徊する、怪しの男、十兵衛の他、田辺朔郎が悼んでの殉職者慰霊碑と元国鉄マン40年間の供養をとりあげている。

## VI. 技術屋のころ ～技術錬磨の友情と酒、技術を伝える～

「田辺君、ようこそ」「広井君かい！」に対して、日本のもの造りの品質管理の権威、西堀栄三郎著「想造力」の自然と技術の視点からの技士道十五箇条を横軸にしているが世界工学団体連盟（WFEO）の「技術者のための環境倫理綱領」（1985）にも通じるものである。

## VII. 国づくりの気概 ～ダイナミックな夢を創る～

この「技術屋のころ」のまとめとしては『北海道浪漫鉄道』のあとがきに対して「リベラルな民主主義が敵対するイデオロギーを打ち破ってしまったからだ、だがそれ以上にリベラルな民主主義それ自体が既に“歴史の終わり”なのだと主張、それ以前の統治形態には抜本的な内部矛盾、崩壊せざるをえない欠陥や不合理があった。リベラルな民主主義は個人の自由と人民主権こそが教義である。…己の自由と平等の原則は歴史の荒波に絶え得るのではなく幾度も蘇る力があることを証明してきた。…自由主義社会におけるはげ口のなかで何よりも大切なのは企業家精神や他の形をとった経済活動である。企業家や産業資本家の行動は、現実に利己的な欲求の満足という問題としてはとらえにくい。資本主義は、ライバルに勝ちたいという企業努力における規律ある高尚な“優越願望”を現実に許しているだけでなく、それを積極的に求めているのである」フランシス・フクヤマ著「歴史の終わり」を横軸として締めとしている。

### 北海道飛躍へのシナリオ

今年の干支は辰（タツ）、正確には壬辰（ミズノエタツ）、辰巳は天井と景気の回復を信じつつも、還暦60年前の1952年（昭和27年）は戦後のサンフランシスコ講和条約、日米安保条約発効を経てGHQの活動停止により日本の主権回復、民主化・経済大国を目指した源初点であります。昨年の3.11東日本大震災の警鐘もあり、「この国のカタチ」の創生、もちろん国土の列島強靱化論は大事ですが、地域ブロックの活性化のため、参加・連携・協働の地域コミュニティの絆の深化の必要性を告げられた。明治維新の北海道開拓、戦後の北海道開発から新代の持続発展可能なグローバル化・成熟化市民社会の到来にむけて『北海道浪漫鉄道』の源初点の精神（ころ）を想い、新代の北の大地を切り拓かなければなりません。今までも前向きに「明日の日本を創る北海道」の北の夢プラン実現のため、先導的・先験的な北海道イニシアチブの担い手として汗をかいてきたわけですが、今は支え役でもある道産子の一人ひとりとしても、前向きに北海道人として、大志でも、気概でも、野心でも、何と訳そうとよし、「Be Ambitious」で大いに汗をかくぞ。変化・変革Changeには挑戦Challengeしかない、「Anything Possible」不可能はない。

終わりに、『北海道浪漫鉄道』に寄せて「土木技術屋の精神（ころ）」について、熱く話し合ったことを思い起し、田村喜子先生には、このうへは北の大地の風となって安らかに眠り下さい。（3435文字）

（北海道建設業信用保証株式会社取締役社長）

## 故田村喜子先生を偲んで

西村 泰弘

田村先生との出会いは、私が東北地方建設局青森工事事務所長時代に、月刊誌「道路」に全国の「道の駅めぐり」を連載するというので、平成9年に青森に来られた時からです。その前の北海道に勤務していたときにも、お会いしたことはありましたが、「北海道浪漫鉄道」の作者として知っていた程度でした。

この企画は、全国の道の駅を巡って、紀行文を連載するというものでしたが、道の駅を紹介するというよりも、その地域の歴史や人物、名所、産物など地域の素晴らしさを紹介するというものでした。この連載されたものは、後に「浪漫列島・道の駅めぐり」として刊行されていますが、全国の129箇所もの道の駅を巡られています。この取材のときに、各地の工事事務所長が田村先生のご案内役をすることになり、青森の紀行文のときは私が担当だったのです。後に、田村先生は「この仕事のお陰で、全国の事務所長さんを知ることができ、どこに行っても友達がいるのよ。」と楽しそうにお話しされていました。

当時、青森県内の弘前や七戸などの道の駅をご案内し、地域の多くの方々にお会いしていただきました。このときに、幕末に十和田市の三本木原台地の開拓に尽くし、「稻生川用水」を完成させた新渡戸稲造の祖父である南部藩の新渡戸伝（つとう）の功績を紹介したところ、非常に感激されていたことを覚えています。江戸時代の北東北の何も無い原野に、奥入瀬川の水を通す6 kmものトンネル工事を手掛け、新田開発をした人物に、田辺朔郎のような技術者魂を感じたのかもしれない。

その後、私は函館や札幌、旭川と転勤をしましたが、その度にお会いし、各地をご案内させていただきました。当時、先生は足が悪く、よく段差のあるところで、手を引いてあげていたものですから、「手を引いてあげますか。」と尋ねたところ、「西村さん、手を引いてではないでしょ。手を添えてでしょ。」といつも怒られていました。

また、先生をご案内しているときに「札幌にいる母を思い出します。」と言ったところ、「お母様はおいくつ？」と問われ、「76歳くらいかな。」と言ったところ、とても怒られました。当時先生は65歳くらいでしたから、「未だ私は若いわよ。」と言われ、慌てたことがありました。

函館勤務のときに、松前などをご案内し、鎌倉時代頃に道南地域が北海道では最初に和人が入ってきたところであることや、道南地域には北海道でも古いお寺などの史跡があることを紹介したところ、「800年くらいの歴史では古いとは言えないわよ。京都の歴史はもっと古いのよ。」「京都に来れば、素晴らしいものは沢山あるのよ。」と言われ、京都への思いの強さや誇りを感じました。京都の町をこよなく愛していたことと、近代京都の基礎を築いた田辺朔郎を「永遠の恋人」というのは嘘ではありませんでした。確かに、神社仏閣等の史跡なら京都の方が素晴らしいものが沢山あるので、歴史の浅い北海道では比較のしようがなく、引き下がるしかありませんでした。

一方、函館や小樽の街には、とても喜んで何度も来ていただいていたいました。それぞれの街には、北海道の中でも歴史を感じられる多くのものが保存されていて、それが地域の方々の財産であり自慢や誇りにもなっています。それぞれの街に、廣井勇先生が造られた函館漁港と小樽北防波堤があり、それをご覧になるのも楽しみにされていました。それから、それぞれの街で、地域づくりに活躍されている方々に会うこともとても楽しみにしていて、その度に、明治時代の土木技術の先駆者の熱意と真剣さ、そして功績をお話していただき、多くの人に元気と勇気を与えていただきました。土木関係者を元気づけただけではなく、全く土木を知らない方々、特に女性の方々に土木技術の素晴らしさを教えられ、田村先生ファンとともに土木技術者ファンをたくさんつくってくれました。

田村先生のお陰で、土木技術者の端くれですが、偉大な先駆者を知り、挑戦することと真剣に取り組むことの大切さを学ぶことができました。そして、改めて地域に眠る歴史や人物、物語を知る機会が増え、また多くの地域の方々との触れ合いも増え、感謝しております。今は天国で、「永遠の恋人」田辺朔郎先生や先駆者達とご一緒に、我々を見守っていることと思います。(1794文字)

(国土交通省北海道開発局札幌開発建設部長)

### ●コラム：田村喜子先生のペンの叫び

田村喜子先生は大変・徳の高い方です。

会う人は皆、不思議な力に魅せられファンになってしまいます。

田村喜子先生には敵はいません。皆、味方です。

世の風潮は、土木は悪、土木屋は悪の権現だと叩きます。

土木屋は「ああ言えば、こう言う。」という論は立ちません。

土木屋は打ち拉がれて、ただ耐えています。

縁の下で社会を支える土木屋の心粋を

田村喜子先生のペンは把えます。

田村喜子先生のペンは

世の人々に土木屋の心粋を知れと訴えています。

土木屋に“くじけるな”“敗けるな”と叱咤しています。

田村喜子先生のペンは

力強く、堂々と掠れることはありません。

確信に満ちた“ペンの叫び”それが田村喜子先生の“魂の叫び”です。

田村喜子先生の“魂の叫び”は波紋となって四方八方に広がっています。

## 不思議な縁

平野 令緒

先生との出会いは1996年、帯広勤務時代でした。あの北海道浪漫鉄道の作者の先生が来られるのでお前も来い、と宴席に連れて行かれたのがきっかけでした。道東へ鉄道で向かわれた方なら必ず通る狩勝峠、その眺望は「十勝」を一瞬にして理解できる雄大さで見ると圧倒します。切り替わった新線ですらそうですが旧線跡を国道38号線の展望台から見た眺望に、もう少し早く生まれていたら、と思ったものでした。その鉄道を切り開いた技術者の物語の作者、いろいろなお話をしているうちに先生のイントネーションに懐かしいものを感じました。(私)「ところで先生、ご出身はどちらですか。(標準語)」(先生)「京都です。」(私)「え、実は私も京都なんですよ。(関西弁)」(先生)「へえ、そうなん。」とここまでならよくある話。それから先生の京都に関する著作のお話になり、分かったのは先生が堀川高校で私の母の1学年下だったとのこと。母の事もよく覚えておられて「え、あんた息子かいな」と、北海道の帯広とは思えない夜の出来事でした。さらに酔っぱらうと携帯電話魔になる方が一緒におられて、その場で実家に電話することになり、母と先生は約半世紀ぶりに電話での再会を果たしたのでした。

土木とは自然由来の材料を用いてそれぞれの地域特有の方法で人間と自然のおつきあいの折り合いをつけることだと思います。さらにチームワークをもって長い時間かけて行う必要があります。そうすることによって構造物がその土地に存在することが当然であり必然になります。先生は先人たちの努力によって、そこにあるのが当たり前、安全が当たり前、快適性と安全性が空気のようにになっているがさらにそれを踏まえたうえで、それらが貴重な酸素のようであった時代を忘れてはならない、とおっしゃってます。先生の著作は未開の地北海道で鉄道や港を造った人たち、都が東京へ移されたあとの京都の近代化を推し進めた人たちなどの苦労を正確な記録をもとにしっかりと伝えてくれます。今、小樽を訪れる観光客のいったい何人が街を二分する論争の末、この運河があることを知っているでしょうか。

私の母は先生と出会った2年後に突然他界しました。自分という人間がどうやって育ててきたのか、どれだけの苦労や愛情をそそがれたのか、それまでは全く考えることもありませんでしたが、母の死と向き合ったときそのことを痛感しました。いま田村先生を偲び、自分が選んだ「土木」という仕事に関しても再度そのことを考えています。「あんたを育てるために、おと一ちゃんとおか一ちゃんがどんだけ苦労したか、わかってんのかいな！」と言われないうちにも。(1126文字)

(国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所長)

## ヤポンスキージュラウリ（丹頂鶴）

福沢 恵介

2001年ごろ、北海道・根室の風連湖で、直訳すると「日本の鶴」というタイトルで歌が出来上がった時のエピソードは今でも楽しい思い出として心に蘇ってくる。

根室の皆さんから「是非日ロ友好の歌を作ってほしい」と頼まれて、1992年・1999年とサハリンで北海道の代表としてコンサートをした私と、ロシア船が頻りに花咲港に立ち寄り町にはロシア語が飛び交っていた風景を目の当たりにした、田村先生との初めてのコラボの実現だった。

「カムイ伝説」を北海道で歌う歌手としてお付き合いが始まった1990年代から、東京へ行くといつも自宅にお邪魔させていただき、お酒を飲みながら私の大好きな歴史の話にお付き合いしていただいた。

「田辺朔朗が『北海道浪漫鉄道』の狩勝峠の工事をしてた頃、僕の爺様が落合駅の前で旭川の斉藤木材の帳場長として、支店を作ったんだ！」

「じゃ、お爺様は私の彼と会ったでしょうね」

「当然だよ、その後浦幌まで鉄道が伸びた時に、独立してのれん分けをして今に至る」

「じゃ恵介が十勝に生まれたのは彼のお陰ね・・・！」

作品もそんな雰囲気でも和気藹々と出来上がってきた。

「ハマナスが縁取る根室の岬、ペンキのはげたロシア船がやってきた」

「先生、ペンキのはげたはよくないですよ」、「だって、本当の姿だもん」。

「友好の歌ですから、相手が気分を害しちゃだめですよ」「それはそうだ」。

「ペンキをはげるのは、流氷にぶつかったからじゃないですかね」

「わかった、流氷に耐えた、でどう・・・？」。

秋田県田沢湖町で「生保内川（おぼないがわ）恋歌」の制作を依頼された時、取材を兼ねた仕事で先生とご一緒した。この時、私の作詞作曲だったが全面的に指導をお願いした。

生保内川の上流を歩き、透き通る清流を見つめ、民謡を聴き、田沢湖の湖畔でコーヒータイム。言葉少ない私に先生も気を使ってくれてそっとしてくれた。

私は田沢湖の向こうからこちらに一直線に向って来る一筋の光を見ていた。その光はおそらく誰も気づかない速度で湖を渡っていた。

この地域で春の訪れを告げる風として昔から大切にされている生保内川の東風（だし）を取り入れ、生保内川に「東風（かぜ）が通る道」、田沢湖に「光が通る道」と入れて完成した。後日、作品を先生に送ると、「光の道あなたも見てたのね、あれは『たつ子姫』が会いに来たのよ、最後に私達を包んでくれたね・・・！」二人にしか通じない会話が成立していた。「淋しい・・・！」私の心の叫びは今も続いている。（1059文字）

（シンガーソングライター）

●コラム:「ヤポンスキージュラウリア」の歌詞 田村喜子 作詞 福沢恵介 作曲

ハマナスが縁どる 根室の港

流水に耐えた ロシア船がやってきた

波止場で出会った コバルト色の君の瞳

ぼくが 映って 揺れていた

おぼえたばかりの ロシア語で

“風連湖のほとりで 丹頂が卵 抱いているよ”

ナ ベレグ オゼラ フーレン ヤポンスキー

ジュラウリ シジトナ ヤイツェ

霧につつまれた 納沙布岬

冷たい波しぶき 岩場に散らす

無人灯台から 霧笛にのせ 呼びかける

あの海の彼方 貝殻色の島へ

僕の叫びを 届けたい

“風連湖のほとりで 丹頂のヒナが かえったよ”

ナ ベレグ オゼラ フーレン イズ ヤイツァ

ウィルプルシャ プツェネツ ヤポンスコー ジュラウリヤ

海がへだてる 君住む島へ

僕の 叫びが 届かない

“風連湖のほとりから 丹頂の親子が巣立ったよ”

ズ ベレガ オゼラ フーレン ヤポンスキー

ジュラウリ ソ スオイム プチェンツォム

パキヌリ グネズド

ナ ベレグ オゼラ フーレン ナ ベレグ

オゼラ フーレン

ヤポンスキー ジュラウリ シジトナ ヤイツェ

“風連湖のほとりから 丹頂の親子が巣立ったよ”

ヤポンスキージュラウリア

作詞 田村喜子

作曲 福沢恵介

歌 福沢恵介

根室半島の豊かな自然環境を  
詩った新曲

「ヤポンスキージュラウリア」が  
このほど完成しました。

詩には、ロシア語が飛び交う

「国際交流都市・根室」の  
姿を映し出し

その一方で海霧に巻かれた

思いの北方領土の島々への願いが  
叫ばれています。

## 「ヤポンスキージュラウリア」発表会

と き : 2002年2月9日(土)19:00~

と ころ : 道の駅「スワン44ねむろ」

主 催 : 「ヤポンスキージュラウリア」発表会開催実行委員会

●コラム：「生保内川恋歌」の歌詞 福沢恵介 作詞・作曲

1. 逢いたいと 突然 便りが届く そこは みなも水面に 浮かぶ 杉林  
青空もない 都会の暮らし あなたと別れて みとせ三年の春  
未練はないと 強がってみても 面影求めて こまちに飛び乗る  
長いトンネル 通り抜けたら なぜか涙が 頬をつたう  
透き通る心 激しい思いは 岩をも砕き あなたを愛した  
瀬音やさしい おぼ生保ない内川よ かぜ東風が通る道  
川のせせらぎに 癒されて ふるさとに癒されて 風になる

風の模様で 分かれていても 末にやまとまる ノオ糸柳（生保内節より）

2. 駒ヶ岳 乳頭 たず尋ねゆけば 湯煙に浮かぶ あなたの姿  
あの日とおなじ 夜空を見つめ 流れ星ひとつ ゆれて流れた  
ぶなの林が 水を貯え 優しく海に 帰すように  
ふりそそぐ雨を この手に受けとめ そだてた愛を 待てばよかった  
穏やかな心で 厳しい季節を 耐えて花咲く コマクサのように  
深い思い伝える 田沢湖よ 光が通る道  
波に ゆられて 癒されて ふるさとに癒されて 水になる

わしとお前は 田沢のかた湯よ 深さ知れない ノオ御座の石（生保内節より）

（田村喜子先生、作詞支援協力）



## チークダンス

藤兼 雅和

私が田村先生にお会いしたのは、平成15年、国交省水資源部水資源政策課である委員会の委員をお願いすることになり、その事前のレクを行うため先生の当時広尾にあったご自宅を訪問したのが始まりである。普通、委員会の事前レクは緊張と重圧を抱えて行うものだ。先生のご自宅には大体午後4時頃に何人かでお伺いする。業務が終わると自然とアフターファイブとなるので、その後必ずといっていいほど、ざっくばらんな意見交換、要するに宴席が開始されるのであった。それがとても楽しく勉強になった。当時の業務は結構ストレスのかかる仕事であったが、先生とのアフターファイブは私にとって心の安らぐひとときであった。

先生が田辺朔朗を自分の恋人のように語るのを聞いていて、てっきり先生は生涯独身だと思っていたら、御子息がおられて、その宴席に彼の会社で取り扱いしているオーガニックワインを何度も提供いただいた。そこで、私も先生のレクの際は、チーズセット等ワインに合う食材を購入してお持ちしたりした。なにかの拍子に先生とチークダンスを踊ることになったのを今でも思い出す。先生はかなりのグラマーなのであった。

先生は、仕事の時間は厳しい御指摘を何度もいただいたが、基本的に土木技術者に対し敬意を払っておられ、我々を「頑張れ！」と激励してくださったと思う。それが、如実に表れているのが、以下の著作からもうかがえるので、抜粋させていただく。(土木のころより)

○ある技術者はいった「この道はぼくがつくったのです。ワン・オブ・ゼムです。」土木とは大勢の人間が心と力を一つにして取り組むものだという事を私は教えられた。また、別の技術者はいった。「土木屋は岩着にかかっているときに、いちばん燃えます」人目には触れない基礎づくりこそ、土木の本質であることに私は感銘を受けた。

○「日本の国土で人間が住む土に落とされた土木技術者の汗を、私は尊いと思うのである。」公共事業に対して逆風がつよい昨今、過去の土木事業の栄光を振り返るたび、いいなあ、うらやましいなあ、と短絡的に思うが、先生の著作をよく読むと、当時も、地元の反対運動や財政上の課題（今よりはるかに財政的には厳しかったかもしれない、今は国の借金が多いというが、殆どが日本国民から借りている借金である、しかし外債で賄わなければならなかった時代もあり担当者の重圧は相当なものであったろう）、決して順風満帆な時代ではなかったことがわかる。しかし、琵琶湖疏水は、「京都インクライン物語」によれば、これを実現できたのは、田辺朔朗という優秀な若手土木技術者の献身的な努力と、当時の京都府知事である北垣知事とのコンビがよかったのではないかと感じた。

田村先生は、今でも私たちに叱咤激励、応援してくれている、と思う。それを決して忘れず、浮世に安易に流されることなく、しっかりと地に足のついた仕事を続けていくことが、先生のご冥福をお祈りすることにつながるだろう。(1245文字)

(愛知県建設部建設河川課主幹)

## 土木技術者の永遠の恋人 田村喜子先生の見事な人生

藤本 貴也

2012年5月30日に再版された真新しい『京都インクライン物語』（中公文庫版）を改めて読み終えた。膨大な資料を読み込み、現地を丹念に調査し、その上で田辺朔郎の浪漫を田村流に創造して書き上げた名作であるとの印象を新たにし、田村先生が偉大なノンフィクション作家であったことを再認識させられた。3月30日の葬儀の際、中村英夫先生から「この本を読むことは、下手な土木の講義を何回も聞くより遥かに勉強になる。残念ながら今絶版になっているが、復刻できないだろうか。」とのご示唆もあり、趣旨に賛同いただいた多くの方々のご協力により再版させていただいた。田村先生を亡くした直後に読んだせいか、あの華奢な田村先生が彼女の永遠の恋人田辺朔郎と共に、朝暗いうちに京都の宿を出て早朝の比叡山の頂上まで登り、二人仲良く『朝日を受けて、小波が魚の群れの銀鱗のように輝く』琵琶湖を眺め、疏水建設についての決意を共有しているような錯覚に陥り胸が熱くなった。

平成7年頃から、第11次道路整備五箇年計画（平成5年～9年）に代わる新しい五箇年計画を策定するために道路審議会の諸先生とさまざまな議論を始めた際、田村先生も委員の一人として参画されていた。私は事務局としてご意見をいただくために、様々な資料を作成し説明する役割。行儀の悪い私の癖は、会議中に夢中になると靴を脱ぎ椅子の上で胡坐を組むこと。立派なホテルでの会議であれば、机から白いクロスが垂れ下がり反対側からは足元は見えないが、そんな気の利いたものはない役所の部屋での会議。私の真向かいに座っておられた田村先生が、審議会終了後「藤本さん、お行儀の悪い足が丸見えだったわよ」と一言。これが私と先生の初めての出会い。その時の先生の言葉のニュアンス、顔つきがいかにも優しげで、それ以来田村喜子ファンの一人になった。その後も、田村先生とお酒が弾んだ時などに出会いの頃の話になると、楽しそうに胡坐の話をされるのが今となっては懐かしい。

平成12年から道路局国道課に勤務することになった。当時、国道課では比較的評判の良かった「道の駅」も所管していたが、首長さんの一部には運営のことをあまり考えず、ハコモノを作ることを目的にする傾向が見えはじめていたことから、「道の駅」の再構築を考えることにした。その頃「道の駅」めぐりをするマニアの方も大勢いたが、田村先生は駅長や職員をはじめお客様の声やお店の様子を一つ一つ丹念に取材されて雑誌「道路」に連載されるなど、全国の「道の駅」の現状に特に造詣が深かったことから、当時住んでおられたインペリアル広尾501号室に国道課の職員と一緒によくお伺いし、様々な話を聞かせていただいた。最初の頃こそ、大先輩とはいえ女性一人住まいのマンションに若い(?)男どもが大勢夜遅くまで飲み明かすのは非礼ではないかとの思いもあったが、無類の人好きであり、多くの若者が弟の如く息子の如く、入れ代わり立ち代わり談論風発していることを知ってからは、遠慮せずに腰を落ち着け時間の過ぎるのを忘れることが通例になった。

たまたま、誕生月が私と同じ10月ということもあり、先生に心酔しているM社長とその秘書のA女史（ある時期からは田村先生の秘書といっても良いくらい、彼女は献身的に田村先生のお世話をされていた）と一緒に4人で毎年誕生会をするようになったのもこの頃から。田村先生の純粹、純情で、人間好きな性格もあいまって、いつの頃からか、作家の大先生というよりは年上の可愛いお姉さんという雰囲気、ついついハメを外し深夜まで飲み歩いた。その後私が近畿地方整備局に転勤した際には、妻と二人で大阪城の天守閣や公園内の梅林を案内させていただいたり、4月の桜の時期には、田村先生と妻の二人で私の故郷の吉野を訪れていただいたり、まさしく家族ぐるみで田村先生とのお付き合いを楽しませていただいた。そんな縁もあって、2009年10月25日M社長が中心になって企画された喜寿のお祝いに際しても、諸先輩がおられる中を発起人の大役をおおせつかり、多くの田村ファンに囲まれた幸せそうな田村先生の姿を見ることができたのは忘れられない思い出である。

発病されたあとも時折夕食を一緒にさせていただいた。さすがに夜遅くまで飲み歩くことは遠慮するようにしたが、相変わらずお元気なまま年を越した。今年に入った2月のある日先生から電話があり、普段と変わらぬ明るい声で「Xデーが決まったわよ」とのお話。担当の医師から、3月13日が「Xデー」だと告げられたとのこと。いずれその日がくることは覚悟していたとはいうものの、そんなに切迫していようとはその頃の元気な先生の姿からはとても信じられないというのが実感であったが、先生は終始自分の運命を自然に受け止め、淡々とされていた。Xデーの直近になると、徐々に体力も低下され時折意識も混濁することがあるとのことであったが、3月12日広尾日赤病院にお見舞いに伺った折は意識もしっかりされており、帰り際には堅い抱擁までさせていただいた。その帰路、2月初め中村英夫先生を田村先生の自宅マンションに御案内した際に伺った『私は浪漫を持った大勢の立派な土木屋の皆さんに囲まれて本当に幸せな人生だったわ』との言葉を思い出し、土木技術者の永遠の恋人田村喜子先生の見事な人生の幕引きを、心から祝福する気持ちで迎えらるような気がした。

（一般社団法人建設コンサルタンツ協会 副会長）

### ●コラム：「京そだち」瀬戸内晴美氏評より

京友禅の伝統を守りぬいた室町の男を支える、芯の強い京女の生涯と心の成長をみごとに描き切った。夫よりも家業を、愛よりも誇りを選びとる京女の優しさと、強さと、美しさと、哀しみを描いてあますところがない。物語は、祇園祭の華やかな描写と、祭囃子の鉦の音を背景と伴奏に絵巻物のように繰りひろげられていく。



## こころの教え

真砂 徳子

田村先生に初めてお目にかかったのは8年前。ご講演（演題「土木のこころ」）で札幌にいらした先生の取材に伺った事がきっかけでした。ご講演では、まるで空気のように当たり前の存在になっている道路や橋、鉄道などは、日本の豊かな未来を標榜した土木技術者達の技術と大志の賜物であると説く先生。一見無機質な土木構造物に込められている”情熱”を思い知るお話に、聴講していた多くの土木屋さんが目をうるませていました。

「公共事業は無駄遣い」との非難も頻繁に耳にし始めた頃。田村先生の土木に対する深い理解と視点が、聴講者の”土木のこころ”を喚起する様を目の当たりにした私は、当時、社会資本整備をテーマに広く地域づくりへの関心を促すテレビ番組のキャスターを担ったばかり。土木の真価を伝える先生のお言葉ひとつひとつが、駆け出しの私が進むべき道を照らしてくださる灯のように、あたたかく強く響いたと記憶しています。“土木の応援団”と呼ばれる田村先生の真摯な姿勢と励ましに、土木屋さんではない私も、大いに背中を押されたのでした。

先生は、ご自身同様、私が女性で土木分野の取材に携わっていると知り、親しみを感じてくださったようで、以来、プライベートでも頻繁にお声がけいただきました。時にはおどけて、懇意の方々に「私の娘よ」と紹介くださり、嬉しくて舞い上がる私。東京のご自宅でホームパーティーがあると聞けば、北海道からエプロン持参で馳せ参じ、先生お得意のうどんすきづくりを娘気取りでお手伝いするはしゃぎよう・・・ご厚意に甘えてばかりだったあの頃の振る舞いを思い出すたびに、お恥ずかしく恐れ多いのですが、今となれば、先生の人となりを感じ得難いひとときであったと振り返ります。

先生の周囲にはいつも笑顔が溢れていました。私がマイクを向けた時には、あれほど強面で無口だったあの方が、田村先生の前では、こんなに楽しそうに笑われるんだと感激したことも少なくありません。

橋梁工事の現場に赴いて気の遠くなるような高所を体感したり、高度で複雑な運転操作を要する除雪作業をより深く理解したいと除雪作業車に乗車した事もあったという田村先生。先生の取材を受けたある土木技術者の方は、常に現場主義で土木の意義と土木屋さんの真意を汲もうとする先生の文章には言外が表現されていて驚嘆するのだと話していました。

昨秋、ご自宅で療養中の先生を訪ねた時、「大事なのは人間を伝えること」とおっしゃった田村先生。私の目の前に、またポツと灯がともった一言でした。

その5ヶ月後、先生は天国へ旅立たれました。

こころを伝え続け、与え続けてくださった田村先生。本当に有り難うございました。(1130文字)

(フリーキャスター)

## 田村喜子先生を偲んで

三浦 裕二

田村先生と私の交流は土木学会の広報委員会に始まる。初代委員長の高橋裕先生、広報室長の河村忠男さんの仲立ちによる縁である。折に触れ、先生が「田邊朔郎は私の恋人」と宣言するのは、広く社会を根底で支え浪漫に満ちた土木技術者への敬愛からであったろう。80年代土木界への風当たりが厳しくなり、土木学会の改名論までが議論された頃である。私にはそうした風潮に警鐘を鳴らされているように聞こえたもので、「土木の日」創設に向けた委員会活動の励みとなったのは、先生のこの恋人宣言であった。

1994年3月幕張で「房総水の回廊構想」（土木学会誌92年7月号で紹介）のシンポジウムを開催した折、高橋先生に基調講演、田村先生に記念講演をお願いした（共に「運河再興の計画－房総水の回廊構想」（彰国社）に搭載）。京都に疎水は欠かせない。先生も疎水の水で産湯を使い、半世紀たって疎水建設の物語を書くことになったとき、それまでこの疎水の歴史を一切知らず、また知ろうともしなかったことを、居たたまれないほど恥ずかしく思った、と話された。その羞恥心が名作『京都インクライン物語』を生む原動力となったのだろう。書き進める過程で先生は朔朗に惚れ込み、恋に落ちていったに違いない。

ある日一献傾けた会合で先生が佐渡には行ったことがないと聞き、2003年7月の良き日を選び佐渡の旅にご一緒した。佐渡金山、長谷寺、妙宣寺、順徳上皇真野御陵そしていくつかの能舞台を見て回り、宿根木の古民家を訪ね、小木で屋内に鎮座する北前船を見て、海に出られない舟、その船を建造した船大工は気の毒だとの感想を漏らされた。職人と職人の技に温かい目を向けられるのは、先生のふるさと京都の風土が育んだに違いない。

東電の藤井敏夫さんの後を継ぎ、3代目の広報委員長を務めたとき、委員に招聘した阿部洋一さん（当時国際空港公団）とご自宅に招かれワインをご馳走になったことがある。いい男で機知に富み文学的素養のある阿部さんと意気投合したのだろう、その後しばしば盃を重ねていたようで、先生の消息は阿部さんから伝えられていた。逝去された時も「今しがた亡くなられた」と阿部さんから知らされた。懇親会での会合を除けば、私と先生との酒宴は数少ない。しかしその中でお伺いするお話はまさに「一壺酒、数巻書」で大切なものであった。

先生の著作に「土木のこころ」がある。副題は～夢追いびとたちの系譜～である。朔朗を筆頭に現存の人を含め17人の達人が紹介されている。誰もが“いい男”である。気骨ある風貌をもち、惹き付けてやまない味な男たちである。”先生は面食いだったに違いない”とは阿部さんの弁。「私もそのメガネにかなったのかな」と淡い期待をもったりもする。先生と一献酌み交わして確かめたいところだが、それもかなわぬ夢となってしまった。ご冥福を祈ります。合掌。（1207文字）

（日本大学名誉教授）

# 果てしなく美しい日本を造る

村橋 正武

田村喜子さんのお姿を拝見し、元気溢れるお声を聞くことができなくなって誠に寂しい思いをしているのは小生一人だけではないと思います。常に周りの人々や社会を元気づけ励まし前向きな姿勢で物事に取り組むように仕向けられたことにいつも大変感謝しました。ご自身のことを中心に行動されるのではなく、周りの社会や人々、さらには地域、都市、日本の行く末をおもんばかった広い視点、視野に立って行動されたことが特筆されます。このような人は小生の周りにはなかなかおりません。それだけに意を同じくし、意を強くする人々が田村さんの周りに集まり、田村さんを囲んで今の社会や日本のことだけでなく、これからの社会や日本のことについて、いつ果てるとも判らない談議に花を咲かせました。それであればこそ、土木や開発というテーマや世界を共通に意識して生きる人々（小生もそうですが）と、極めて強い結束が見られたと信じています。

現状に立ち留まらず、常に前を向き、一步でも力強く前進する姿勢で生活・活動された田村さんは、小生と同じ職種、業種に就く者にとって常に光り輝く導きの星でありました。田村さんと意を同じくして語り合うことの心地よさ、気持ちの清々しさは、他に例えることができません。それだけに常に田村さんを取り囲み、多数の人々（それも小生が見る限り一家言を持つ男性が多かった）が群れ集うことが多かったことは当然のことと思います。

わが国の行く末を見ますと、政治、経済、文化、社会のいずれをとっても、一段と混沌とした状態に突入しようとしています。今こそ、田村さんを中心に、今は無くなった祇園の一室で、日本の社会、経済、文化等について口角泡を飛ばして談じるとともに、その思いの一端を実現するための行動に立ち上るべきではないかと思いますが、誠に残念ながらその機会は到来しません。

あまり女性を対象に使われる言葉ではありませんが、田村さんこそ「憂国の士」に相応しい人物です。常に真剣に、京都の、日本の行く末について深い志と思いを持って語られる言葉とそのトーンを思い出します。そして、残された我々がその志の一端を実現することに自らの力を発揮してこそ、田村さんの思いを引き継ぐことができる資格があると言えましょう。小生自身、その資格があるとは言えませんが、今回を契機に自ら自覚して取り組んでいきたいと決意しました。

以上、田村さんへのお礼と感謝の気持ちを申し上げましたが、この思いは分野や視点は異なりますが、丁度読み終わったドナルド・キーンの著書「果てしなく美しい日本」の中で、キーンさんが日本及び日本人に寄せる思いが、まさに田村さんの気持ちそのものではないかと感じております。

どうか田村さん、天界から我々に対して、惰性に流されることなく「果てしなく美しい日本」を造ること専念するように励まして下さい。(1227文字)

(大阪工業大学工学部空間デザイン学科教授・立命館大学総合科学技術研究機構客員教授)

## 感謝

持山 銀次郎

田村喜子は、何故、私をここまで虜にさせたのだろう。その人間的な魅力は何なのだろう。出会いは十数年前、建設コンサルタント協会の賀詞交歓会でご挨拶させて頂いた時である。先生は当時、協会の理事をしておられた。

私の名刺を見ながら『銀次郎、良い名前だね』と例の独特のトーンで仰った。オウム返しに『名前だけではありませんよ』と、私。

先生は、参った、一本取られた、という顔をされた。あの笑顔で。

閉会后、出口でバツタリお会いしたとき、

「飲みに行くけど行かない？ 遠慮はいらないよ」

「ではお言葉に甘えて」

こんな会話を交したと記憶している。

本当に縁はいなもの味なものというが、今思えば縁を繋ぐ何色かの糸が先生と私の間にはあったのかも知れない。

お人柄は、ご自分では『銀ちゃん、私は京女のいけずなんだよ』と申されていた。基本的に人間が大好きな人であり、ゆえに人を大切にされた方だった。ざっくばらんで、明るくユーモアがあり、どこにおられても存在感のあるチャーミングな女性であった。そして純粹でストレートだが、さりげない気配りを常になさっており、その姿に感服することが多々あった。

そして、人に対する価値観は非常に明確であった。従ってその人の心を的確につかむ事が出来たのだと思われる。

そんな先生にとって私は一体何だったのだろうか。

お会いしても土木の話をする訳でもなく、ましてや仕事の話をする訳でもない。

「NPO 風土工学デザイン研究所の理事をやってくれる？」と先生。

うんともすんともない、それで、決まり。

ある夜のこと、いきなり先生から携帯に電話があった。

『銀ちゃんは私を裏切らないよね』

先生は、心を許し、弟のように思っていた人の物事に対する姿勢、考え方、行動に激怒された。と、同時に、相当落ち込まれたようであった。

先生は私に経緯を説明された。その後、何度かお会いして、解決に向けて話をした。

先生から『銀ちゃんはどう思う？』と聞かれた。

『先生のお考えは筋がとおっています。おっしゃるとおりにされるのも良。先生の寛大な心で、もう一度チャンスを与えられるのも良ではないですか？それを決めるのは、先生のお心です』と申し上げた。

最終的に先生の結論は、可愛い子には旅をさせよう、という事になった。

この件が解決するのに、何やかんやと半年近くかかった。

先生は人が好きなだけに大層悩まれた。

初七日の席でご次男の方が、今もご健在のご母堂様宛に、生前、先生が書かれた手紙を読まれた。

その手紙は『お母さん私は釋優心です.....』で始まった。

先生は、いつもご母堂様の事を気にしておられた。

様々な思い出を振り返る時、先生は本当に心優しい女性であった事を思い出す。

猛暑の琵琶第一疏水取水口を眺め、あらためて田村喜子という人に出会えた人生に感謝、感謝。

先生、どうぞ安らかに。

ありがとうございました。

また、お会いする日まで。

(株式会社協和コンサルタンツ 代表取締役社長)

●コラム：「カムイ伝説」の歌詞 田村喜子 作詞 原正美 作曲 森山良子 歌

カムイ岬に立っています  
いつも話してくれたあなたのふるさと  
見渡すかぎりの水平線と切り立つ岩に  
でも、あなたの姿は見えません  
暮れなずむまでわたしはひとり  
あなたとの思い出にひたります

風が髪を揺らせます  
ふいに運ばれてきたあなたのおい  
さがし求めるシャコタンの海と砕ける波を  
でも、あなたの姿は見えません  
指にすくった涙のしずく  
エゾユリの花びらに移します

カムイ岬の伝説はメノコの叫び  
でも、あなたの姿は見えません  
あなたの名前、声をかぎりに  
叫んでも返るのは波の音  
(繰り返し)



Lyrics by YOSHIKO TAMURA, Composed by MASAMI HARA, Arranged by MATARO, Executive Producer AKIHIDE IMAMURA, Producer by TAKEHITO SADAMURA (今村彰秀さんの名前が記されている。)

## 田村先生、ありがとうございました

森田 康志

ここ数年、田村先生は僕にとって一番近い存在だった。初めて田村先生と会ったのは、平成11年初冬の旭川。先生は、一番の親友であるハワイ在住のダンゴさん(本名不明)と、旭川に来た。当時直属の上司であった山本隆幸さんが、田村先生と大変懇意にしており、親友と北海道旅行を楽しむ際に旭川に立ち寄ったようだ。先生の話では、「康志君との最初の出会いは、石狩川をショートカットしたところで、コートも着ないでポケットに手を突っ込み、寒い、寒いと震えていた(入院中の先生からの今年2月11日のメール)」とのこと。その時の印象はどちらかと言えば薄くて、旭川で優佳良織工芸館に案内した際に、結構高価なユーカラ織りのバッグを購入したことぐらいしか覚えていない。

先生の家に入出入りするようになったのは、平成14年からの東京勤務の時。当時先生はフランス大使館の隣の広尾のマンションに住んでいた。官舎が南麻布にあり、自転車で坂道を降りれば3分とかからなかったため、毎週土日よく遊びに行った。一言で言えば、先生は「気配りの人」だった。気配りをしていることを人に感じさせないという点で、最高の気配りをしていたと思う。そのせいで、先生のところにいると大変居心地がよかった。たくさんの方が先生のところに来ていたが、みんな居心地がよかったのだろう。僕の場合、何か用事があって行くというわけではなく、ただ居心地がよかったから「お邪魔」していた。

その頃先生は歌舞伎座の株主優待券を毎月もらっていて、僕がエスコートするという大変な恩恵にあずかった。月に一度、歌舞伎を見て、休憩時間に先生の奢りで食事をして、先生の家に戻ってその日見た歌舞伎の話をする。今思うと贅沢な時間でしたね、先生。新しい歌舞伎座が出来上がったら、今度は僕が一度連れて行きます、という話を、先生は楽しみにしていたのにな。約束を果たせなくなってしまった。

広尾から仙台坂、三田と、先生が転居し、僕が札幌に異動した後も、東京に出張するたびにお邪魔して、ご飯を食べたり、荷物持ちとして近くのスーパーに行ったりしていた。僕にとっては、一緒にいて一番気が楽な人だった。一昨年、余部鉄橋物語を執筆中に体調を崩したが、ほぼ毎日メールや電話をしていた。携帯に残っている昨年12月16日の先生とのやりとり。先生「仕事完全終了宣言したのに、また執筆依頼が来ました。依頼者は高橋先生です。(以下略)」 僕「それが終わった頃に、原稿依頼出すかな」 先生「ばか、こんにゃろ。化けて出るぞ」 僕「ハッ、ハッ、ハ。望むところ。楽しみにしてます」 先生「化けて出て、ひねりつぶしてやるから」 化けて出てくるといいのに。先生がいなくなって僕の心にできた穴は、しばらく埋まりそうもないですよ。同じ気持ちの人が他に何人もいそうですね、先生。(1198文字)

(国土交通省北海道開発局)

## 成都と都江堰と田村喜子先生

山田 正

今年の5月に私は中国四川省成都市の東南を流れる沙河（サヘイ）の川べりに立っていた。と言っても一面の荒野ではなく、今は数100万の人口を擁する四川省の省都の一角である。川に沿っては竹林が見事なまでに管理された都市公園を成しており、川の外周は高級住宅街となっている。私が成都市を訪れたのは日本の文科省の事業の一つである日中韓高度職業人育成事業（今はCampusAsiaと名を変えた事業になっている）に私が所属する中央大学と私の研究室がそのうちの一枚として採択され、事業の説明に当地の四川大学を訪れたからである。本来の仕事が終わった後、飛行機に乗るには少し時間があつたので沙河を見ておこうと思い立って訪れることにしたのだ。

今から10年と少し前になる。成都市はスラム化したり人口増にどうにもならなく荒廃している市街部の一部や外周辺を再開発することにし、そのグランドデザインを国内の都市計画の設計会社だけでなく、広く世界に知恵を求め、国際コンペを行うことにした。私はその時（株）協和コンサルタンツの技師長となり、この国際コンペに応募したのである。それまで私自身は成都市を訪れたことは何回かあつたが、都市計画として見たものではなかつた。そのため協和コンサルタンツの社長や関係する同社の技術者ら総勢15名程度からなる視察団を構成した。その一行の中に田村喜子先生が入っておられたのである。田村先生とはその数年前に国土交通省の幹部であるS氏を通じて紹介をされ、「山ちゃん山ちゃん」と昔から親しい年の若い友達のように呼んで可愛がっていただいた。この本の読者ならご存知の南麻布にあつた先生のマンションで開かれるパーティーにたびたびお邪魔させていただいており、またそのご縁で中央大学においても明治以降の土木技術者の成し遂げた業績と人生に関して学生向けに講演をして頂いていた。さらに協和コンサルタンツの会長や社長は田村先生とは昵懇の関係であつた。そんな縁でこの成都視察団に私も田村先生と同行したのである。成都市は2000年以上の歴史を有し、三国志の劉備や諸葛孔明が活躍し、詩聖杜甫が数年を過ごした街である。我々が最終的に成都市に提出した都市再開発のコンセプトは、ディズニーランド的なキンキンピカピカの再開発デザインではなく、市内を流れる川の整備を中心とし、歴史と伝統を重んじつつ高雅な雰囲気をもとにした。それに先立ち田村先生と我々は朝早くホテルを立ち、市内のスラム化した地域から杜甫が住んでいたという今は公園となっているところまで夕方遅くまで歩き回つたものである。国際コンペに提出した上記の設計概念は、視察中の先生との何とは無い会話が発端となつて次第に私を含む視察団全員が共有するものとなつていった。その後同社が上記のコンセプトのもとにコンペに出した案が勝ち、その後の詳細設計も受け持つことが出来、今に見る素晴らしい川と公園と高級住宅街になつたわけである。

3、4日にわたる成都市の視察が一通り終わったあと、折角だからと成都市の北西70kmにある都江堰を見ることにした。都江堰は今から2300年前に李冰親子によって開かれた一大水

利施設であり、今では世界遺産に指定されている。私は東京を発つ前に司馬遼太郎さんの「街道をゆく」の中の四川・雲南を描いた文庫本を視察の参加者全員に配っておいた。私たちは都江堰につくとまず川中にある人工の中の島の先端立ってみた。そのとき先生は「司馬先生はあの山の上からこれを眺めておられたのね。山の上からこちらに向かって歩かれたのね。」といわれた。このとき私は先生と奇しくも地球の同じ地点にいる司馬遼太郎の動線や視線に至るまでの深い洞察力に作家としての凄みに感じ入ったものであった。

成都の最後の夜は大きなレストランでご当地名物の火鍋（ひなべ）を囲んで観劇をした。次から次と出てくる四川料理に一同は舌鼓を打ったものであるが火鍋だけはさすがに京女の先生の舌にはあまりにも辛すぎたようで、「こんなんようたべんは」と言われたその横顔はいじらしくもかわいい乙女の様であった。

今年の5月の沙河の川べりに立って、人の世の縁の不可思議さに今更ながら驚くとともに、8月末の東京にいて遠く離れた中国成都にも田村喜子の息吹のひとかけらが今も漂っているのを感じずにはいられない。

(1810 文字)

(中央大学都市環境学科教授)



### ●コラム：釋尼優心の眠る黒谷墓地

田村喜子先生の墓は京都東山にある黒谷墓地にあります。黒谷金戒光明寺墓地内の上田家墓所です。戒名は釋尼優心です。



## 田村喜子先生とティオペペ

吉崎 収

平成七年の秋頃、道路審議会の委員でいらっしやった田村先生に答申案の説明をすべく、同僚と二人、大泉学園のご自宅を訪ねたのが先生との本格的お付き合い(?)の始まりでした。「私の仕事は全部ここだけで済んじゃうのヨ」。リビングの大きな木製デスクをコツンと叩きながら、先生がそうおっしやったのを記憶しております。

説明を始めて十分ほど、先生がニコニコしながら「役所の言葉は正確なのかもしれないけど、難しくてよ一分からんわね」、「道路は大事なんだから、周りからあれこれ言われても、ちゃんと作りゃーいいんよ」と至極ごもつともで分かりやすいご指摘をいただき、続いて「よかったらビールでもどう?」と、突然の「説明時間終了」の宣告でした。「頂戴いたします」と我々二人が返事したときは、おそらく十八時(勤務時間)をいくぶん過ぎていたような気がいたします。

瞬く間に数本の空き缶が並び、その後「うちはね、ワインが売るほどあるのヨ」とのことと、件の木製デスクの上には数本のボトルが登場しましたが、そのうちの一本がティオペペでした。ワインに関する造詣皆無、味わい方も全く分からない自分でしたが、初めて体験したスペイン産のポピュラーなシェリーがいたく気に入り、「相当量」頂戴いたしました。その結果、「初めておじゃました先生のご自宅にて前後不覚の泥酔」という大不始末でしたが、心広き先生からは特段のお咎めもなく、その後も広尾や麻布など御転居の先々で、故郷の北海道関係者などが集う機会にはしばしば声をかけていただきました。その都度、「オサムちゃんはティオペペが好きだからねー」とボトルを用意しておいていただいたのは、大変有難く勿体ないことでありました。自身、五十歳を過ぎて「ファーストネームにチャン付け」という状況にはいささか閉口しましたが、私よりも数年先輩も同じように「チャン」で呼ばれているのをお聞きし、妙に納得したりもしました。

仕事の関係では、道路協会の機関誌「道路」の連載で、当時急速にその数を拡大していた「道の駅」の取材のため、全国を駆け巡っていただきました。「道の駅」そのものより、そこに働く人間に焦点が当てられ、また周辺の歴史や風土を丁寧にレポートしていただきました。取材や連載を通じて、励まされ勇気づけられた駅長さんや事務所長(国交省)が全国に多数いるはずです。改めて、先生には深く感謝申し上げます。

緩和ケアに入られた先生から「たまには飲みにいらいっしやいよ」と声をかけていただいた折には、差し入れ用の焼酎と自分用のティオペペを持参しました。先生が出して下さった高級チーズを嚙りながらチビチビやっていますと、「本当に、ティオペペが好きだったもんねー」と、いつかと同じようにニコニコと先生がおっしやいました。合掌。(1184文字)

(国土交通省九州地方整備局長)

### 〔Ⅲ〕 田村喜子先生の足跡

#### (1) 田村喜子・『心の風土記』未刊・目次

心の風土記 (1) 御所	風土工学だより第5号	平成14年9月
心の風土記 (2) 都大路	風土工学だより第6号	平成14年12月
心の風土記 (3) 赤レンガは原風景	風土工学だより第7号	平成15年3月
心の風土記 (4) 祇園祭	風土工学だより第8号	平成15年6月
心の風土記 (5) 疏水	風土工学だより第9号	平成15年12月
心の風土記 (6) 京おんなのいけず	風土工学だより第10号	平成16年1月
心の風土記 (7) 高女から高校へ	風土工学だより第11号	平成16年3月
心の風土記 (8) 六角さん	風土工学だより第12号	平成16年6月
心の風土記 (9) 雅のしずく	風土工学だより第13号	平成16年9月
心の風土記 (10) うなぞこのはた	風土工学だより第14号	平成16年12月
心の風土記 (11) 定子皇后陵	風土工学だより第15号	平成17年2月
心の風土記 (12) 竜安寺	風土工学だより第16号	平成17年5月
心の風土記 (13) 京都一華やぎの季節	風土工学だより第17号	平成17年8月
心の風土記 (14) 円山公園	風土工学だより第18号	平成17年9月
心の風土記 (15) チンチン電車	風土工学だより第19号	平成17年11月
心の風土記 (16) 京人形	風土工学だより第20号	平成18年2月
心の風土記 (17) 十三参り	風土工学だより第21号	平成18年5月
心の風土記 (18) 清水九兵衛さんのこと	風土工学だより第22号	平成18年9月
心の風土記 (19) 時代祭	風土工学だより第23号	平成18年12月
心の風土記 (20) 金閣寺	風土工学だより第24号	平成19年3月
心の風土記 (21) 黒谷さん	風土工学だより第25号	平成19年6月
心の風土記 (22) The nest of youth (若者たちの巣)	風土工学だより第26号	平成19年8月
心の風土記 (23) 大文字	風土工学だより第27号	平成19年10月
心の風土記 (24) 狩勝峠	風土工学だより第28号	平成19年12月
心の風土記 (25) 疏水下り	風土工学だより第29号	平成20年3月
心の風土記 (26) 大使館のお庭	風土工学だより第30号	平成20年6月
心の風土記 (27) 保津川をくだる	風土工学だより第31号	平成20年9月
心の風土記 (28) 迎春のきまりごと	風土工学だより第32号	平成21年2月
心の風土記 (29) ひなまつり	風土工学だより第33号	平成21年5月
心の風土記 (30) 船あそび	風土工学だより第34号	平成21年8月
心の風土記 (31) ふるさとは遠く	風土工学だより第35号	平成21年12月

田村先生が体調をくずされたので、お身体に負担とならないよう一休みすることとなり、その後、お元気になられたら(32)以降書いていただくことになっていた。そして、ある程度、まとまれば編集し直して出版することとなっていた。未完の形となってしまった。

## (2) 田村喜子先生語録

### **落穂拾い** 楠若葉の季節

昨日熊本へまいりまして、空港から市中へと、若葉の美しいクスの木に迎えられました。7～8年前になりましょうか、熊本城を見学したことがございます。そのとき、石垣に囲まれた砂利を踏みながら、ご案内くださいました文化財専門員がふと洩らされた“楠若葉の季節”ということば、匂うように美しく耳に届いたことを思い出しました。県の木でもありますクスが若葉に萌えるこの季節は、城下町熊本がもっとも輝く時期でしょうし、この季節にご当地を訪れることができましたことをしあわせに思います。

城下町は日本各地にございます。しかし400年を遡って、当時の為政者がいまなお敬われ、いたるところにその息吹が感じられる都市となると、その数は限られるでしょう。その意味で熊本は本物の城下町の佇まいを残していると思います。市民のみなさまは朝な夕な、お城を見上げるたびに、肥後人の誇りを胸に刻みつけていらっしゃることと拝察いたします。そしてそのことが、精神的風土を醸成しているのだと思えてなりません。

(第9回風土工学シンポジウム開会挨拶より)

### **落穂拾い** 失われた国家の品格を取り戻す

今回「風土工学10周年記念シンポジウムでは「美しい日本の国土の復権を！——“国土づくり”と“人づくり”——」をテーマに、文化勲章受章の沢田敏男先生（農業土木）、松尾稔先生（地盤工学）、中村英夫先生（国土計画・交通政策）、加藤尚武先生（倫理学）、青山俊樹先生（河川工学）にご講演いただきます。どなたも斯界の第1人者でいらっしゃいますと同時に、専門分野に限らず、幅広く文化、教養に富み、高い理念を掲げた日本のリーダーでございます。

いま、国家の品格が問われています。失われた国家の品格を取り戻すために、この国でなにが求められているか、日本人としての在りようなど、21世紀初頭に生き、後世に“美しい日本の国土”を伝えねばならない使命を持つ我々に対し、示唆に富んだご意見を賜わることができるかと確信しております。

(第10回風土工学シンポジウム挨拶より)

### **落穂拾い** 子々孫々に残す国土の姿

現代を生きるものにとって、「子々孫々に残す国土の姿」や「未来の地域を考える」ことは、非常に重要なことであり、また責任のあることです。

その意味で、今回、オピニオンリーダーの森田実先生の特別講演「日本の公共事業のあり方と国土づくりを考える」をはじめ、斯界の権威である森地茂先生、大石久和先生のご講演と、講師陣によるパネルディスカッションを拝聴し、ご指導を仰ぐことは時宜を得たことであり、どのような国土と風土を後世に残すことができるかを考える指針となることと確信しております。

国土建設の担い手として、本日ご参集のみなさまがたが、将来を見誤ることなく、豊かな心で子孫に残す国土づくりをしてくださいますことを期待申しあげます。

(第11回風土工学シンポジウム挨拶より)

**落穂拾い** 作り手の真心、そして作り手の素養

私の心の中に輝いている言葉があります。……その1つは「僕は恵まれない人たちに少しでも豊かな暮らしを与えたいと願って土木を選んだんです」とおっしゃいました。社会資本がきちんとできていないところに暮らすということは、もう我々にはとても生活しにくいことなんですできません。あまりにも整ってきましたから。社会資本を建設するについては、今世の中ではもういらないとか言われていますけれども、私はそれには同意いたしません。まだまだ恵まれていない地方や人びとの暮らしがあると思っていますが、どんな場合でも、社会資本を作るときに必要なのは人間、人間の手です。そして、人間の心です。その心の中に、土木の心が入っていれば、そこにできる社会資本は優れたものになるに違いないと思っています。作り手の真心、そして、作り手の素養、そういうものを磨いていただき、いいものを今後も作っていただきたいと思います。

(第11回風土工学シンポジウム挨拶より)

**落穂拾い** 誇れる国・日本

私は毎年風土工学シンポジウムを拝聴していますが、年を追うごとに風土工学の風土工学デザイン研究所が主催するシンポジウムは内容が濃くて素晴らしいものになっているなと思っています。皆様先生方のお話を伺っていて、何げなく思ったのですが、この時点での安倍前総理大臣が美しい国をつくるとおっしゃいましたが、美しいという感覚的なものではなくて、皆様方はもう考えながらお話を聞いていましたが、どんな言葉に代えたほうがいいかなと思って、ひょっとしたら美しい国よりも誇れる国日本になるのではないかと思いました。きょうは本当にふだんだったらなかなか聞けない先生方の素晴らしいご意見を伺うことができ、とても勉強になりました。皆様方も勉強になりましたね。

(第11回風土工学シンポジウム挨拶より)

**落穂拾い** 時空を越えて、思いを馳せる何かが

墓域に身を置くと、ご先祖さまへの熱い思いにひたるのが常だが、黒谷墓地にははるかな時空を越えて京都の歴史に思いを馳せる何かが漂っている。

(心の風土記 21 “黒谷さん”)

「落穂拾い」 段取りを組む力と我慢強さ

堀川高校の校歌のなかに“若き狩人”ということばが入っているが、狩人とは、米が作れるか、魚が獲れるか、狩ができるかだ。当然のことながら、若者にはまだ技術力が備わっていない。それを養うには教養と経験を積むこと、段取りを組む力を身につけること。そのなかで我慢強さと持続性、協調性が養われる。

(心の風土記 22 “The nest of youth”)

**落穂拾い** 失敗しながら成長すれば良い

“二兎を追え”。二兎とは、よく遊び、良く学ぶこと。勉強だけでなく、部活もがんばる、学校行事にも積極的に参加する。部活で養われた集中力が、勉強への集中力を高める。それらは振り返って、充実した高校時代を過ごした証しとなるだろう。失敗しながら成長すればいい。人間はままならないなかで成長するものだから。

(心の風土記 22 “The nest of youth”)

**落穂拾い** 常に積極的に、“しなやかに”

チャンスはみんなに訪れる。それを活かすも活かさないも全て自分の責任。やるからには常に積極的に取り組むこと。すべからく“しなやかさ”を身に付けるべし。

(心の風土記 22 “The nest of youth”)

**落穂拾い** 得体の知れない戸惑い

時代とともに大きく様変わりした身边（迎春のきまりごと一切を切り捨ててしまったことも含めて）に、得体の知れない戸惑いをおぼえずにはいられなかった。

(心の風土記 28 “迎春のきまりごと”)

**落穂拾い** 私はまぎれもなく戦中派

「道の駅めぐり」で大阪府の千早赤坂を訪れたことがある。楠正成の生誕地で、(社)千早赤坂楠公史跡保存会の会員であるほとんどの村民は、未だに600年以上も昔に活躍した“われらがヒーロー・楠公さん”を敬愛している。こういうひとたちの中に身をおいて、やけに居心地のよさをおぼえた私は、まぎれもなく戦中派なのだ。

(心の風土記 20 “金閣寺”)

**落穂拾い** 京おんなの誇り高い心意気

京都市の中心部で生を受けた“堀川高女の京小町”が身につけていたものが「いけず」の精神だった。京都でいう「いけず」は、単に意地悪という意味ではなく、生粋の京おんなの誇り高い心意気とでもいったものだ。

清少納言もいっている。「冬は、いみじう寒き。夏は、世に知らず暑き」と。いくら十二単に身を包んでも、しんしんと冷える京の底冷え、盆地特有の夏の暑さ。酷しい京都の気候のなかで暮らしながら、「ころは正月、三月、四月、五月、七、八、九月、十一、二月、すべて、をりにつけつつ、ひととせながら、をかし」1年中、みな趣がある、といい切れるのは、「いけず」でなくて何であろう。

京おんなの大先輩ともいべき清少納言の「いけず」の精神は、千年の歳月を経て脈々と受け継がれ、心の風土となっていたのである。

(心の風土記 6 “京おんなのいけず”)

**落穂拾い** 美しさを際立てる職人技

レンガの目地には復輪目地が施されていた。目地の中央がかまぼこ型に盛りあがり、レンガの表面と目地面が同じ高さになるよう工夫されたものである。レンガとの際だけ深くなっているの、レンガがはっきりと際立って見える。平目地より3倍の手間ひまがかか

るが、復輪目地はレンガ特有のやわらかい美しさを際立てる職人技だと、これは四谷見付橋拡張工事を見学したときに教えてもらった。

どの土地に行っても、赤レンガの古い建物を見ると、胸の奥に灯がともったような懐かしさをおぼえる。赤レンガは私にとって原風景なのである。

(心の風土記 3 “赤レンガは原風景”)

#### **落穂拾い** みやこびと意識

祇園祭は 869 年 (貞観 11) 疫病退治から始まった民衆の祭で、時代が下るにしたがって、鉾出しをする町内は当代の有名画家に鉾の天井や破風の絵を依頼し、見送りと呼ばれる鉾の後部の装飾にはペルシャ絨毯を用いるなど、豪華さを競った。日本三大祭のひとつ、千百数十年の歴史を持つ祇園祭こそ、みやこびと意識の強い京都人にとって、精神的風土の礎となっているのではないだろうか、私には思えてならない。

(心の風土記 4 “祇園祭”)

#### **落穂拾い** 郷愁が瞳に滴を宿らせた

何年ぶりのことだろう、この祇園祭に華やぐふるさとに身を置くのは——。ぞくぞくとしたふるえが背筋をつたい、胸奥に湧いた郷愁が瞳に滴を宿らせた。そしてこれが、八坂神社の氏子として育った私の“心の風土”なのだと、胸の深いところで噛み締めた。

(心の風土記 13 “京都一華やぎの季節”)

#### **落穂拾い** 私は竜馬のファンになっていた

父と一緒にいるときには、決まって 1 基の銅像の前で立ち止まった。

「これが坂本竜馬、こっちが中岡慎太郎」

と父はその都度説明した。いまから思うと父はこの 2 人の勤皇の志士のファンだったのだろう。2 人が何をした人物なのかわからないまま、竜馬と慎太郎の名前だけは私の脳裡に刻まれて消えることがなかった。そして気がつくと、私は父以上に竜馬のファンになっていたのだった。

(心の風土記 14 “円山公園”)

#### **落穂拾い** ふるさをいとおしく、誇らしく思えた

実際にこの風景を目に納めたのは 10 年以上も前のことなのに、いつでも鮮明に思い出すことができるのは、それが私にとっての心象の風景だからである。御所を思い浮かべるだけで、ことばでは言い尽くせないなにかが胸の内を占めるのだ。精神の風土とはこうした心象の風景から培われるものといっている。

こうしたことに気がついたのは、ふるさを離れて 20 年ばかりのちに、琵琶湖疏水建設の物語を書き、ふるさをアウトサイダーの目で眺めた結果だった。このとき、ふるさをいとおしく、誇らしく思えたのだった。

(心の風土記 (1))

### (3) 田村喜子先生の遺徳を偲ぶ伊呂波歌留多

土木をテーマとし、土木屋を主人公とする小説を書き続けた田村喜子先生が今年3月にご逝去された。土木の応援団長を自認され、土木を悪の権現の様に扱うマスコミが作る風潮で、落ち込んで元気がない土木屋を叱咤激励し続けた田村先生の死は土木業界にとって大きな悲しみであり、痛手である。どれだけの多くの土木屋が勇気付けられて、打ち拉がれることなく社会の礎作りに励んでこられたか、土木の業界に果たしたご功績は計り知れない。

ところで、田村喜子先生にはもう一つの大きな功績がある。誇りうる風土を作る実学として風土工学が10数年前に誕生し、その普及啓発を目的とする風土工学デザイン研究所を10数名の発起人とともに設立され、十数年その理事長として、研究所の発展に数々の功績を残された。この度、同研究所が田村先生の遺徳を偲ぶ特集号を発刊される。田村先生と御親交が厚かった方々からの寄稿文を読めば、田村喜子先生の土木を愛する広く、大きな心と、温かい人間味がほのぼのと伝わるものばかりで、目頭が思わず熱くなって参ります。またこの度、同研究所の所員一同で、遺徳を偲ぶ伊呂波歌留多が作られた。ご紹介したい。

(い)「インクライン 朔郎のロマンに 魅せられて」。(ろ)「ロマン満つ 海底(うなぞこ)の機(はた) 南伊豆」。(は)「花見には 治ってみせる 実現せず」。(に)「西・東風土探訪 カバン持ち」。(ほ)「北海道 田村ファミリー 人と人」。(へ)「平成の 土木に夢を 注いでくれた」(と)「土木屋の 応援団長 自認する」。(ち)「朝食は パンとコーヒー ハムエッグ」。(り)「流域の 悲願達成 物語」。(ぬ)「ぬかるみの 原野に鐵道夢開く」。(る)「留萌から 天売・焼尻 オロロン旅」。(を)「男意気 土木屋二十人 ロマン記す」。(わ)「忘れるな 田村先生の 徳と恩」。(か)「ガン治療 延命治療を絶ち 大往生」。(よ)「世の中は ワン・ノブ・ゼムが 支えてる」。(た)「第一回 土木学会 著作賞」。(れ)「礼文・利尻 宗谷海峡 北の旅」。(そ)「そこかしこ 遺徳が満る 風土研」。(つ)「つらいこと 先生一言 全て消え」。(ね)「願い込め ダルマに目入れ 年初め」。(な)「何人も 田村ファンに してみせる」。(ら)「乱調の 惨めな阪神に 優しい目」。(む)「室蘭港 イルカとともに 波の上」。(う)「運河の 保存か否かの 物語」。(ゐ)「居並ぶは 五色の鬼の 物語」。(の)「野を埋める ピンクの絨毯 芝さくら」。(お)「奥尻島 震災復興 目で確認」(く)「楠若葉 その地・その時 言葉・妙」。(や)「病抑え 出版期限に 間に合わず」。(ま)「前の戦 応仁の乱 京の人」。(け)「研究所 支え続けて十二年」。(ふ)「分水路 宮本武之輔の 物語」。(こ)「五条坂 陶芸の町の 今昔」。(え)「永遠の 恋人を追って 北海道」。(て)「鐵道屋 剛毅木訥 松太郎」。(あ)「餘部の トレスル橋 物語」。(さ)「さみしくない 多くの息子に 囲まれて」。(き)「共著作 鬼翔平の 物語」。(ゆ)「雪国と デザイン研の 揮毫あと」。(め)「メコンの夢 ザイールの虹 ODAの夢」。(み)「道の駅 その地・その地の 風土記す」。(し)「女性の 名誉



① インクライン  
朔郎のロマンに  
魅せられて

解説  
東京遷都で暗くなった京都の町を明るくしてくれたのは琵琶湖疏水である。京育らの田村先生が「京都インクライン物語」で田辺朔郎の土木技術者のロマンに魅せられた。

② ロマン満つ  
海底の機  
南伊豆

解説  
田村喜子先生の「海底の機(はた)」のニール号は、南伊豆の海底に沈んでいる。その船の引き揚げプロジェクトが進んでいた。作者としてはこれ以上のないロマン夢が広がる。

③ 花見には  
治ってみせる  
実現せず

解説  
平成二三年一月に二回目の手術の前に三月には退院できるから「皆んなで桜の花見しようね」と言ってくれていた。余命も何ヶ月もないと告げられた後も周りの者に心配しないように気丈で明るく振舞っておられた。

④ 西・東  
風土探訪  
カバン持ち

解説  
田村喜子先生は日本全国の風土の誇りを見つめる旅をなされた。同行された方に忘れられない思い出をつくってくださいました。同行された者に細やかな心づばりを忘れることはなかつた。

⑤ 北海道  
田村ファミリー  
人と人

解説  
田村ファミンは日本全国にいたる所にいる。その中で北海道には特に親交の厚いグループが出来た。「雪国食堂」に集まる人々で田村ファミリーが出来ていた。

⑥ 平成の  
土木に夢を  
注いでくれた

解説  
平成の世、マスコミは日本を支えてきた土木を悪の権現に仕立てあげて、土木屋はうらひしがれている。その土木屋に夢と元気を起こることに注いでくれた。

⑦ 土木屋の  
応援団長  
自認する

解説  
田村喜子先生がよく言われた言葉に「私は土木屋の応援団長よ」くじけないで頑張つてと叱咤激励してくれました。土木は悪のラベルをはられ、土木関係者は闇夜の中で太陽に出会った思いである。

⑧ 朝食は  
パンとコーヒ  
ハムエッグ

解説  
田村喜子先生は夜の宴会はステーキ等を好まれ、ホテルの朝食は洋食であった。田村喜子先生の活力源は洋食系であった。田村先生の前向きなエネルギーの根源だったのかも知れない。

⑨ 流域の  
悲願達成  
物語

解説  
「野洲川物語」は破壊の輪廻を繰り返す、天井川の宿命を背負う野洲川からの脱却をしたいという地域の人々の悲願達成への思いと美田喪失の苦悩との闘いの物語である。

⑩ ぬぬかるみの  
原野に鐵道  
夢開く

解説  
田村先生が講演で熱がこもる一場面が田辺朔郎が北海道のぬかるみの原野に野宿し蚊やヒルと闘いながら鐵道の路線測量をされた下りである。田辺朔郎の夢を追う姿に魅せられたのである。

⑪ 留萌から  
天売・焼尻  
オロロン旅

解説  
北海道には何度も訪れている田村喜子先生も北海道の辺境に行く機会は決して多くはなかった。天売・焼尻島を訪れた三泊四日のオロロンラインの旅は忘れられない旅になった。

⑫ を男意気  
土木屋二十人  
ロマン記す

解説  
田村喜子著「土木のこころ、夢追いびとの系譜」は田村喜子先生の目で見えた日本の土木技術者の二十人を選んでその人の土木にかけた情熱男のロマンを記したものである。

わ 忘れるな  
田村先生の  
徳と思

解説  
田村喜子先生が我々土木屋に残してくれた遺徳は余りにも広くて又、その恩は深い。我々土木屋は田村喜子先生の徳と思を決して忘れることはあつてはならない。

か ガン治療  
延命治療を絶ち  
大往生

解説  
ガンの転移を知り、延命治療をことわり、堂々たる人生の最後を迎えられた。ガンを告知され余命何ヶ月と告げられてからの長い闘病生活の間、囲りの者にはいつも明るく話されていた。

よ 世の中は  
ONE OF THEM  
ワン・オブ・ゼムが  
支えてる

解説  
田村先生は、建築家はこれに自分の設計だというのに対し、土木家は一切言わない。土木家は「ワンオブゼム」という。この土木屋の態度姿勢精神が好きなのである。

た 第一回  
土木学会  
著作賞

解説  
田村喜子先生が土木屋の世界に入られた端緒が「京都インクライン物語」が第一回土木学会著作賞を受賞したことである。著作賞は田村喜子先生のために創設されたのかも知れない？

れ 礼文・利尻  
宗谷海峡  
北の旅

解説  
利尻・礼文と宗谷岬、北海道の北の端での三泊四日の旅も忘れぬ旅となった。礼文では高山植物のお花畑が、海近くで見られる。利尻では鳥取の麒麟獅子舞が伝えられていた。感激した。

そ そこかしこ  
遺徳が満る  
風土研

解説  
現在の風土工学デザイン研究所には田村喜子理事長の遺徳が多く残されている。そのシンボルが入口にかかげられた田村喜子先生の揮毫になる看板がある。

つ つらいこと  
先生一言  
全て消え

解説  
先生に悩みごとを聞いていただいて「一言」言葉をいただくと思ひごとが全て消えるようであった。先生の口から一度たりとも苦しいとかつらいとかいうような言葉は聞いたことがない。

ね 願い込め  
ダルマに目入れ  
年初め

解説  
風土工学デザイン研究所の一年は年始における田村喜子先生と共にダルマの目入れの儀式から始まる。桜の季節には花見一杯。夏は暑気払い一杯。忘年会では御苦労さん一杯。

な 何人も  
田村ファンに  
してみせる

解説  
田村喜子先生は会う方、全てに徳を与え、田村ファンになってしまふ。田村喜子先生の接人の極意は、人に媚びることではない。人には自然態で接せられる。

ら 乱調の  
惨めな阪神に  
優しい目

解説  
田村先生は京育らて阪神ファンである。阪神は惨めな敗け方をする時が多い。惨めな阪神にいつも優しい目で見えておられた。松山選手の大ファンであった。北海道に松山地方がある。

む 室蘭港  
イルカとともに  
波の上

解説  
平成二十年八月、室蘭開建のおはからいで室蘭港を船の上から見学する機会をつくってくれた。船の周りにはイルカが泳ぎ、まるでイルカの目から港を見た感じであった。

う 運河の  
保存か否かの  
物語

解説  
「小樽運河ものがたり」は運河の保存か否かをテーマとした物語である。小樽は港町である。運河の町である。小樽の運河を活用した町づくりにかけた人々の思いを伝えたかった。

ろ 居並ぶは  
五色の鬼の  
物語

解説  
「鬼翔平物語」は五行思想がベースにあり、木火土金水の五色の鬼の大地創成物語である。鬼すむ誇りその瀬音 久遠の賛歌この大地 燃えたついのちここ北上・鬼と平和の里。

の 野を埋める  
ピンクの絨毯  
芝さくら

解説  
田村先生は花のシーズンが大好きだった。北海道の滝上公園の芝桜のピンクのジュエタンを見たいと言われ、その季節に行くことが出来た。本当にうれしそうであった。

お 奥尻島  
震災復興  
目で確認

解説  
奥尻島の死者・不明者230人を出した震災・大津波からいかに復興に向ったか自分の目で確認したかった。奥尻島の災害には心を痛めておられた。

く 楠若葉  
その地・その時  
言葉・妙

解説  
熊本で開催された「風土工学シンポジウム」に出席された折、この時折、熊本にピッタリという言葉は「楠若葉」と表現された。言葉の妙に感動した。

や 病抑え  
出版期限に  
間に合わず

解説  
余部鉄橋の改築工事の竣工式に「余部鉄橋物語」の出版を間に合わせたいの思いつきから、体調の変調のきどしがあったが相当無理されたようである。

ま 前の戦  
応仁の乱  
京の人

解説  
田村先生がよく言われた言葉に、京都の人は「前の戦と言えば応仁の乱のことを言うのよ」と言っておられた。京の都が戦乱で焼野原となったのは十五世紀の応仁の乱である。

け 研究所  
支え続けて  
十二年

解説  
風土工学デザイン研究所の本当に何もなげ口からの出発から今日に至るまで十二年間理事長として指導してくださり組織の骨格を構築して下さいました。

ふ 分水路  
宮本武之輔の  
物語

解説  
明治期、日本の土木の雄は「宮本武之輔」である。「物語分水路・信濃川に挑んだ人々」の主役である。宮本武之輔は土木は「将の持たる実学である」と位置付けられた。

こ 五条坂  
陶芸の町の  
今昔

解説  
土木屋をテーマとする直前の作品が「五条坂陶芸のまら今昔」である。京都の街をテーマとした「むらまら」「京そだら」「京都フランス物語」等の作がある。

え 永遠の  
恋人を追って  
北海道

解説  
田辺朝郎は永遠の恋人となり、田辺朝郎を追って北海道の鉄道敷設に向かう。

て 鐵道屋  
剛毅木訥  
松太郎

解説  
「北海道浪漫鐵道」に続く鐵道シリーズは藤井松太郎の剛毅木訥の生きざまであった。「剛毅木訥鐵道技師・藤井松太郎の生涯」

あ 餘部の  
トレススル橋  
物語

解説  
田村喜子先生の最後の作品は「余部鉄橋物語」である。時代を越え、日本海の風雲に耐え天空に架かるトレススル鉄橋は生き抜いてきた。新橋開通とともに長き使命を終える旧橋の百年を描く。

⑤ さみしくない  
多くの息子に  
囲まれて

解説  
田村喜子先生は日頃より、自分の周りには素晴らしい土木屋が居る。まるで多くの息子と共に生きているようにだとおっしゃっておられた。

⑥ み道の駅  
その地、その地の  
風土記す

解説  
田村先生の全国の旅は数限りなく多くあるが、全国の道の駅巡りの旅は最っども忘れられない旅となった。「浪漫列島「道の駅」めぐり」である。

⑦ も物書きの  
端緒となった  
小学生

解説  
田村先生が文章が好きになった端緒は小学校の時国語の有岡先生から作文をほめられたことがきっかけとなった。

⑧ き共著作  
鬼翔平の  
物語

解説  
小説家田村喜子として異例の唯一の共著作品が「絵本・鬼翔平物語」である。北上市の創作民話公募において、プロ・アマ問わず応募119点の中から最優秀賞を受賞した。

⑨ し女性の  
名誉会員  
第2号

解説  
田村喜子先生は曾野綾子さんに次いで二人目の土木学会の名誉会員である。田村先生は土木屋と一緒にいる時間が一番楽しそうであった。

⑩ せ世界初  
海底トンネル  
挑む人

解説  
関門トンネルは世界初の海底トンネルである。克服しなければならぬ技術が山ほどある。それに挑んだ鐵道マンの物語が「関門とんねる物語」である。

⑪ ゆ雪国と  
デザイン研の  
揮毫あと

解説  
札幌にある「雪国食堂」と神田にある風土工学デザイン研究所の二つの看板は田村喜子の揮毫によるものである。神田の看板には二ヶ所本人が気にしているところがある。

⑫ ゑ絵のような  
主義一貫  
迷いなし

解説  
田村喜子先生の主義主張は一貫して決まっていたことはなかった。「野洲川物語」の出版記念会である方が主人公は別の人にすべきであったとくつてかかった。これは私の考えです。とさっぱり一言であった。

⑬ す推敲を重ね  
『カムイ伝説』の  
歌詞生まれ

解説  
「カムイ伝説」の歌詞を仕上げる時、何度も何度も「口づさみ」推敲に推敲を重ねられた。積丹半島のトンネル崩落事故の慰霊で訪れ、義経伝説や積丹の風景に感動を受け作詞された。

⑭ めメコンの夢  
ザイールの虹  
ODAの夢

解説  
ザイールにおけるマタデイ橋、とメコン川に建設されたナムグムダム建設に携わった技術者の心算を書き残したのが「ザイールの虹・メコンの夢・国際協力の先駆者たち」である。

⑮ ひ日頃より  
困った時の  
かけこみ処

解説  
風土研の所員は何かつらいことがあれば、都内の田村邸にかけ込んでいた。かけ込み寺のようであった。田村先生に聞いてもらっただけで悩みが消えていくようである。

⑯ 田村 田村先生  
夢を与えてくれて  
有り難う

解説  
田村喜子先生、本当にいろいろありますが、ごまかさないです。ご冥福を祈ります。

#### (4) 田村喜子先生の活動記録（理事長としての主な足跡と御功績）

##### ◎土木の応援団長・田村喜子先生のもうひとつの功績

土木事業や土木技術者の心意気をテーマとしたノンフィクション作家・田村喜子先生が今年3月24日、ガンで御逝去された。

土木の応援団長を自認され、落ち込んでいる土木技術者に夢と元気を与えつづけられた田村先生の死は、土木建設業界にとっては大変に痛手であり悲しいニュースである。

田村喜子先生が土木業界に果たされた数々の御功績については多くの方がよく知るところであるが、田村喜子にはもうひとつの余り知られていないようであるが大きな御功績がある。それは田村喜子先生の目指すものと竹林が構築し、その普及啓発に努めている風土工学の目指すものとは、根っ子は全く同じであり、その大略はほぼ重なることから、10人の設立発起人（沢田敏雄、谷川健一、菌田稔、高橋裕、他）の1人として風土工学デザイン研究所を設立に尽力され、設立後は理事長に就任され11年余、研究所の諸活動を支えてこられました。生まれて間のない何もない風土工学が今日、関係方面では知らない者がいないところまで導いていただきました。風土工学の普及啓発に大きな足跡を残されました。残された記録をたどって見ました。

平成9年（1997）2月	有岡正樹氏宅にて、まあいひ会。風土工学との出会い
平成13年（2001）6月29日	風土工学デザイン研究所臨時総会にて田村理事長就任
平成13年（2001）8月9日	風土工学デザイン研究所発足記念座談会
平成13年（2001）10月	「風土工学だより」第1号。創刊
平成13年（2001）11月2日	第2回風土工学シンポジウム 中央大学駿河台記念館 「風土と地域づくり—21世紀の地域づくりは郷土と風土の復権から—」 竹林征三、高橋裕、田村喜子、菌田稔、谷川健一、中村和郎
平成13年（2001）11月16日	北上市創作民話、最優秀賞受賞決定 「鬼翔平物語」 田村喜子・竹林征三共著
平成14年（2002）4月20日～21日	奥尻島現地風土視察
平成14年（2002）5月3日	田村喜子著「土木のこころ」発行。山海堂
平成14年（2002）6月14日	第3回風土工学シンポジウム 中央大学駿河台記念館。「地域づくりに風土の美学を求めて」 桑子敏雄、谷川健一、力丸光雄、高橋裕、田村喜子、竹林征三
平成14年（2002）6月15日	風土工学デザイン研究所第1回理事会・総会

平成 14 年 (2002) 7 月 1 日	千代田区神田錦町 1 丁目 2 3 番地に移転
平成 14 年 (2002) 9 月 27 日	風土工学デザイン研究所第 2 回理事会・総会
平成 14 年 (2002) 9 月	「風土工学だより」第 5 号より田村喜子「心の風土記」シリーズ巻頭連載開始。
平成 14 年 (2002) 11 月 10 日～12 日	富山、常願寺川シンポジウム 高橋裕、田村喜子、竹林征三 講演
平成 15 年 (2003) 5 月 8 日～9 日	野洲川改修現地 (守山市) 取材調査、金屋敷忠儀さんヒアリング (忍見随行)
平成 15 年 (2003) 6 月 20 日	第 4 回風土工学シンポジウム 中央大学駿河台記念館。田村喜子主催者挨拶 「“ものづくり” と風土工学」
平成 15 年 (2003) 6 月 27 日～29 日	第 10 回まーいい会 函館現地視察 函館山、男爵資料館、大沼、立待岬、他
平成 15 年 (2003) 9 月 29 日	風土工学デザイン研究所第 3 回理事会・総会
平成 15 年 (2003) 11 月 24 日	由良川新・深発見——川との共存を考える講演会—— 福知山市民会館 田村喜子理事長 パネラーとして出演
平成 16 年 (2004) 3 月 6 日	室蘭工業大学 SVBL 講演会に参加 「感性工学」と「風土工学」
平成 16 年 (2004) 6 月 25 日	第 5 回風土工学シンポジウム 中央大学後樂園 キャンパス 「“治山・治水” と風土工学」 田村喜子主催者挨拶
平成 16 年 (2004) 7 月	昭和新山現地風土視察
平成 16 年 (2004) 7 月 28 日～30 日	長崎・福岡前原道の駅 忍見随行
平成 16 年 (2004) 8 月 5 日 (8 月 4 日～6 日)	田村喜子著「野洲川物語」サンライズ出版より発行。8 月 5 日、野洲川放水路竣工式
平成 16 年 (2004) 8 月 20 日	第 6 回風土工学シンポジウム 中央大学駿河台記念館、田村喜子主催者挨拶 「風土文化の“道づくり” — “みち” の“みらい” を考える—」
平成 16 年 (2004) 8 月 24 日	自己復元緑化工法現地施工指導 (桂沢ダム)
平成 16 年 (2004) 8 月 24 日～27 日	焼尻島・天売島 オロロンライン現地風土視察
平成 16 年 (2004) 9 月 9 日	感性工学会総会にて「風土を見つめる感性を育む」(ブレーン出版) が感性工学会出版文化賞を受賞。田村喜子他共著

平成 16 年 (2004) 9 月 27 日～28 日	出雲地方、松江周辺現地風土調査
平成 16 年 (2004) 10 月 1 日	風土工学デザイン研究所第 4 回理事会・総会
平成 16 年 (2004) 10 月 5～6 日	盛岡市、北上川・仙台市現地風土調査
平成 16 年 (2004) 10 月 13～22 日	河川環境米国西部調査団 (団長・高橋裕) として田村喜子理事長参加し米国各地の風土調査を行う
平成 17 年 (2005) 7 月 1 日	第 7 回風土工学シンポジウム 北海道大学学術交流センター 「これからの北海道の社会資本を考える」 田村喜子主催者挨拶
平成 17 年 (2005) 7 月 22 日	第 8 回風土工学シンポジウム 中央大学駿河台記念館、田村喜子主催者挨拶 「日本文明と土木そして風土」
平成 17 年 (2005) 9 月 30 日	風土工学デザイン研究所第 5 回理事会・総会
平成 17 年 (2005) 11 月 7 日～9 日	函館 (泊) → 丘珠、札幌泊、現地風土調査
平成 17 年 (2005) 12 月 8 日～10 日	長崎・福岡、九州国立博物館、現地風土調査
平成 18 年 (2006) 2 月 4 日	黒部市・宇奈月町合併記念イベント「電源開発の偉業を称える講演会」に田村喜子先生参加
平成 18 年 (2006) 5 月 20 日 (5 月 19 日～21 日)	第 9 回熊本風土工学シンポジウム 熊本市役所 14 階大ホール 「加藤清正の築城と治水—その風土と地名—」 於：熊本市。田村喜子主催者挨拶
平成 18 年 (2006) 6 月 8 日～10 日	滝上公園芝さくら、釧路、知床、網走。オシニコシンの滝等現地風土視察
平成 18 年 (2006) 9 月 22 日	第 10 回風土工学シンポジウム 中央大学駿河台記念館 「美しい日本の国土の復権を！—“国土づくり” と “人づくり” —」 田村喜子 主催者挨拶
平成 18 年 (2006) 9 月 23 日	風土工学デザイン研究所第 6 回理事会・総会
平成 18 年 (2006) 9 月 23 日	風土工学十周年記念祝賀会 学士会館
平成 18 年 (2006) 11 月 23 日～24 日	五十嵐日出夫先生 お別れ会。田村、竹林出席
平成 19 年 (2007) 8 月 26 日～30 日	利尻・礼文島現地風土視察 利尻 (26 日泊)、礼文 (27 日泊)、稚内 (28、29 日泊)
平成 19 年 (2007) 2 月 21 日～23 日	淡路島防災フォーラム—明日の地域づくりを考える— 洲本市文化体育館・文化ホールにて 田村喜子理事長あいさつ (2 月 23 日)

平成 19 年 (2007) 9 月 21 日	第 11 回風土工学シンポジウム 星陵会館 後世に残す社会資本と国土——国土学と風土工学のすすめ—— 田村喜子理事長主催者挨拶
平成 19 年 (2007) 9 月 21 日	風土工学デザイン研究所第 7 回理事会・総会
平成 20 年 (2008) 2 月 8 日	理事長宅
平成 20 年 (2008) 3 月 6 日～8 日	3 月 7 日 県立淡路夢舞台国際会議場 「あわじ歴史浪漫風景街道フォーラム——未来に残したい淡路の風景を考える——」のパネル討論「地域協働による淡路の原風景の創成について考える」で田村喜子理事長がパネリストとして参画
平成 20 年 (2008) 7 月 21 日～26 日	稚内 (泊)、旭川 (泊)、札幌 (泊)、室蘭 (泊)、小樽 (泊) 現地風土調査
平成 20 年 (2008) 8 月 24 日	室蘭港、海上風土現地視察
平成 20 年 (2008) 9 月 26 日	風土工学デザイン研究所第 8 回理事会・総会
平成 20 年 (2008) 9 月 26 日	理事長宅
平成 20 年 (2008) 10 月 17 日～19 日	熊本
平成 21 年 (2009) 9 月 25 日	風土工学デザイン研究所第 9 回理事会・総会
平成 21 年 (2009) 12 月 11 日	「風土工学だより」第 35 号、 田村喜子「心の風土記」シリーズ (第 31 回) で中断
平成 22 年 (2010) 9 月 7 日	河川環境管理財団より河川整備基金助成事業成果表彰状受賞 田村喜子代表 「疏導要書に見る成富兵庫の治水評価に関する調査」
平成 22 年 (2010) 9 月 22 日	風土工学デザイン研究所第 10 回理事会・総会
平成 23 年 (2011) 9 月 30 日	風土工学デザイン研究所第 11 回理事会・総会 田村喜子理事長退任、名誉会長兼顧問就任
平成 24 年 (2012) 3 月 24 日	田村喜子先生逝去
平成 24 年 (2012) 3 月 30 日	田村喜子先生告別式 (麻布山善福寺にて)

毎年の風土工学デザイン研究所理事会・総会に於いて、田村喜子先生より特別講話を頂いてきました。又、毎年恒例の新年のダルマの目入れ、歓迎会、暑気払い等々。  
毎年 6 月～7 月に開催される日本感性工学会・風土工学部の研究部会の研究発表会には参加して頂き、御講評等、御指導して頂きました。

## (5) 田村喜子先生有り難うございました

### 田村先生が風土工学デザイン研究所に刻していただいた遺徳

追悼の辞 風土工学デザイン研究所・前理事長田村喜子先生のご逝去を悼み、生前の当研究所の発展に尽くされたご功績に対し、改めて深甚の御礼を申し上げます。

田村喜子先生は創設間もない平成12年(2001)6月から平成23年(2011)9月まで11年余の長きにわたり理事長を引き受けていただき、高所から、我々・会員および所員を御指導いただきました。

当研究所は設立したとは言え、何もないゼロの状態からのスタートでした。

その組織が北海道から沖縄まで全国各地からの要請にこたえて、その地の風土を活かした、誇りうる地域づくりに何らかの貢献させていただくことが出来たのも「私は土木技術者の応援団長よ」と「コンクリートから人へ」というキャッチフレーズで、「無駄な土木」という世の風潮で落ち込んでいる土木技術者を励ましていただいた田村喜子先生の温かい人柄・御人徳のお陰であると深く感謝申し上げます。

田村先生が私共の風土工学デザイン研究所に果たされた功績は多大であり、挙げればきりがありませんが、私にとっては以下の6つの遺徳は忘れてはならないと思っております。

1. 田村先生は敵をつくらず、接する方が皆、田村先生の人徳に惹かれて、田村ファミリーになってしまいます。田村先生には、人を惹き付ける不思議な魅力といますか魔力といますか、そんな力があります。私はなかなか他人に自分の本意が伝わらず、理解してもらえない結果、心ならずも敵を作ってしまうところがあります。しかし、風土工学デザイン研究所としては、田村先生が理事長の座にいていただいているお蔭で、いつのまにか敵がいなくなっていることです。
2. 田村先生には、わが組織のために、本職の作家の智恵を幾つも授けていただきました。たとえば、小説『野洲川物語』を執筆していただきました。絵本『鬼かけっこ物語』につきましては、私がつくった物語の骨組が、田村先生の手によって素晴らしい物語に変身し、創作民話の公募で、最優秀賞をいただくことができました。言葉の重要性、言い回しの重要性、一語一語推敲を重ねて文章を書くという物書きの心を、実体験させていただきました。風土工学デザイン研究所の核は「風土文化」であり、文章がすべての基本です。
3. 田村先生には、風土を見つめる視点を教えていただきました。「風土工学だより」の巻頭言で連載された「心の風土記」を読んだ方は、すぐにご理解いただけると存じます。田村先生は、京都のど真ん中で育ってこられました。京都の奥深い風土文化を見つめる感性をお持ちでらっしゃいます。田村先生は、京都の風土文化が服を着て歩いている方です。私は全国各地の田舎を、田村先生の風土を見つめる感性で見つめれば何かが見えてくるに違いないと、七転八倒しているところです。

4. 田村先生の随行をさせていただき、全国各地、色々なところに行かせていただきました。思い出すものとしては、利尻、礼文、天売、焼尻、奥尻島等、二度と行けそうにないところがあります。全国どこへ行っても、行くところ行くところで大歓迎を受け、いずれも楽しい思い出となって胸に残っております。
5. 田村先生は、風土工学デザイン研究所の歴史を作ってくれました。11年の間に10回の風土工学シンポジウムをはじめ、多くの企画を成功裏に終えることができたこと。田村先生のお力添えがなかったら、到底実現し得なかったと思います。風土文化の達人は、土木といえば風土文化を理解しない輩だという先入観を持たれることがあったように思うのですが、田村先生とお話されると、一瞬にして偏見がなくなるのです。
6. 田村先生の交流の広さと人徳で、先生の周りには多くの有徳の士が集まっておられます。それらの多くの方と知り合いになれたことは、何にも代えがたい、風土工学デザイン研究所にとっても、私個人にとっても、大切な財産でございます。
7. 田村先生が当研究所に残してくれたもので忘れてはならないものに入口にかかる表札があります。先生はこの表札を揮毫した当時を振り返り『理事長としての最初の仕事は、徳山ダム建設現場から製材して送られてきた、私の身長ほどもある板に「特定非営利活動法人 風土工学デザイン研究所」と墨筆することだった。たつぷりと墨汁を含ませた筆を手にしたとき、テレビのニュースで見た光景がダブった。建設省が国土交通省と改名して、扇千景大臣が正面玄関に取り付ける大きな表札を墨書している光景だ。巧拙は別として、年の功なら大臣にひけは取らないと腹を据わらせた。実をいうと、筆の運びで2ヶ所ほど失敗したが、板は1枚しかなくて、書き直しは許されなかった。拙筆の表札はいまも事務所の入り口ドアに幅を利かせていて、見るたびに冷や汗をかいていつ。』と述べておられる。表の看板の裏には見えない研究所への思いが秘められています。

現在、「コンクリートから人へ」をスローガンとする民主党政権に代わり、わが組織もこれまでにない苦境のど真ん中にあります。田村先生の看板でこれまで育てていただいた当研究所を、潰すわけにはまいりません。

私としては、田村先生の当研究所に残してくれました目に見えない数々の財産を大切に守っていきたくと存じますが、現下の厳しい状況の中で大変でございます。

田村喜子先生が当研究所に注いでいただいた熱い思いを忘れることなく胸に抱き、今後とも社会に貢献してまいりたいと存じます。

田村喜子先生本当に有難うございました。合掌。(1894文字)

風土工学デザイン研究所理事長 竹林征三

## 風土工学だよりへの投稿募集

風土工学だよりは、当研究所の活動内容について会員の皆様にお知らせすることが第一の主題ですが、会員相互でつくる情報誌（情報交換・交流の場）でもありたいと考えております。

風土工学（もしくは風土）に関わる研究、調査報告、書評、出版ニュース、事例報告、会員の皆様の近況、話題・随筆など随時募集しております。ご投稿はメールでも受け付けます。ご投稿をお待ちしております。

投稿・問い合わせ先：風土工学デザイン研究所事務局  
(TEL：03-5283-5711 E-mail：[design@npo-fuufu.or.jp](mailto:design@npo-fuufu.or.jp))

### ▶▶▶▶ 編集後記 ◀◀◀◀

- 「風土工学だより」発刊以降、これまで風土工学の設立発起人であり、風土工学の普及啓発に多大な御甚力をいただいた“五十嵐日出夫先生を偲ぶ特集号”（第〇号）を発刊させていただいており、今回、風土工学デザイン研究所の前理事長田村喜子先生の遺徳を偲ぶ特集号は2人目の特集号となりました。本企画に対し、田村先生と御親交が厚かった方々から田村先生の人柄・人徳が偲ばれる玉稿が寄せていただきました。心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

田村先生は10名の発起人の1人として風土工学デザイン研究所を設立され、設立後は理事長として11年余研究所を育てていただきました。この特集号を機会に当研究所における田村先生の11年の主な活動記録を整理して見ました。又研究所の所員全員で田村先生を偲ぶ“いろは歌留多”を作って見ました。田村先生が私共に残してくれたメッセージを胸に、誇りうる地域づくりに貢献して参りたいと存じます。

- 2010年10月にNTT出版から発刊予定の『風土千年・大震災復興論』は3.11東日本大震災・大津波と福島第一原発事故は日本中を震撼させた。日本人の復興に向けての心根、遺伝子を覚醒させた。しかし、震災後早や1年半を過ぎようとしているが、未だ復興への力強い槌音は聞こえてこない。復興に向けて何が重要なのか、「千年風土をつくる」ビジョンが欠けている。文明と文化の視点・風土工学の視座が欠かせない。

本書は、災害の世紀の処方箋である風土千年復興論を順序立てて平易に説き起こす内容になっています。災の世紀に突入した今日、復興を考える知恵が満載されています。是非とも多くの方に読んで頂きたいです。

事務局

## 風土工学だより 第45号

平成24年09月27日印刷

平成24年09月31日発行

**発行者** 特定非営利活動法人 **風土工学デザイン研究所**  
〒101-0054 東京都千代田区神田錦町1丁目23番地  
宗保第2ビル7階  
TEL：03-5283-5711 FAX：03-3296-9231  
E-mail：[design@npo-fuudo.or.jp](mailto:design@npo-fuudo.or.jp)  
URL：<http://www.npo-fuudo.or.jp>

**装丁・印刷** **株式会社 サンワ**  
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-11-8